

2. 評価グリッド (和文)

評価グリッド (実績とプロセス)

実績の検証	投入の実績	<ul style="list-style-type: none"> 投入は計画どおりに行われたか 	<p><日本側></p> <p>a. 日本人長期専門家派遣</p> <p>b. 日本人短期専門家の派遣</p>	<p>1. 日本人専門家の派遣</p> <p>a. プロジェクト運営管理に関する日本人専門家の派遣</p> <p>PDMにおいて、チーフアドバイザー1名、アカデミックアドバイザー1名、プロジェクト調整員3名の日本人専門家のSEED-NET事務局への派遣が計画されていた。</p> <p>2007年3月現在、上記ポジションに対し、累計11名が派遣されている。</p> <p>プロジェクト準備期間より継続して、チーフアドバイザーは2003年8月まで、アカデミックアドバイザーは2004年9月まで長期専門家として派遣された。以降、両名は日本への一時帰国あるいは往復を繰り返しながら派遣されている。</p>	<p>b. 日本人短期専門家の派遣</p> <p>プロジェクト実施に関する日本人教授の派遣については、</p> <p>実績 2007年3月現在: 共同研究関連活動のための参加大学訪問 85人回 分野別セミナー他のための訪問 204人回 合計 289人回</p>			<ul style="list-style-type: none"> 実績 2003～2005年(終了): 90品目 <p>PDMあるいは戦略ペーパーには計画について明記されていない。(注: 準備期間中に合計 THB2,813,308相当のIT機器が13MI(7HI+6SI)が支給された。)</p>	プロジェクト活動費(セミナー、研究、小額研究機材)を含めたプロジェクト経費実績は以下のとおり (単位: 千円)	<table border="1"> <thead> <tr> <th>年度</th> <th>2003</th> <th>2004</th> <th>2005</th> <th>2006</th> <th>2007(計画)</th> <th>合計</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>執行済額 (2007年度は計画額)</td> <td>158,437</td> <td>383,074</td> <td>490,827</td> <td>617,895</td> <td>623,558</td> <td>2,273,791</td> </tr> </tbody> </table>	年度	2003	2004	2005	2006	2007(計画)	合計	執行済額 (2007年度は計画額)	158,437	383,074	490,827	617,895	623,558	2,273,791	(注: プロジェクト実施期間において、IT拡張コースウェア開発のために合計 US\$48,845、13大学(8HI+5SI)より14名が充当された。)						<ul style="list-style-type: none"> プロジェクト支援業務のためのタイのプログラムオフィサー7名が配置されている。
年度	2003	2004	2005	2006	2007(計画)	合計																									
執行済額 (2007年度は計画額)	158,437	383,074	490,827	617,895	623,558	2,273,791																									
c. 機材供与(2005年まで)	プロジェクト活動費	<p>1) 修士ならびに博士課程のための奨学金</p> <p>2) 留学生のCRならびに論文研究費</p> <p>3) アドバイザーの日本またはMIへの短期訪問</p> <p>4) FWS やワークショップ、会議</p>	e. SEED-Net事務局経費																												

<p><アセアン諸国側> a. 必要な事務なら びに教員のアサイ ン</p>	<p>帳簿ならびにヒアリ ングによる実績</p>	<p>JICA とタイ大学省(現在のタイ高等教育委員会:CHE)との R/D によれば、以下の人員が配置される予定であつた。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 合同調整委員会 (JCC)議長 ・ プロジェクトマネージャー ・ 参加大学のプロジェクトマネージャー: (1) タイの参加大学の学長または指名された代表者、(2) タイの参加大学の工学部の学部長あるいは指名された代表者 ・ 事務職員: (1) プログラムオフィサー、(2) 秘書、(3) その他必要なスタッフ <p>2007 年 5 月末現在、これらは計画通り任命されている。人数ならびに費用負担については、各項目別に該当する箇所に記入。</p> <p>一方、タイを除く各 MI については、次のとおり。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 大学によって人数は異なるものの、必要な事務員はアサインされている。しかしながら作業の質については大学によってかなりの差が認められる。 ・ 必要な教員についても、大学によって人数は異なるものの、アサインされている。 <p>多くの参加国ならびに参加大学が金銭的あるいはその他のコストシェアをしており、その項目ならびに金額は年々増加の一途をたどっている。主な項目は次のとおり。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 人的稼働ならびにスペースの提供 ・ 延長期間に関する授業料ならびに滞在費 (これまで、7 参加大学が延長期間について 50~100%の補助金の供与を表明している) ・ 奨学金 (シンガポール) の 2 つの参加大学は修士号ならびに博士号に対し奨学金を供与している) ・ 教職員に関する諸経費 (ほとんどの MI が、地元で行われる FWS に対して、人的負担あるいは一部の費用負担をしている) ・ CR プロジェクトファンド
<p>b. プロジェクト活動費の一部負担</p>		<ul style="list-style-type: none"> ・ 事務所スペースについては、当初から現在まで、計画どおりタイのチュラロンコン大学内の施設が提供されている。 ・ 事務局長、副事務局長については、主にタイのチュラロンコン大学教官が兼務しており、謝金等一部を日本側が負担している。(2005 年秋より、副事務局長 1 名はタイ側全額負担) ・ プロジェクト資金により、またおおよび秘書 2 名がタイ政府によって雇用されている (プロジェクトが一部補填)。 ・ 国内通話代、水道光熱費、一部人件費をタイ側が負担している。 ・ 2004 年度までに終了しており、中間評価どおりである <p>日本アセアン基金から 551,535 ドルの予算が配分されており、プロジェクト準備期間を含め 2001 年から 2004 年までの間に修士プログラムへの奨学金 9 件、研究プロジェクト 6 件、研究セミナー 5 件に対し 316,073.56 ドルを供与された。</p> <p>投入実績は、予定された金額のおおよそ 57%に相当する。予算との差異は、主に奨学金のキャンセルによる。</p>
<p>c. 事務所スペースと SEED-Net 事務局経費の一部負担 (CU)</p>		<p>プロジェクト初期においては、様々な活動を達成するためのスキーム、構成、プロセス等は必ずしも確定されておらず、試行錯誤にて行われた面もある。これらの貴重な経験と MI およびプロジェクト事務局らの努力に基づいて、スキーム、構成、プロセス等がプロジェクト前半に確立されてきたものである。これより、プロジェクト後半では、ほとんどの活動が PDM 記載のとおりに達成された。</p> <p>スキーム、構成、プロセス等は未だに改善途中にあり、いくつかさらに改善を要する項目も存在する。一つは現況の延長長にあって比較的達成しやすいものであるが、他方、プロジェクトの自立発展性の見地より、本質的な変革に関するものである。これらの詳細は各活動の実態とともに、投入および成果に記載されている。</p>
<p>活動の実績 ・ 活動は、計画どおりに行われたか</p>	<p>MI における活動内容とメリット、課題と提言等</p>	

			<p>アセアン諸国での MA</p> <p>HI: 問題点として、つぎのようなものがある。</p> <ul style="list-style-type: none"> • 評価・競争力の確保 - 改善案として-プロモーション(地域会議等、出版機会)、非 MI の取り込み • 学生間の基礎学力差、言語コミュニケーション能力の違い- 改善案として、MI における英語重視、入学前研修等 • 財政難等の克服- 改善案として、産業界・他ネットワークとの連携強化、研究課題の厳選等 <p>SI: メリットあるいは問題点として、つぎのようなものがある。</p> <ul style="list-style-type: none"> • 教員の学位取得による資質向上および MI 間、JSU とのネットワークが強化された。反面、適切な候補者の選定や、学位取得後の元 SI への教員としての復帰が保証されないことが問題となっている- 改善案としては、学生とのコンタクトの保持と奨学金の確保。 • 最優秀学生は欧米への留学に関心を示す。一部、台湾、韓国、韓国を含む)- 改善案はアセアン諸国での MA、日本での Ph.D を魅力あるものにする。 <p>サントインチプログラムによる Ph.D</p> <p>メリットあるいは問題点として、つぎのようなものがある。</p> <ul style="list-style-type: none"> • HI: 教育を通じて、プログラムの質の向上した。課題としては、最優秀学生は他奨学金に流れること、1年間の日本滞在の期間(短期、長期)、3年間の Ph.D は短い(事務手続きに2-3ヶ月を要する)- 改善案として、期間の見直し(複数分割)および MA&Ph.D 一元化による期間短縮等 • SI: 教員の学位取得による資質向上および MI 間、JSU とのネットワーク強化と共同研究の増加、問題として、SI からの候補者不足、修了後の復帰が保証されぬこと、最優秀学生は欧米への留学に関心を示すなど- 改善案として、コンタクトの保持と奨学金の確保、アセアン諸国での MA、日本での Ph.D を魅力あるものにする。 <p>サントインチプログラムのための日本への短期訪問</p> <p>メリットとして、つぎのようなものがある。</p> <ul style="list-style-type: none"> • 共同学生指導による質的向上、アカデミックな雰囲気、施設利用の研究経験、会議出席と出版の機会、幅広い資料アクセス、文化的経験(プロ研究者としての態度)、JSU・研究機関、企業等とのネットワーク等 <p>問題点として、つぎのようなものがある。</p> <ul style="list-style-type: none"> • 1年滞在は長い- 改善案として、期間の見直し(複数分割) • 奨学金対象者の数が限定- 改善案として、奨学金の確保 • 研究機材の相違- 改善案として、中古機材の寄付 • JSU と HI 教員との間の意思の疎通- 改善案として、ネットミーティング、TV 会議 <p>日本での Ph.D</p> <p>メリットとして、つぎのようなものがある。</p> <ul style="list-style-type: none"> • 学位取得スタッフによる質的向上、施設利用の研究経験、会議出席と出版の機会、幅広い資料アクセス、文化的経験(プロ研究者としての態度)、JSU、SI、非 HI とのネットワーク等 <p>問題点として、つぎのようなものがある。</p> <ul style="list-style-type: none"> • 奨学金対象者の数が限定- 改善案として、MA&Ph.D 一元化 • 共同指導が不適切- 改善案として、SI、HI 指導者の取り込み
--	--	--	---

			<p>共同研究</p> <p>メリットとして、つぎのようなものがある。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 共同指導による研究面の質的向上、研究効率の拡大(スケジュール化)、他資金源(教育省、NEDO、私企業)の確保等 <p>問題点として、つぎのようなものがある。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 知的財産権(関連機関間における)- 改善案として、知的財産権に関する合意書 ● 研究トピックの関心の相違(HI, SI, JSU)、産業界、コミュニティのニーズの多様さ- 改善案として、地域の関心にマッチした課題選定 <p>日本からの指導教員の派遣</p> <p>メリットとして、つぎのようなものがある。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 教育および研究面の質的向上、研究効率の拡大、アカデミックな雰囲気、学位取得プログラムの魅力、ネットワーク <p>問題点として、つぎのようなものがある。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 訪問時期、タイミングのマネジメント(JSU 教員、HI)、期間の短さ、頻度の少なさ- 改善案として、引退教授陣、研究室所属関係スタッフ等の動員がある。 <p>分野別セミナー</p> <p>メリットとして、つぎのようなものがある。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● JSU, HI, SI との間の調整、進捗評価と研究成果普及の機会、将来の共同研究の形成、MI 間でのベンチマーキング設定(達成、標準、改善点)、科学者社会への参加、国際会議主催への信用、国際ネットワーク <p>問題点として、つぎのようなものがある。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 開催期間の短さ(多くのアジェンダと2日という期間)、参加者が限定される。- 改善案として、開催期間の柔軟な対応(分野毎)、非 MI・企業・コミュニティの巻き込み、共同開催、地域・国際会議への昇格 <p>日本への短期訪問</p> <p>メリットとして、つぎのようなものがある。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 指導による研究面の質的向上、関係スタッフの巻き込み(JSU, HI, SI)と交流、共同研究討議(進捗、将来計画)、文献へのアクセス、セミナー参加機会 <p>問題点として、つぎのようなものがある。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 訪問期間・頻度が不十分- 改善案として、資金源の多様化、JICA 研修プログラムとの連携等 ● 地域で異なる必要日当額 <p>MI 間での短期訪問</p> <p>メリットとして、つぎのようなものがある。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 指導による研究面の質的向上、関係スタッフの巻き込み(JSU, HI, SI)と交流、共同研究討議(進捗、将来計画)、文献へのアクセス、セミナー参加機会 <p>問題点として、つぎのようなものがある。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 訪問時期、スケジュールの調整等不適切- 改善案として、緊密なコミュニケーション <p>プロモーション訪問</p> <p>メリットとして、つぎのようなものがある。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● HI プログラムの魅力増加、将来学生へのインタビュー、将来研究討議、SI 状況の理解、相手国大使館との関係(MOU 等)にも影響 <p>問題点として、つぎのようなものがある。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● MI 学生の英語力、短い訪問期間、ミャンマーの場合は訪問困難- 改善案として、同窓会組織の活用、メディア、展示会等の併用
--	--	--	--

<p>成果の達成度</p> <ul style="list-style-type: none"> アウトプットは計画通り実現されたか 	<p>(1)成果1の「大学院学位取得を通じて教員の質が改善される」は達成される見込みか</p>	<p>1.1 SEED-Netで修士号を取得した教員数が2008年までに284人増える</p> <p>1.2 SEED-Netで博士号を取得した教員数が2008年までに140人増える</p>	<ul style="list-style-type: none"> 計画値：計画人員数は計284名であった。この数値は以下の理由により、プロジェクトの終了時点では達成されないうが、長期的には達成されると思われる。 <ul style="list-style-type: none"> これまでの総入学者総数は2007年の計画を含めて310名である 修士を取得するために2年かかる これまでのドロップアウトが何人かである(これまでに8名でいる) 過去においては、多くの修士取得者は教員となっているが、すべて教員になるとは限らない 修士取得者のうち調査時点で教員となっていない者の多くは博士課程に進んでいる 計画値：計画人員数は計140名であった。この数値は以下の理由により、プロジェクトの終了時点では達成されないうが、長期的には達成される可能性はある。 <ul style="list-style-type: none"> これまでの総入学者総数は2007年の計画を含めて141名である 修士を取得するために最低3年かかる これまでのドロップアウトが何人かである(これまでに1名でいる) 博士課程においては稀な事例となると思われるが、全ての博士号取得者が教員となるとは限らない
	<p>(2)成果2の「ホスト大学の大学院プログラムが向上する」は達成される見込みか</p>	<p><補足> SIの教員の質が向上したとSIの教員が評価する</p> <p>2.1 プロジェクトの支援でHIに受け入れられた学生の総数が、それぞれの分野で年に、修士課程は5名、博士課程は2名となる</p> <p>2.2 プロジェクトの支援でなされた共同研究ならびに論文研究が2008年までに213なる。</p> <p>2.3 プロジェクトに関するHIならびにJSUの教員が、受け入れ大学院のプログラムがプロジェクトによって改善されたと評価する</p>	<ul style="list-style-type: none"> SIの中では、卒業後帰国し教員とした活躍を始めた人数が異なる。それが少ない大学では現時点でこの評価は困難であると回答しているが、ある程度の人数が戻っている大学では教員の質が向上したと評価している。 計画値：それぞれの分野で年に修士課程は5名、博士課程は2名 この二三年の傾向によると9分野共、毎年修士課程入学者数は5名以上になっている。一方、博士課程入学者数は分野により2名以下の分野も、2名以上の分野もある。 2007年3月末現在までに実施された研究の数が170で、2007年に実施されると予想される研究が43であり、合計213となり、目標は達成される見込みである。 多くのHIが、教育技能、研究活動の質量、ニーズに合った教え方の開発、新たな分野のコースの開発、英語コースの開始、HIが教員スタッフ数、院生の熱心度、国際的ランキングなどのいくつかで改善あるいは向上したとしている。(ただしNUSを除く)また、国際的に学生を受け入れることで、コミュニケーションスキルが向上するという副次的効果もみられた。 国際ランキングについて、ロンドン高等教育調査の上位520大学(2006出版、評価基準:研究の質、修士就職、国際展望、教育の質の4項目、留学生割合と学部国際度の視点もこれらに含まれる)によると、いくつかは400位以内にある。例として、NUS (No. 19), NTU (No. 61), CU (No. 161), UM (No. 192), ITB (No. 258), UGM (No. 270), USM (No. 277), UP (No. 299), and DLSU (No. 392) JSU教員のアンケート結果によると、9割のJSU教員がHIの大学院プログラムがプロジェクトの開始前と比較して向上したと感じている。プロジェクトの実施によって研究成果が国際的な水準に近くなった大学や、博士課程のプログラム

<p>(3)成果3の「メンバー大学の共同活動と人的つながりが強化される」は達成される見込みか</p>	<p>3.1 MI間における共同研究、分野別セミナー、短期派遣ならびにその他のワークショップが研究の経験や成果を共有する場として利用される</p>	<p>運用が改善されコースワークが整備された大学もある。ただし学際的な領域では他分野との連携を強化する必要性も指摘されている。</p> <p>共同研究、分野別セミナー、短期派遣ならびにその他のワークショップなどのMI間における共同活動や人的繋がりが確立・強化されたが、自立発展するだけのネットワーク構造にはなっていないと判断される。</p> <ul style="list-style-type: none"> • FWSでは他のMIや教員の研究成果を共有できるだけでなく、新たな共同研究のトピックスについて協議できるよい場となった。またネットワークの構築にも役立っているとする意見が多数を占めた。しかしながら、その先の具体的な活動に結びついておらず、戦略や目的、参加者の範囲、テーマなどを見直す必要があるという意見も散見された。 • 共同研究では他のMIの教員と共同で研究アドバイザーを行っているため、経験を共有するいい機会になったという意見も多い。 • 一方、これらの共同研究、分野別セミナー、短期派遣について、SIを中心に改善を希望する声も多かった。 • (参考)分野別セミナーの開催頻度 2002~2006年計 76事例 • (参考)MI間短期訪問プログラムの実施実績 2002~2006年計 183事例
	<p>3.2プロジェクトに関与しているMIの教員が、MI間の共同活動や人的つながりが強化されたと評価する</p>	<ul style="list-style-type: none"> • ほとんどすべてのMIにおいて、MI間の共同活動や人的つながりが強化されたと評価した。 • 共同作業にて関係性とネットワークを維持できる。これは人的資源を共有して、教育・研究プログラムの拡張につながるものである、などコメントあり。 • 参考までに、JSU教員も、メンバー大学間の共同活動と人的つながりが強化されたと評価している。全般的に分野別セミナー、相互大学訪問、ミーティングなどを通じて各分野の人的ネットワークが形成されたと評価しており、中にはメンバー大学間の研究成果を持ち寄り、論文集の出版を行った例もある。ただしこのような事例はまだ少数であり、構築されたネットワークを通じて具体的な共同活動や研究に至ることが期待されており、分野を超えたネットワークを強化することが課題として指摘されている。
<p>(4)成果4の「情報配信システム、活動管理体制、コミュニケーションネットワークが確立される」は達成される見込みか</p>	<p>4.1 機能と責任が明確な組織が設立される <補足指標> • AUN/SEED-Netのフレームワークが規定されている • HI、SI、事務局、JCC、運営委員会の役割が明記され、適切に運営されている</p>	<p>情報配信システム、活動管理体制、コミュニケーションネットワークは確立されたが、自立発展していくまでにはいたっていないと判断される。</p> <ul style="list-style-type: none"> • 2001年4月にAUN、ASEAN Foundation、メンバー大学、JICAが、AUN/SEED-Netの組織的枠組みを規定した文書(Cooperative Framework)に署名した。この文書にはAUN/SEED-Netの目的、組織構造、メンバー大学、事務局、JCC、運営委員会の役割が明記されており、プロジェクトもこの規定にそって運営されてきた。 • 各役割は明確であり、適切になされていると評価する声が多かった。

<p>4.2 訪問などによるモニタリング活動が頻度と効果の面から適切になされる<補足指標></p> <ul style="list-style-type: none"> モニタリングの頻度、モニタリングの結果のフィードバックの仕組みと実績 	<ul style="list-style-type: none"> モニタリング訪問はプロジェクト品質保証としてのモニタリングスキームの一環をなすものである。AUN/SEED-Netは年次定例会議をHIスタッフおよび学生らと開催する。議題としては、全ての関連プログラム、学生との討論とラップアップ(学生より提起されたことについて、解決のために学部スタッフに喚起するもの)であり、アドバイザーと学部スタッフが討議するものである。いくつかのHIでは、新入生へのオリエンテーションを兼ねて、モニタリングミーティングを持つところもある。 各モニタリング訪問後には、レポートが作成され記録として残される。事務局はこの記録を問題履歴とするとともに、次回訪問時における解決度合いの確認資料とする。 	<ul style="list-style-type: none"> モニタリング訪問はプロジェクト品質保証としてのモニタリングスキームの一環をなすものである。AUN/SEED-Netは年次定例会議をHIスタッフおよび学生らと開催する。議題としては、全ての関連プログラム、学生との討論とラップアップ(学生より提起されたことについて、解決のために学部スタッフに喚起するもの)であり、アドバイザーと学部スタッフが討議するものである。いくつかのHIでは、新入生へのオリエンテーションを兼ねて、モニタリングミーティングを持つところもある。 各モニタリング訪問後には、レポートが作成され記録として残される。事務局はこの記録を問題履歴とするとともに、次回訪問時における解決度合いの確認資料とする。
<p>4.3 SEED-Netウェブサイトへの訪問者数が増える</p>	<p>2005年3月にSEED-Netウェブサイトが構築されて以来、ウェブサイトへの訪問者数が増えている。</p> <ul style="list-style-type: none"> ウェブサイトアクセス数: 累積計33万件以上 2007年3月時点 2005年(3月以降) 118,894 2006年 191,893 2007年(3月まで) 21,334 問い合わせ件数(eメール、電話、直接訪問) 計40件以上/年 メーリングリストメンバー数 676名 	<p>2005年3月にSEED-Netウェブサイトが構築されて以来、ウェブサイトへの訪問者数が増えている。</p> <ul style="list-style-type: none"> ウェブサイトアクセス数: 累積計33万件以上 2007年3月時点 2005年(3月以降) 118,894 2006年 191,893 2007年(3月まで) 21,334 問い合わせ件数(eメール、電話、直接訪問) 計40件以上/年 メーリングリストメンバー数 676名
<p>4.4 メディアで取り上げられた数が増える</p>	<p>メディアで取り上げられた数は増えている。</p> <ul style="list-style-type: none"> プレス取り扱い数 2002年 1件 2003年 2件 2004年 4件 2005年 30件 2006年 26件 <p>累積計63件 2007年3月時点</p>	<p>メディアで取り上げられた数は増えている。</p> <ul style="list-style-type: none"> プレス取り扱い数 2002年 1件 2003年 2件 2004年 4件 2005年 30件 2006年 26件 <p>累積計63件 2007年3月時点</p>
<p>4.5 通常の郵便と電子的手段(メーリングリスト)によって配信されるSEED-Netニュースレターの数が増える</p>	<ul style="list-style-type: none"> SEED-Netニュースレターは2005年から、通常の郵便と電子的手段(メーリングリスト)によって毎年4回づつ配信されている。2005年4回、2006年4回 計8回 ニュースレターは毎回500部印刷され配布(郵送、直接配布)されている。 メーリングリストによる配布は、2005年においては243で、2007年においては676に増加している。 	<ul style="list-style-type: none"> SEED-Netニュースレターは2005年から、通常の郵便と電子的手段(メーリングリスト)によって毎年4回づつ配信されている。2005年4回、2006年4回 計8回 ニュースレターは毎回500部印刷され配布(郵送、直接配布)されている。 メーリングリストによる配布は、2005年においては243で、2007年においては676に増加している。
<p>4.6 プロジェクトに関与しているMIならびにJSUの教員が、情報配信システム、活動管理体制、コミュニケーションネットワークがきちんと設立されたと評価する</p>	<ul style="list-style-type: none"> 各大学はうまく確立されたと評価している。 特に事務局に対する賞賛の声は随所で聞かれた。しかしながら、これは現在の事務所への依存度が高いことを示し、自立発展のためには、新しいスキームの確立が必要である。 JSU教員は、情報配信システム、活動管理体制、コミュニケーション・ネットワークが確立したと評価している。具体的には、HPの立ち上げや事務局の体制が強化され機能している点が評価されている。 	<ul style="list-style-type: none"> 各大学はうまく確立されたと評価している。 特に事務局に対する賞賛の声は随所で聞かれた。しかしながら、これは現在の事務所への依存度が高いことを示し、自立発展のためには、新しいスキームの確立が必要である。 JSU教員は、情報配信システム、活動管理体制、コミュニケーション・ネットワークが確立したと評価している。具体的には、HPの立ち上げや事務局の体制が強化され機能している点が評価されている。

プロジェクト目標は達成されると見込めるか	目標の「参加大学(MI)の教育および研究能力が、参加大学間の活発な交流および国内支援大学(JSU)との協働関係を通じて向上する」は達成される見込みか	<ul style="list-style-type: none"> • (SEED-Net)で修士号を取得した教員数が2008年までに284人増える • (SEED-Net)で博士号を取得した教員数が2008年までに140人増える 	<p>—成果1と同じ指標なので、成果1でカバーする。</p> <p>—成果1と同じ指標なので、成果1でカバーする。</p>
		元SEED-Netの学生がSIにおける教育ならびに研究能力が向上したと評価する。	<p>まだそれほど卒業生が多くないので、SIとして教育と研究能力が向上したかどうかは今後の経過により、卒業生へのインタビューでは、留学で学んだ知識や経験を教育・研究指導やカリキュラム開発に役立てているので、徐々に向上すると考えられる。</p> <p>現状においても、学問への取り組み態度に影響を与えることにより、教育研究活動が活発となった。これにより、教育省、科学技術省よりの奨励金の獲得、国際的評価ランキングの向上、日本他海外との提携および教育研究機会の増加につながっているとの声もある。</p>
		<ul style="list-style-type: none"> • プロジェクトに関する出版物、会議における研究発表の数が増える 	SEED-Netの活動によって、研究発表の数が増加したと評価している。背景として、上記、学問への取り組み態度への影響および波及効果として研究発表数は増加につながっている。
		<ul style="list-style-type: none"> • 留学生支援や研究ファンドにおけるMIならびにASEAN諸国によるコストシェアの額と割合が増える →この指標自体がMIの能力向上を表すことになるのか要検討(自立発展性あるいは成果レベルに落ちたほうがよいのでは?) 	<p>いずれのMIにおいても、Ph2以後の財源確保とコストシェアの重要性については、認識している。MIにおける授業料の免除およびSIでの旅費や研究費の一部負担等、それぞれの立場より、できる範囲内での対応を画策している。さらに、多くの場合は、政府の奨励策もあって外部リソースに目を向けている。すなわち、SEED-net内外の大学、政府関連機関、企業等との連携により、負担を軽減するとともに研究資金他を確保するものである。</p>
		<ul style="list-style-type: none"> • 海外からの学生を受け入れるために新しいカリキュラムや科目数が増加し、その内容が改善される 	プロジェクトによって初めて海外の留学生を受け入れ始めたので、彼らのニーズに合うようにコースワークを変更する、国内の事例や経験だけでなく国際的な事例や経験を取り入れた指導にシフトするなど、内容面で変化がみられる。SEED-netでの留学生受入のノウハウを着実に身に付けるなど副次的効果も見られる。さらに、国際化に合わせて、カリキュラムの内容に改善を加えるとともに、プログラムの多様化を図り、当初2より8プログラムに増加した例もある。
UM		<ul style="list-style-type: none"> • プロジェクトに関するMIとJSUの教員が、プロジェ 	研究能力の点は日本の大学教授との共同研究によって、研究内容、能力およびその質が向上したと多くの大学で評価している。教育の面でも、これまでさまざまな改善点があり、徐々に向上していると評価している。

上位目標は達成される見込みがあるか	上位目標の「産業界を活性化させる工学系の人材を育成し、アセアン諸国の長期的な持続的発展を確保する」は達成される見込みか	<p>クトによってMIにおける教育と研究能力が向上したと評価する</p> <ul style="list-style-type: none"> プロジェクトにより直接進められた以外の、MI、JSUならびに民間企業との間の共同研究の数が増える MIの卒業生あるいは教員の中でASEAN諸国での工学の研究開発活動に従事する人の数が増える ASEAN各国において、9の工学分野における高位学位を持つ人の数が増える MIとJSU間で大学間協定(MOU)のよくな、交流活動の数が増える 	<p>現状において産業界の人材向けに遠隔教育のプログラムを準備している例もある。このように徐々に産業界へ向けアプローチしていけば共同研究の数も増加すると見込まれる。他、では既に政府外郭団体、企業等とMOAを締結して共同研究を進めている例もある。</p> <p>他、多くの大学において、今後は研究成果を地域的課題(再生可能燃料、環境、防災他)の応用するとともに、産学連携を推進していくとしている。(共同研究、学生インターン等との交流)</p> <p>アセアン諸国における経済発展と高等工学教育の強化という社会的ニーズの高まりのなか、現在もその人数は増加していると考えているが、将来、修士や博士号を取得した人数が増加し、共同研究が活発化すれば、工学の研究開発活動に従事する人数がさらに増加すると考えている。防災、環境問題への緊急的対応等、地域における共通課題へのニーズの高まりが、この傾向に拍車をかけるであろう。</p> <p>学問への取り組み態度と取り巻く環境が変化すること、およびSIでの学位取得ニーズが高いこと、さらに、民間企業と共同研究が活発化することより、この傾向は強まると考えられる。</p> <p>CLMV諸国のSIのなかには、教員スタッフの質・量の改善により、MAコースを新設するとともにHIを目指すなど、規模の拡大を図るところもあり、研究開発に対応する従事者ニーズが生まれている。</p> <p>ほぼ全部のMIにおいて、プロジェクトの実施によって、他のMIのこのことを知る機会が増加した結果、積極的に他のMIとMOUを締結して交流活動を実施している。DLSU等、プロジェクトを開始する以前の1980年代から既にTITとMOUを締結し、共同研究など交流があったところもあるが、各大学とも共同研究の実施とネットワーク強化に影響により、MOUは着実に増加している。数件から多いところは、民間企業との提携を含めて30件近くに達するところもある。</p>	
実施プロセス	活動は計画どおりに実施されたか	<p>計画と実績の比較</p> <ul style="list-style-type: none"> アセアン諸国でのMA <ul style="list-style-type: none"> HI: ホスト大学として、計画どおりの活動により、所定の成果が達成された。 SI: 学生の送り出し大学として、計画どおりの活動により、所定の成果が達成された。 サドインチプログラムによるPhD <ul style="list-style-type: none"> HI: ホスト大学として、計画どおりの活動により、所定の成果が達成された。 SI: 学生の送り出し大学として、計画どおりの活動により、所定の成果が達成された。 サドインチプログラムのための日本への短期訪問 <ul style="list-style-type: none"> HI: ホスト大学として、計画どおりの活動により、所定の成果が達成された。 SI: 学生の送り出し大学として、計画どおりの活動により、所定の成果が達成された。 日本でのPh.D <ul style="list-style-type: none"> 計画どおりの活動により、所定の成果が達成された。 共同研究 <ul style="list-style-type: none"> 計画どおりの活動により、所定の成果が達成された。 		

			日本からの指導教員の派遣 計画どおりの活動により、所定の成果が達成された。 分野別セミナー 計画どおりの活動により、所定の成果が達成された。 日本への短期訪問 計画どおりの活動により、所定の成果が達成された。 MI間での短期訪問 計画どおりの活動により、所定の成果が達成された。 プロモーション訪問 計画どおりの活動により、所定の成果が達成された。
			フェーズ1における各国教育省の関与度はさほどではないが、フェーズ2の準備段階の協議から大学側は教育省を巻き込むように配慮しており、著しい成果を与えているなか、徐々にレベルが高まると期待できる。大学には運営方針や財政面で自治権があるため、教育省からMIに対して資金援助を取り付けるのは難しいようである。さらに、どこの国の教育省においても、高等工学教育の人材育成による、産業発展および当面する課題解決への貢献について、認識するとともに、産学連携の重要性とそれによる外部資金の調達においても、今後奨励していくということでは共通である。一部の国においては、科学技術省等省庁が、委託研究・調査等を公募しており、これによって、研究資金を一部調達している大学もある。
関係組織・関係者のプロジェクトへの参加度	アセアン各国教育省のプロジェクトへの関与は適切か	アセアン各国による資金・人員支援 実施内容	
プロジェクトのマネジメント体制	MIのプロジェクトの参画度	MIのプロジェクト活動に対する参画度が高い	
プロジェクトのマネジメント体制	プロジェクトのマネジメント体制(モニタリングの仕組み、意思決定過程、事務局や委員会の役割)は適切か	<ul style="list-style-type: none"> モニタリングの定義・実施頻度、フィードバック方法が設定されている 事務局や委員会の役割・機能が定義され、機能している 意思決定がタイムリーに行われる 	
カウンタートパートの配置	MI側の人員配置は適切だったか	MIでプロジェクト活動を推進するための人材 (Administrative or academic staff) がアサインされる	
実施過程で生じた問題の解決	プロジェクトの実施過程で生じている問題や効果発現に影響を与えた要因は何か。	—	事務局の効率的なプロジェクト運営と各大学でアサインされたコーディネーターと事務局の適切な連携が、効率的なプロジェクト運営に貢献していると考えられる。

評価グリッド (5 項目評価) ver.2

大項目		評価項目/ 調査項目		判断基準・方法	結果
		小項目			
妥当性	ASEAN 諸国の開発政策との整合性	プロジェクト目標、上位目標はアセアン諸国の高等教育政策に合致していたか	プロジェクト開始後、ASEAN 諸国の政策に重要な変更はあったか。あった場合、プロジェクトの方向性と整合しているか。 ASEAN 諸国の政府の開発計画と教育政策における工学系高等教育へのニーズと合致していたか	<ul style="list-style-type: none"> ASEAN 諸国の政策は各国さまざまだが、教育省(あるいは高等教育担当省)へのインタビューによれば、各国ともに「人材育成」は優先課題のひとつであり、高等教育の国際化や、工学系人材の増加を重点課題として掲げている国もある。したがって、ASEAN 諸国の政府の教育政策とプロジェクトの内容は合致しているといえる。 産業の振興と経済発展のために工学系人材の育成は重要な課題であるという認識についても、各国政府とプロジェクトの内容は合致している。 	
受益者のニーズとの合致	プロジェクト目標は参加大学(MI)のニーズに合致していたか	プロジェクト目標は参加大学のニーズに合致していたか	同左	<ul style="list-style-type: none"> アセアン諸国では、産業界が求める人材を質、量ともに高等教育機関で十分に育成できておらず、大学は工学系の大学院プログラムを強化すること、つまり高位学位を取得した教員の数を増加させ、研究活動などの質を向上させる必要があった。 大学の中には、工学系の教育の質を国際水準に引き上げようとしているところもあり、国際化へのニーズもあった。 このように、大学の教育と研究の質の向上、大学間や日本の大学とのネットワークを構築するという本プロジェクトが MI のニーズに合致していたといえる。 	
プロジェクトとアセアン諸国に対する日本の政策との整合性	改訂 ODA 大綱、ODA 中期政策、わが国の高等教育支援政策との関連性はあるか	改訂 ODA 大綱、ODA 中期政策、わが国の高等教育支援政策との関連性はあるか	<ul style="list-style-type: none"> 改訂 ODA 大綱、ODA 中期政策策などとプロジェクトの整合性 	<ul style="list-style-type: none"> ASEAN 地域は日本の ODA の重点地域である。日本は、アジア諸国との相互経済関係を有しており、これらの国々との協力を推進している。 ODA 中期政策では、重点課題のひとつとして持続的成長を掲げ、その中で人づくり支援を推進すると明言している。人づくり支援として、開発途上国における基礎教育、高等教育、職業訓練の充実に向けた支援に加え、日本の高等教育機関への留学生の受入などを通じた幅広い分野における人材育成を支援するとあり、この点でプロジェクトの方向性と合致している。 プロジェクトは日本政府の科学技術振興政策やアジア重視の政策との整合性があり、日本の支援大学もこの政策に後押しされる形でプロジェクトへ協力している。 日本の ODA 大綱では、ASEAN 諸国との関係強化と域内格差の是正を日本の ODA の資源を活用して推進することを方針として示している。プロジェクトでは、ホスト大学が送り出し大学の学生を受け入れて高位学位を授与するスキームを取っている。これは、ASEAN 域内における関係強化と格差是正のツールであり、日本の ODA によって支援されている南南協力にも合致している。 	
手段としての妥当性	広域技術プロジェクトとした実施されたのは妥当か	プロジェクトは、日本のアセアン地域の援助/協力政策との関連性があるか	<ul style="list-style-type: none"> 日本のアセアン地域への協力政策との整合性 	<ul style="list-style-type: none"> 本プロジェクトは人材育成のみを目標に掲げたプロジェクトではなく、アセアン諸国内での工学系の人的ネットワークを構築し、アセアン諸国の統合や組織的な力をつけることを目的としているため、広域案件として妥当だったといえる。特に人的ネットワークについては、留学生同士、留学生と指導教員のネットワークだけでなく、人の輪の連鎖によってネットワークが自発的に拡大することも視野にいれており、広域案件として複数国が関与したプロジェクトとしたのは妥当だったといえる。 	

評価項目/調査項目		判断基準・方法		結果
大項目	小項目			
有効性				
プロジェクト目標の達成見込み	プロジェクト終了時まで達成が見込めるか	プロジェクトの実績の検証結果		<ul style="list-style-type: none"> プロジェクトを実施した結果、プロジェクト終了までに、参加大学間の活発な交流と国内支援大学(JSU)との協働関係を通じて、参加大学の教育と研究能力が向上すると予想される(詳細は「実績」の「プロジェクト目標達成」を参照)。 ただし、CLMVでのさらなる教育と研究能力の向上、人的ネットワークを確固たるものにするための方策、フェーズ1で育成された人材の活用やリソースの共有など、今後取り組むべき課題はいくつもある。 MIとJSUへの質問票の回答によれば、各アウトプットはプロジェクト目標を達成するために有効なアプローチだったという意見があった。 ただし、フェーズ1ではHIのみに研究用の機材供与を行ったので、次フェーズではSI側のラボのアップグレードも視野に入れてもよいだろうという意見もある。
因果関係	プロジェクトの各アウトプットはプロジェクト目標達成に貢献しているか、プロジェクト目標の達成に貢献したプロジェクト外の要素はあるか	<ul style="list-style-type: none"> PDMのロジックの確認 ネットワーキングの要素別の貢献度 プロジェクト目標あるいはアウトプットの達成に影響を及ぼす、外部条件に相当する重要な要因 		<p><プロジェクト外の要素></p> <ul style="list-style-type: none"> MIの中には、積極的に海外の大学とMOUを締結し、留学制度、共同研究、海外教員の招聘を推進しているところもあり、そのような本プロジェクト外の活動もプロジェクト目標へある程度は貢献していると考えられる。 ベトナム、インドネシア、タイ等では政府奨学金などを抛出し、高等教育機関への支援が行われている。 大学院プログラム修了生は、ほぼ母校に戻って教鞭を取っているか、修士修了生の場合博士課程に進んでいる教員が多いため、教員の歩留まり率は高いと考えられる。 学生へのインタビューでも、卒業後は母校に戻ってLecturerかFaculty staffとして学生を教えると回答した学生が多かった。
効率性				
アウトプットの産出状況	アウトプットは達成されているか、達成されると見込めるか	プロジェクト目標達成の外部条件の影響はあったか。「MIで大学院プログラムを修了した教員が大学に留まる」「高等教育関連の人材市場が劇的に変化しない」	<ul style="list-style-type: none"> 外部条件の発現状況とプロジェクトへの影響度 	<p><プロジェクト目標達成の促進要因></p> <ul style="list-style-type: none"> MIのマネジメント(トップ)レベルのコミットメントの高さ、JSUの協力とコミットメントなどが挙げられる。
因果関係	アウトプットを産出するために活動は十分だったか	プロジェクト目標達成の促進・阻害要因はなにか。	<ul style="list-style-type: none"> 実績の検証結果 活動の完了状況とロジックの確認 	<ul style="list-style-type: none"> 成果1~4ともに成果が出ているが、MIの教員の質向上、HIの大学院プログラムの質向上については、未だニーズがあり、人的ネットワーク、SEED-Netの運営体制の確立については、基礎は築かれたが、まだ自立的に発展できるレベルには達していない。詳細は「実績の成果」の項を参照。 MIへの質問票によると、アウトプットを産出するために各活動は十分だったという意見が多くを占めた。 各活動の内容について全般的に満足度は高いが、フェーズ2に向けての改善点などがMIから出されている。(FWS、サนด์イッチ博士課程、博士課程の期間など)

評価項目/ 調査項目		判断基準・方法	結果
大項目	小項目		
	アウトプット達成のための外部条件「全ての MI が活動に対して協力的である」「日本の ODA が大幅に削減されない」「MI が予算を維持する」の影響はあったか	<ul style="list-style-type: none"> 左記外部条件の発現状況 	<ul style="list-style-type: none"> MI のコミットメントレベルは全般的に非常に高く、プロジェクトが進むにつれて関与度も高くなっており、問題はなかった。 JICA での本プロジェクトに対する予算措置はきちんと講じられており、プロジェクト期間中は予算が確保されていた。 MI 側の予算措置は大学によって差異はあるが、プロジェクトが進むにつれて増加しており、外部条件は満たされているといえる。
	投入の適切さ	<ul style="list-style-type: none"> 計画と実績の比較 投入とアウトプットの関係分析 	<ul style="list-style-type: none"> 全般的に投入の質、量、タイミングは適切だったといえる。 AUN/SEED-Net 事務局では、プロジェクトの事務・管理能力を補完するために、現地スタッフが採用されており、効率よくプロジェクトの運営が管理されている。 ただし、機材の調達が遅れて研究の進捗に影響を及ぼしたケースがあったようで、調達システムを効率化して欲しいという意見もあった。 また、MI からは JSU の教員の短期派遣が短いため 3-4 週間程度滞在して欲しいという要望もあった。
	日本アセアンファンドの投入は適切か	—	<ul style="list-style-type: none"> 日本アセアンファンドの投入実績(評価は中間評価時点で完了)
	効率性を促進・阻害した要因	<ul style="list-style-type: none"> 広域技術プロジェクトとしたことで効率性が損なわれたかかなど 	<ul style="list-style-type: none"> 広域案件であったが、事務局のマネジメント効率の高さ、MI 側の経験豊富なコーディネーターの配置などがプロジェクトの効率性を高めたとはいえる。
インパクト			
	上位目標達成の見込み	<ul style="list-style-type: none"> プロジェクト目標の達成度の確認と今後の見直し PDM のロジックの確認 	<ul style="list-style-type: none"> 「産業界を活性化させる工学系の人材を育成し、アセアン諸国の長期的な持続的発展を確保する」という上位目標自体は、非常に大きな目標であり、その達成の見込みを評価するには時期尚早であり、この上位目標達成には多くの要素が絡んでくると考えられる。 ただし、「実績」で述べたように、「MI、JSU ならびに民間企業との間の共同研究の数の増加」「MI と JSU 間で覚書協定(MOU)のような、交流活動の数の増加」について、既にそのような活動を進めている MI もある。 JSU の意見によれば、「上位目標達成のためには、MI が同じレベルあるいはそれ以上のレベルで域内ネットワークを維持して人材育成を継続的に実施していくことが必要」との意見があった。教育の質を高めるには、基礎的な設備の拡充、修士生の帰国後の研究支援や資金支援、さらに分野を超えたネットワークの形成や産業界とのつながりを作れるような仕組み作りが必要との意見である。 上位目標の達成に及ぼす外部条件として「アセアン諸国の政府が、共同研究を推進するためにアセアンのネットワークをサポートすること」がひとつの条件だが、これまでのところ、各国政府からは域内協力に関して肯定的なコメントが得られているので、影響はないと考えられる。
	上位目標の達成に見込みはあるか。それはプロジェクト目標達成の結果もたらされると考えられるか		
	上位目標の達成に影響を及ぼす要因はあるか。	<ul style="list-style-type: none"> プロジェクト目標レベルに影響を与える外部条件の発現 その他の要因分析 	

評価項目/ 調査項目		判断基準・方法	結果
大項目	小項目		
その他のインパクト(波及効果等)	プロジェクトの枠組み以外で発生したプラス・マイナスのインパクトはあるか。 広域案件であるがゆえにもたらされたインパクトはあるか。	一	<ul style="list-style-type: none"> さらにアセアン諸国の政府には、アカデミック面、産業界での人材交流を制限するよ うな動きもないため、この条件も現在のところ満たされている。 上記で JSU 側の意見として記述したように、域内ネットワークの維持、ネットワークを 通じたさらなる共同研究の発展が必要であり、そのためには外部の資金を確保する 必要があるといえる。 プロジェクト開始前は、アセアン諸国は地理的に近接しているにもかかわらず、アセア ンの大学教員・学生は、お互いの国を訪問する機会が少なく相互理解が進んでいな かった。プロジェクトによって、アセアン諸国の相互理解や文化交流が進み、将来の アセアン統合に向けて、共通理解・信頼関係の促進に貢献したといえる。 MI の中には、日本の大学、MI のある大学と遠隔教育のカリキュラム開発を進めよう としている大学もある。 タイ、インドネシア、ベトナム等では政府が MI 以外の大学の教員の能力向上を目指 して奨学金制度を AUN/SEED-Net の枠内で実施し始めた。 海外からの留学生を受け入れることによって、MI のマネジメント側も留学生の受入 のノウハウを身に付け、他の奨学金プログラムに共同研究のスキームを取り入れる など、SEED-Net の経験を活かしたり、事務職員が英語能力を身に付けて留学生の ケアに力を入れ始めたなどの効果もある。さらに、留学生を受け入れ始めたこと によって、現地の学生も刺激を受け学部自体が活性化したという効果もある。 ホスト大学として活動を推進するうちに、ホスト分野の枠組みを超えて大学全体の研 究活動が活性化した例もある。 2004 年 10 月に発生したインド洋津波の直後に AUN/SEED-Net で自然災害 WS を開催し、ジョグジャカルタの地震発生後は FWS と国際シンポジウムを開催した。そ の中で、対応策を議論した。地震に関しては地質の観点から論文をまとめ、イギリス での学会で論文賞を受賞した。これらを引きかぎに分野を横断する学際的な分野へ の対応の必要性が認識された。 この後、さらに防災関連のアセアン間、アセアンと日本とのつながりが強化された。ア セアンでは、チュラロンコンン大学で地震関連分野の人材育成が始まった例や、東工 大の COE プログラム(都市防災)の活動にバンドン工科大学、ガジャマダ大学、チュ ラロンコンン大学などの教員が参加した例がある。東工大とチュラロンコンン大学の間に 防災に関する遠隔講義も実施されるようになった。 帰国した留学生が各国で抱えている共通課題に関する共同研究体制を形成するな どの連携が生まれている。例えば、電力工学でチュラロンコンン大学に留学していた卒 業生が母校のガジャマダ大学に戻った後も、ガジャマダ大学も巻き込んでチュラロン コン大学の教員との共同研究を始めている。 SEED-Net 同窓生の留学校別のウェブサイトが、修了生の自発的な活動で立ち上 がっている。ウェブサイトでは出身校での同窓生の幹事役の連絡先が掲載されてい る。このように修了生の人材ネットワーク活動も確実に根を広げている。
自立発展性			

評価項目/調査項目		小項目	判断基準・方法	結果
大項目				
プロジェクト効果の持続性	プロジェクト目標の達成によるプロジェクトの効果は援助終了後も維持される見込みはあるか	プロジェクトの効果が持続性に影響を及ぼす要因はあるか(どのような能力、活動、支援がプロジェクトの終了後、便益の継続をもたらすか)	<ul style="list-style-type: none"> これまで持続発展性に関して、どのような施策がとられ、その成果はどうかであったか 	<ul style="list-style-type: none"> プロジェクト目標は達成されつつあるといえ、プロジェクト終了後も送り出し大学に長ったAUN/SEED-Netの卒業生が、母校へ留学で得た知識や経験をフィードバックしていくという点で、この効果は維持されると考えられる。 しかし、一般的に教育の質や研究能力は大学によっては向上途中であり、域内的人的ネットワークも形成されてきているが、今後さらに強化し、ネットワークが強固なものになるように配慮する必要がある。 MIとJSUへの質問票によれば、最も効果に影響を与える項目は、奨学金の財源、AUN/SEED-Net事務局のマネジメント能力、HIを含めたMIのキャパシティ、共同研究活動、日本の大学からの支援である。 MI間の短期訪問やFWSは、MI間のコストシェアによってある程度の活動レベルは維持できると考えMIもあるが、国によってはそのような費用の拠出も困難だと思われる。 教育省、大学のマネジメントレベルへのインタビューによると、各国からフェーズ2でも政策的な支援を得られることが確認されている。 本プロジェクトでSEED-Netの仕組みの基礎ができたことと判断できるが、MI独自の制度を維持その機能を発展させていくには、まだ支援が必要だと判断できる。今後は、MI側でSEED-Netを運営していくように、事務局が担っている機能などを委譲していく必要がある。
政策面の自立発展性	今後政策的な支援(教育省の政策面、大学自身の方針)を得ることができるか。	プロジェクトで確立された制度は維持され、発展するか	<ul style="list-style-type: none"> 教育省の政策 MIの方針 	<ul style="list-style-type: none"> 教育省、大学のマネジメントレベルへのインタビューによると、各国からフェーズ2でも政策的な支援を得られることが確認されている。 本プロジェクトでSEED-Netの仕組みの基礎ができたことと判断できるが、MI独自の制度を維持その機能を発展させていくには、まだ支援が必要だと判断できる。今後は、MI側でSEED-Netを運営していくように、事務局が担っている機能などを委譲していく必要がある。
制度面の自立発展性	プロジェクトで蓄積された技術やノウハウがプロジェクト終了後も維持されるか	プロジェクトで確立された制度は維持され、発展するか	<ul style="list-style-type: none"> SEED-Netの機能が維持あるいはMI独自で発展させることができるか 事務局が担っている機能が維持されるか 	<ul style="list-style-type: none"> 本プロジェクトでSEED-Netの仕組みの基礎ができたことと判断できるが、MI独自の制度を維持その機能を発展させていくには、まだ支援が必要だと判断できる。今後は、MI側でSEED-Netを運営していくように、事務局が担っている機能などを委譲していく必要がある。
技術面の自立発展性	プロジェクトで蓄積された技術やノウハウがプロジェクト終了後も維持されるか	プロジェクトで蓄積された技術やノウハウがプロジェクト終了後も維持されるか	<ul style="list-style-type: none"> 教育・研究水準は自立的に向上できるか ネットワークは維持され、自立的に発展できるか 	<ul style="list-style-type: none"> 本プロジェクトで、工学系の人材育成を実施し、教育や研究の質を向上できる人材の基盤整備ができたといえる。しかし、プロジェクト終了後、MI独自で教育・研究水準を向上できるレベルには達しておらず、まだ日本人専門家のアイデアやサポートが必要である。 人的ネットワークに関しても、本プロジェクトでその基盤が整備され、ネットワークが機能し始めている。しかしこのネットワークを恒常的なものにするためにはさらなる取り組みが必要であり、そのためには、日本人専門家やJSUの知識・経験、SEED-Net事務局のサポートが必要であるといえる。 現在のところ、プロジェクトで供与された機材に大きな問題はないが、MIによっては全般的に機材の維持管理や予算が確実に措置されていないケースもあり、今後モニタリングする必要がある。 コストシェアの点は、プロジェクト開始から徐々に負担金額が増加し、内容も多岐にわたるようになった。これまで11のMIから修士・博士プログラムの奨学金、Extension Feeの免除、論文出版費の面でコストシェアがあり、総額1,418,605 USDになっている(総事業予算の約7%)。これ以外にもラボの整備や研究費の一部支援という形でMIが費用を負担していることもある。 今後、MIではミャンマーなどコストシェアが難しい国もあるが、シンガポール、フィリピン、マレーシア、インドネシア、カンボジアの大学から奨学金、旅費一部負担などのコストシェアのコミットメントが得られている。 上記のようなコストシェアのコミットメントが得られているが、現時点では外部リソース
財政面の自立発展性	プロジェクトで実施した活動を継続していくための予算がMIで講じられるか	プロジェクトで供与された機材は維持されるか	<ul style="list-style-type: none"> 予算、人員がきちんと配分されるか、維持管理体制が整備されているか これまでのMIの負担額・割合 MIのコミットメント 	<ul style="list-style-type: none"> 現在のところ、プロジェクトで供与された機材に大きな問題はないが、MIによっては全般的に機材の維持管理や予算が確実に措置されていないケースもあり、今後モニタリングする必要がある。 コストシェアの点は、プロジェクト開始から徐々に負担金額が増加し、内容も多岐にわたるようになった。これまで11のMIから修士・博士プログラムの奨学金、Extension Feeの免除、論文出版費の面でコストシェアがあり、総額1,418,605 USDになっている(総事業予算の約7%)。これ以外にもラボの整備や研究費の一部支援という形でMIが費用を負担していることもある。 今後、MIではミャンマーなどコストシェアが難しい国もあるが、シンガポール、フィリピン、マレーシア、インドネシア、カンボジアの大学から奨学金、旅費一部負担などのコストシェアのコミットメントが得られている。 上記のようなコストシェアのコミットメントが得られているが、現時点では外部リソース

評価項目/調査項目		判断基準・方法	結果
大項目	小項目		
			<p>の支援がない場合は、現状と同じレベルの活動を維持することは困難である。特に資金面はプロジェクトの活動を維持するために必要不可欠な要素であり、今後は競争資金の獲得やASEAN連帯基金からの援助など外部ソースの活用を促進する、あるいは、「集中と選択」の観点からより費用対効果の高い SEED-Net の枠組みを構築するなどの工夫が必要である。</p>

MI 及び事務局質問票まとめ

2007/6/21

MI は 2007 年 6 月 18 日時点で 12 大学 12 名から回答。事務局は 2007 年 5 月 6 日時点で日本人から 5 名、タイ人から 9 名回答。表中:MI とあるのは MI からの回答の計、日とあるのは事務局(日本人)からの回答の計、タイとあるのは事務局(タイ人)からの回答の計、事務局とあるのは事務局全体の回答の計を示す。
 文書では無印は MI からのコメントなど、(事)とあるのは事務局からのコメントなど、(双) とあるのは双方からコメントなどがあったことを示す。

PART1 実績とプロセス																					
1.1 これまでのプロジェクト達成度合いはどうか	<p>(名)</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th></th> <th>MI</th> <th>事務局</th> <th>日</th> <th>タイ</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>計画どおりよくできた</td> <td>12</td> <td>10</td> <td>2</td> <td>8</td> </tr> <tr> <td>多少遅れ気味であるがたいしたことはない</td> <td>0</td> <td>3</td> <td>2</td> <td>1</td> </tr> <tr> <td>かなり遅れている</td> <td>0</td> <td>0</td> <td>0</td> <td>0</td> </tr> </tbody> </table> <p>ほとんどの回答が計画通りよりできたと回答している。その他、コメントとしては、</p> <ul style="list-style-type: none"> ✓ (双)MI の人的資源開発の面で、目標に達している。 ✓ 実施プロセスも順調かつ透明性が高いことから評価する。モニタリングおよびフォードバックも機能している。 ✓ (双)大学側はプロジェクトへコミットした。また、事務局、JICA および MI の協働によるものである。 ✓ 分野別セミナーおよび共同研究により、ASEAN域内および日本の大学とのネットワークが築かれた。 ✓ (事)「多少遅れ気味であるがたいしたことはない」とした理由として、一部のホストメンバー大学において事業の初年度および第 2 年度の活動が予定通り行われなかった。 ✓ (事) 当時の総括調整員の努力もありプロジェクト運営は 2003 年のから少しずつ軌道に乗ってきて、今はプロジェクトスタッフもともとで非常に上手く運営されている。しかしそれは、当初計画や PDM に則ってプロジェクト運営を進めた、という訳ではなく、実際の状況に応じてドラステイックに方針を変更した点もあります。 <p>《改善すべき点》</p> <ul style="list-style-type: none"> ✓ (双)2 年の修士課程は適切であるが、サนด์イッチプログラムによる博士課程 3 年の年限は不十分な面もある。全般的に 3 年間という限られた研修期間の中で奮闘中であり、必ずしも期間内で終了できず、半年ほどの延長ケースがしばしば生じている。 		MI	事務局	日	タイ	計画どおりよくできた	12	10	2	8	多少遅れ気味であるがたいしたことはない	0	3	2	1	かなり遅れている	0	0	0	0
	MI	事務局	日	タイ																	
計画どおりよくできた	12	10	2	8																	
多少遅れ気味であるがたいしたことはない	0	3	2	1																	
かなり遅れている	0	0	0	0																	
1.2 プロジェクト活動に対する大学院としての参加度合いはどうか	<p>(名)</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th></th> <th>MI</th> <th>事務局</th> <th>日</th> <th>タイ</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>満足</td> <td>12</td> <td>12</td> <td>3</td> <td>9</td> </tr> <tr> <td>不満足</td> <td>0</td> <td>0</td> <td>0</td> <td>0</td> </tr> <tr> <td>わからない/判断できない</td> <td>-</td> <td>-</td> <td>-</td> <td>-</td> </tr> </tbody> </table> <ul style="list-style-type: none"> ✓ (双) 全回答が満足と回答している。 		MI	事務局	日	タイ	満足	12	12	3	9	不満足	0	0	0	0	わからない/判断できない	-	-	-	-
	MI	事務局	日	タイ																	
満足	12	12	3	9																	
不満足	0	0	0	0																	
わからない/判断できない	-	-	-	-																	

<p>1.3 上位目標について、つぎの事象は起こりえたか</p>	<p>(名)</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th></th> <th>あてはまる</th> <th>ある程度はあてはまる</th> <th>あてはまらない</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>1) アセアン諸国における工学研究開発の活動に従事するMI 修士生あるいは学部スタッフが増加した</td> <td>12</td> <td>0</td> <td>0</td> </tr> <tr> <td>2) アセアン諸国における9分野についての高位学位取得の技術者が増加した</td> <td>11</td> <td>1</td> <td>0</td> </tr> <tr> <td>3) MIとJSUとの間の覚書署名のような、ネットワーク促進活動が増加した</td> <td>6</td> <td>5</td> <td>1</td> </tr> <tr> <td>4) プロジェクトによる直接的な促進の他に、MI, JSU およびプライベートセクターの間での共同研究が増加した</td> <td>7</td> <td>4</td> <td>1</td> </tr> </tbody> </table> <p>✓ (事)「あてはまる」「ある程度はあてはまる」の双方に該当するという回答あり。その理由は、「大学・分野により差異がある」或いは『部分的に Yes だが全体としては Slightly ではない』ため「2つの回答の中間が適している」という意味で回答した。</p> <p>✓ (事) 殆どの学生受入ホスト校で、ある程度まとまった数の外国人学生受入始めたのは当プロジェクトの域内留学が契機になっていて、それ以前は制度はあっても1人程度また短期の受入などであった場合が殆どのため、実質的な彼らの international program 向上には間違い無く寄与している。</p>		あてはまる	ある程度はあてはまる	あてはまらない	1) アセアン諸国における工学研究開発の活動に従事するMI 修士生あるいは学部スタッフが増加した	12	0	0	2) アセアン諸国における9分野についての高位学位取得の技術者が増加した	11	1	0	3) MIとJSUとの間の覚書署名のような、ネットワーク促進活動が増加した	6	5	1	4) プロジェクトによる直接的な促進の他に、MI, JSU およびプライベートセクターの間での共同研究が増加した	7	4	1										
	あてはまる	ある程度はあてはまる	あてはまらない																												
1) アセアン諸国における工学研究開発の活動に従事するMI 修士生あるいは学部スタッフが増加した	12	0	0																												
2) アセアン諸国における9分野についての高位学位取得の技術者が増加した	11	1	0																												
3) MIとJSUとの間の覚書署名のような、ネットワーク促進活動が増加した	6	5	1																												
4) プロジェクトによる直接的な促進の他に、MI, JSU およびプライベートセクターの間での共同研究が増加した	7	4	1																												
<p>1.4 プロジェクト目標について、つぎの事象は起こりえたか(事1.3)</p>	<p>(名)</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th></th> <th>あてはまる</th> <th>ある程度はあてはまる</th> <th>あてはまらない</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td rowspan="4">1) プロジェクトによって、大学院としての教育・研究能力が改善した</td> <td>MI</td> <td>2</td> <td>0</td> </tr> <tr> <td>事務局</td> <td>12</td> <td>3</td> </tr> <tr> <td>日</td> <td>4</td> <td>0</td> </tr> <tr> <td>タイ</td> <td>8</td> <td>0</td> </tr> <tr> <td rowspan="4">2) (HI 向け質問) ホスト分野において、留学生受け入れのためのカリキュラム、コース内容、数量に増加あるいは改善があった</td> <td>MI</td> <td>6</td> <td>1</td> </tr> <tr> <td>事務局</td> <td>10</td> <td>5</td> </tr> <tr> <td>日</td> <td>5</td> <td>0</td> </tr> <tr> <td>タイ</td> <td>5</td> <td>4</td> </tr> </tbody> </table> <p>✓ (双)多くの回答が「大学院としての教育・研究能力が改善した」としている。</p> <p>✓ (事)「カリキュラム、コース内容、数量に増加あるいは改善」については、タイ人の事務局員の半数近くが「ある程度あてはまる」とし、他のグループのほとんどが「あてはまる」と回答しているのに対して異なる評価をしている。</p>		あてはまる	ある程度はあてはまる	あてはまらない	1) プロジェクトによって、大学院としての教育・研究能力が改善した	MI	2	0	事務局	12	3	日	4	0	タイ	8	0	2) (HI 向け質問) ホスト分野において、留学生受け入れのためのカリキュラム、コース内容、数量に増加あるいは改善があった	MI	6	1	事務局	10	5	日	5	0	タイ	5	4
	あてはまる	ある程度はあてはまる	あてはまらない																												
1) プロジェクトによって、大学院としての教育・研究能力が改善した	MI	2	0																												
	事務局	12	3																												
	日	4	0																												
	タイ	8	0																												
2) (HI 向け質問) ホスト分野において、留学生受け入れのためのカリキュラム、コース内容、数量に増加あるいは改善があった	MI	6	1																												
	事務局	10	5																												
	日	5	0																												
	タイ	5	4																												

1.5 プロジェクト成果として、つぎは起こりえたか(事 1.4)	(名)					
		あてはまる	ある程度はあてはまる	あてはまらない	あてはまらない	
1) (HI 向け質問) プロジェクトによって、大学院プログラムの拡大あるいは改善があった	MI	6	1	1	1	
	事務局	13	2	0	0	
	日	5	1	0	0	
	タイ	8	1	0	0	
	MI	11	0	0	0	
	事務局	14	0	0	0	
	日	5	0	0	0	
	タイ	9	0	0	0	
	MI	10	1	0	0	
	事務局	11	3	0	0	
2) MI間における共同研究、分野別セミナー、短期訪問、ワークショップが研究経験あるいは成果の共有に活用された	日	5	0	0	0	
	タイ	9	0	0	0	
	MI	10	1	0	0	
	事務局	11	3	0	0	
	日	5	0	0	0	
	タイ	6	3	0	0	
	MI	9	2	0	0	
	事務局	9	6	0	0	
	日	4	2	0	0	
	タイ	5	4	0	0	
3) MI間における共同活動および人的つながりがプロジェクトによって強化された	MI	10	1	0	0	
	事務局	11	3	0	0	
	日	5	0	0	0	
	タイ	6	3	0	0	
	MI	9	2	0	0	
	事務局	9	6	0	0	
	日	4	2	0	0	
	タイ	5	4	0	0	
	4) AUN/SEE-Net における情報普及システム、活動マネジメントシステム、コミュニケーションネットワークが十分に確立された	MI	10	1	0	0
		事務局	11	3	0	0
日		5	0	0	0	
タイ		6	3	0	0	
MI		9	2	0	0	
事務局		9	6	0	0	
日		4	2	0	0	
タイ		5	4	0	0	
✓ (事)(双)ほとんどの回答が1) - 3)の成果が起こりえたことについて「あてはまる」としているが、4)については三分の一以上が「あてはまる」と回答し、MI と異なる評価をしている。MI の一部の声としても、公式には4)は「あてはまる」あるいは「ある程度はあ		MI	10	1	0	0
		事務局	11	3	0	0
	日	5	0	0	0	
	タイ	6	3	0	0	
	MI	9	2	0	0	
	事務局	9	6	0	0	
	日	4	2	0	0	
	タイ	5	4	0	0	
	1.6 投入についてプロジェクト立ち上げより今日に至るまでの間、貴大学機関よりの投入あるいは支援はどのようなようであったか	あてはまる	5	0	0	0
		ある程度はあてはまる	2	0	0	0
あてはまらない		3	0	0	0	
備考		5	0	0	0	
2002-2007 計 5 名総額 US\$2,125, US\$720/人、						
AUN 図書連合体活動						
US\$48,000, US\$253,000,						
短期旅費、会議参加費、学会誌出版費、残業代、入国手続き、各種力						
ワンセリング等						

2. 実施プロセス
 2.1 AUN/SEED-Net
 システムの現行マネ
 ジメント/実施システ
 ムはいかかなるもので
 あったか

		適切	部分的に適切	改善余地あり	わからない
a) SEED-Net 事務局場所 (チュラロンコン大学)	MI	12	0	0	0
	事務局	12	1	1	0
	日	3	1	1	0
	タイ	9	0	0	0
b) SEED-Net 事務局のマネジメント	MI	11	1	0	0
	事務局	13	1	0	0
	日	4	1	0	0
	タイ	9	0	0	0
c) 分野別システム (9ホスト分野)	MI	9	1	1	0
	事務局	10	4	0	0
	日	3	2	0	0
	タイ	7	2	0	0
d) 活動計画&意思決定システム	MI	11	1	0	0
	事務局	9	5	0	0
	日	4	1	0	0
	タイ	5	4	0	0
e) 学生モニタリングシステム	MI	9	1	1	0
	事務局	8	4	3	0
	日	3	2	1	0
	タイ	5	2	2	0
f) その他	MI	2	0	0	0
	事務局	0	0	0	0

他、コメントとしては、

- ✓ SEED-Net 事務局による実施プロセスのマネジメントは適切であり、今後とも共に続けたい。他に類似2件 (迅速な対応等)
- ✓ 実施ガイドラインは適切かつ使いやすい。
- ✓ SEED-Net プログラムについての決定事項と将来計画は、主要な関係者を巻き込んだ運営委員会にて協議された。
- ✓ 分野別システムにより焦点を当てることによって、強固かつ持続的なネットワーク構築をサポートすることになる。

《改善すべき点》

- ✓ 分野別セミナーは均等に実施されるべきである。分野別セミナーは HI あるいは MI において毎年実施を提言する。
- ✓ 分野別セミナーは地域あるいは国際会議とし、参加者を非 MI まで広げることによって改善を図ることができる。
- ✓ 活動計画&意思決定システムについては、緊急時等の意思疎通に問題を生じることがあり、見直しが必要である。

- ✓ (双)学生モニタリングについては、改善の必要がある。
- ✓ 運営委員会開催前には、十分な資料とともに予備会議を開くことで、より身のあるものとなる。
- ✓ 現行のマネジメントシステムは大学間の協力および資源の共有によって、推進されたものである。しかしながら、学生モニタリングや入学者能力評価については、改善の余地がある。

2.2 AUN/SEED-Netの実施プロセスはいかなるものであったか			適切	部分的に適切	改善余地あり	わからない
2.2 AUN/SEED-Netの実施プロセスはいかなるものであったか	a) ホスト大学のコミットメント	MI	11	1	0	0
		事務局	7	7	2	0
		日	2	3	2	0
	b) 非ホスト大学のコミットメント	タイ	5	4	0	0
		MI	10	1	1	0
		事務局	8	6	1	0
	c) 日本の支援大学のコミットメント	日	0	5	1	0
		タイ	8	1	0	0
		MI	12	0	0	0
		事務局	7	6	1	1
		日	0	5	1	0
		タイ	7	1	0	0
d) AUN/SEED-Net 事務局とのコミュニケーション	MI	11	0	0	0	
	事務局	10	2	0	0	
	日	3	1	0	0	
	タイ	7	1	0	0	
e) MI 間でのコミュニケーション	MI	4	6	2	0	
	事務局	1	7	1	0	
	日	0	4	1	0	
	タイ	1	3	0	0	
f) 学生／研究員の派遣応募と選抜	MI	9	2	1	0	
	事務局	8	7	0	0	
	日	2	4	0	0	
	タイ	6	3	0	0	

		適切	部分的に適切	改善余地あり	わからない
g) 日本の支援大学とのコミュニケーション	MI	8	3	0	0
	事務局	4	8	2	2
	日	1	4	2	0
	タイ	3	4	0	2
h) JICA 現地事務所とのコミュニケーション	MI	7	5	0	0
	事務局	8	3	1	2
	日	2	2	1	0
	タイ	6	1	0	0
i) 派遣された学生／研究員の学問レベル	MI	9	1	1	0
	事務局	7	7	0	0
	日	3	2	0	0
	タイ	4	5	0	0
j) 分野別セミナーのアレンジメント	MI	11	1	0	0
	事務局	5	9	1	0
	日	0	5	1	0
	タイ	5	4	0	0
k) 研究プログラムの分野について	MI	9	3	0	0
	事務局	6	7	0	1
	日	1	3	0	1
	タイ	5	4	0	0
l) 短期訪問支援のための申込みと選別	MI	8	3	0	0
	事務局	6	5	3	1
	日	1	2	3	0
	タイ	5	3	0	1
m) その他					

(事) 日本人専門家は他のグループと比較して、b) 非ホスト大学のコミットメント、c) 日本の支援大学のコミットメント、f) 学生／研究員の派遣応募と選抜について「適切」とする数が極めて少ない。また a) ホスト大学のコミットメント、f) 学生／研究員の派遣応募と選抜、i) 派遣された学生／研究員の学問レベル、j) 分野別セミナーのアレンジメント、k) 研究プログラムの分野について、l) 短期訪問支援のための申込みと選別については、MI の多くは「適切」としているのに対して、事務局は(日本人タイ人ともに)「部分的に適切」とする回答が半数以上ある。さらに e) MI 間でのコミュニケーション、g) 日本の支援大学とのコミュニケーションについては全グループにおいて、他の質問よりも「適

<p>(事)二つ以上の選択肢に該当するという回答あり。その理由は、大学・分野により差異があるので、幾つかの設問で複数回答をした。他、コメントとしては、</p> <ul style="list-style-type: none"> ✓ (双)SEED-Net プログラムの実施においてはHIおよびJSUによる強いコミットメントがある。(共同研究、学生指導、短期訪問、日本からの教授派遣等) ✓ AUN/SEED-Net 事務局からの強力な支援(実施計画のアシストやガイド) ✓ 分野別ワークショップは改善されて年二回の開催(HI および MI の持ち回り各一回)となったことがネットワークの改善であり、アセアン諸国とJSUとの交流につながった。 ✓ 各 HIは修士および博士課程候補者を応募者リストおよびAUN/SEED-Net 事務局からの情報によって選別する機会を得る。 ✓ (事) 特に大きな問題はなくなってきたが、メンバー大学、支援大学間で状況がかなり異なる(すべての質問について)。 ✓ (事) e: 今後のネットワーク促進と拡大に重要な因子だが、分野のホストの役割も大きい。 ✓ (事) i: 本プロジェクトの目的からいって、これだけは維持しなければならない。 ✓ (事) k: アセアンの共通課題がトピックスになりつつある。 ✓ (事) 9分野、参加19大学、日本からの支援11大学、各メンバーにより大学差・個人差があるため、平均すると上記のような結果となる。《改善すべき点》 ✓ Eメールによるコミュニケーションは散漫であり改善の余地がある。 ✓ 学生の所属研究室あるいは指導教官への短期訪問については改善されるべきである。 ✓ MI間でのコミュニケーションには改善すべき点がある。これは HI との間にもあてはまる。背景にはEメールシステムについてより改善されねばならぬ MIが見受けられる。 ✓ 言語が障害となつて、講義の理解やコミュニケーションがおぼつかぬ学生も一部存在する。 ✓ HIとして、より基礎学力のある学生を受け入れたい。GRU, TOEFL スコアが十分であれば手続きも簡略化される。英語力も要。(NTU) ✓ 分野別セミナーは期間が短すぎる、定例ミーティングとすれば十分だが。 ✓ (事)a:ホスト大学に依るが平均的には未だ改良の余地が多い。組織的な対応が少ないこと、引継ぎが無いこと、教員の対応に個人差が多いこと、等々 ✓ (事) c: 大学により大きく異なる。組織的対応は2, 3大学のみ。 ✓ (事) f: 日本とはだいぶ異なるし、メンバー大学の事を十分に知っていない。 ✓ (事) g: 限られた範囲での連絡網しか出来ない。 ✓ (双) h: 事務所によりかなり温度差がある。これは個人の問題でもある。 ✓ (事) 活発な分野・大学・教員が大半である反面、一部改善すべき面も存在することも事実である。 	<p style="text-align: center;">PART2 評価五項目</p> <p>1. 妥当性</p>
--	---

1.1 プロジェクト目標は貴大学(MI)のニーズにとって適切であるか

(名)

	MI	事務局
適切	11	11
部分的には適切	1	3
不適	0	0

多くが適切であるとの回答である。他、コメントとしては、

- ✓ プロジェクトは学内体制確立に適したものであった。MI および JSU との間での共同研究にも寄与した。
- ✓ 過去3年間高位学位取得フィリピン人技術者の後押しをしたが、AUN/SEED-Netはこの目的を補完してきた。AUN/SEED-Net 学生は論文作成時においても、間接的に共同研究資金を通じて恩恵を被っている。
- ✓ (双)学部メンバーの研究能力は、JSU からの技術移転を通してより強化された。
- ✓ 非 MI であっても、共同研究プロジェクトを通じての大学院プログラムによる恩恵があった。
- ✓ 学部メンバーの学位底上げにつながった。
- ✓ 研究活動の増加は論文出版および国内外会議でのプレゼンテーションにつながった。
- ✓ NUS は MI からの学生受け入れに関与し、その大学院プログラムの入学要件への適合に従うものである。また、地域内の工学的資源の開発というゴールを強く支援する。
- ✓ (双)学内スタッフの知識向上によって資格あるスタッフとすべきニーズを有する。
- ✓ 非常に優れた共同研修、ネットワーク確立、人的資源の向上他を評価する。
- ✓ HI, JSU, MI との間での大学院生指導、共同研修および分野別セミナー・会議・出版による知識共有を通じた研究および学術スタッフの能力拡大
- ✓ (双)高等教育として必要なのはアセアン地域の MI からの人的資源の教育であり、これは地域の社会経済面を支援するものである。
- ✓ HI, JSU, MI の間にて、国際的な大学院生とネットワークの増大を生み出す。
- ✓ ベトナムのような開発途上国にとって人材育成は急務である。今後 2013 年までに、スタッフ数現行 700 名弱を倍増する計画であり、400 名以上が高位学位を必要としている。(HCMUT)
- ✓ 国際的な研究大学を志向するに沿うものである。(UGM, ITB)
- ✓ (事) 学術ネットワークは殆ど存在していなかった。
- ✓ (事) 「部分的には適切」と回答した理由として、メンバー大学のニーズには適っていると思われるが、そのプライオリティに沿っているかどうか不明である。これはほとんどの事業に共通する問題・課題で、ドナー主導とならざるを得ないことの必然的な結果と思われる。

<p>1.2 本年1月の12回運営委員会にて採択されたAUN/SEED-Netフェーズ2提案書は貴大学(MI)のニーズに適するものであるか</p>	<p>(名)</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th></th> <th>MI</th> <th>事務局</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>適切</td> <td>11</td> <td>11</td> </tr> <tr> <td>部分的には適切</td> <td>1</td> <td>2</td> </tr> <tr> <td>不適</td> <td>0</td> <td>0</td> </tr> </tbody> </table>		MI	事務局	適切	11	11	部分的には適切	1	2	不適	0	0			
	MI	事務局														
適切	11	11														
部分的には適切	1	2														
不適	0	0														
	<p> <input checked="" type="checkbox"/> 研究者の質的向上とともにHI以外での能力開発に寄与することにより、MIにとってプロジェクトゴールを達成しうるための助けとなる。 <input checked="" type="checkbox"/> AUN/SEED-Net はプラットフォームとして産業界、非MI、政府外郭団体の関与を拡大し、互恵的な共同研究活動を創出する。 <input checked="" type="checkbox"/> プロジェクト目標はグローバル化志向に向けての能力あるプロフェッショナルと労働者を準備することによって、人的資源開発に寄与する。 <input checked="" type="checkbox"/> プロジェクトは教育/技術能力を築き上げ、意味ある政府、産業界および市民社会が一体となった関連コミュニケーションサービス活動に貢献するものである。 <input checked="" type="checkbox"/> プロジェクトは産業界の展望に合致するものである。 <input checked="" type="checkbox"/> 学部としても有し各スタッフが不足していることから、多くのスタッフの資質向上が望まれている。 <input checked="" type="checkbox"/> 共同研究のアプローチは地域内の産業界およびコミュニティのニーズに応えており、わが国およびMIとも深くかかわっている。 <input checked="" type="checkbox"/> 研究志向大学としての長期目標と分野横断的研究等によるネットワーク強化路線に沿うものである。 <input checked="" type="checkbox"/> (事) 第一フェーズの間に各分野で十分な議論がされ、それが幾つかの全体会議でまとめられている。各国政府機関との話し合いでも、十分にニーズに合致していることが認識された。 <input checked="" type="checkbox"/> (事) 送り出し側の大学は不足している高学歴の教員が養成されるので勿論のこと、ホスト大学側も(当初は個々の教員に外国人受入について教育バックグラウンドの相違から多少の混乱は見られたものの)大学としてinternational program が実質的に進み域内他国との交流が深まるのは好ましいという発言を運営会議という公式の場だけでなく、個人的な会話の中で幾度も聞いている。 <input checked="" type="checkbox"/> (事) 「部分的には適切」と回答した理由として、メンバー大学のニーズには適っていると思われるが、そのプライオリティに沿っているかどうか不明である。これはほとんどの事業に共通する問題・課題で、ドナー主導とならざるを得ないことの必然的な結果と思われる。 <input checked="" type="checkbox"/> <改善点> <input checked="" type="checkbox"/> 大学院レベルでの人的資源の継続的教育は地域内経済の持続性を確保するための重要な要素である。次期フェーズとして言及される産業界の取り込みや他の支援活動とともに学際的かつ集団研究のアプローチはマレーシアにおける研究大学の一つとして必須。 <input checked="" type="checkbox"/> (事) 現在の活動を維持しつつ、アセアンの地域共通課題に取り組むには、現在の投入量(資金・人材)を増やす必要がある。全体の投入量(日本・アセアン双方)に制約があるため、最も望ましいプロポーザルにはなっていない。 </p>															
<p>2. 有効性</p> <p>2.1 プロジェクト目標の達成度合いをどのようにとらえるか</p>	<p>(名)</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th></th> <th>MI</th> <th>事務局</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>既に達成済み</td> <td>5</td> <td>5</td> </tr> <tr> <td>達成すると予測する</td> <td>7</td> <td>10</td> </tr> <tr> <td>達成は困難である</td> <td>0</td> <td>0</td> </tr> <tr> <td>わからない/判断できない</td> <td>0</td> <td>0</td> </tr> </tbody> </table>		MI	事務局	既に達成済み	5	5	達成すると予測する	7	10	達成は困難である	0	0	わからない/判断できない	0	0
	MI	事務局														
既に達成済み	5	5														
達成すると予測する	7	10														
達成は困難である	0	0														
わからない/判断できない	0	0														

2.2 プロジェクト目標の達成に影響を及ぼす要因（正負どちらも）は存在するか	<p><正の要因></p> <ul style="list-style-type: none"> ✓ 高い質の研究成果は国内外における発表とともに学会誌に掲載のための出版の増加につながる。 ✓ 共同研究活動および分野別セミナーを通じて MI および非 MI を含む学術ネットワークの確立 ✓ 大学院カリキュラムは学生の研究活動に対する技術資源と専門性の共有を拡大する。 ✓ MI 間における人的つながりが強化された。 ✓ AUN/SEED-Net 事務局による MI 間とのコーディネーションのよさと密な連絡は評価に値する。 ✓ MI へのプロジェクトに対する参加の意識。 ✓ 地域内の産業界およびコミュニティのニーズに応えるべく共同研究のアプローチはわが国および MI にとって適切である。 ✓ 大学および高等教育省からの支援（インドネシアの長期高等教育戦略にも沿う）。 ✓ 国際的な学術雰囲気が増強された。 ✓ (事) ホスト大学の大学院プログラムの意識改革に貢献している ✓ (事) 主体的にメンバー間の交流が促進している。 ✓ (事) SEED-Net の案件に対する日本の大学教員・メンバー大学・教員等の意識が向上した。 ✓ (事) 出張費用等が十分とは言えない事もあり、SEED-Net プロジェクト開始前は異なる国のメンバー校間の交流は殆どなかったが、SEED-Net を契機に FWS などで直接教員同士が面談する事により、アセアンの共通課題等が見つかり、その解決のために彼ら自身が相互交流をより活発にしたい、という思いを抱いている点。 ✓ (事) 日本や欧米の大学の場合、レベルおよび研究対象がアセアンの大学と乖離している場合もあるため、アセアンの問題は域内留学で学んだ方が実際的な知識・方法を習得できる、という場合も少なくない。 <p><その他要因></p> <ul style="list-style-type: none"> ✓ HI, JSU, MI, AUN/SEED-Net, JICA よりの強力なコミットメントおよび財政的、物的な継続的支援はプロジェクト目標達成のために必要である。 ✓ (事) 各国の政府の方針、規則、予算配分等の影響は大きい(ポジティブ、ネガティブともに)。 <p><負の要因></p> <ul style="list-style-type: none"> ✓ (事) 日本側の一部に見られる「ODAにおける高等教育軽視」「柔軟性に欠けた官僚の発想」 ✓ (事) sending only のメンバー校は学生・若手教員を留学させるか、FWS に参加する事ですが、当プロジェクトを通じた有効な教育・研究能力向上手段がないため、各分野のホスト校に比べてプロジェクトを通過した向上度合いが相対的に低くならざるを得ない。これはホスト校でも学生受入の分野以外にも言える事。(プロジェクト資金が無尽蔵にある訳では無いため投資を効果的に生かすためには、ホスト校方式は止むを得ない方針だとは思うが。) ✓ 全ての学内組織が恩恵を受けるわけではない。 ✓ 入学してくる AUN/SEED Net 奨学生数が限られている。 ✓ AUN/SEED Net 奨学生に提供する専用プログラムが限られている。 ✓ HI の立場からみて、いくつかの MI は国際的競争力を身につけるために一層の発展を要する。
--	--

2.3 プロジェクトの各成果をどのようにとらえるか	(名)						
			達成済	達成見込み	達成困難	わからない	
	a) 学部スタッフの資格向上	MI	10	2	0	0	
	b) HI における大学院プログラムの拡張	事務局	9	6	0	0	
	c) MI における共同活動および人的つながりの強化	MI	9	2	0	0	
d) 情報普及システムおよびコミュニケーションネットワークの確立	事務局	7	7	1	0		
		MI	8	3	1	0	
		事務局	6	9	0	0	
		MI	9	3	0	0	
		事務局	4	9	1	0	
2.4 プロジェクト目標の達成のための各成果はどのようにとらえるか	(名)						
			重要	十分	多少	不明	
	a) 学部スタッフの資格向上	MI	8	4	0	0	
	b) HI における大学院プログラムの拡張	事務局	13	1	0	0	
	c) MI における共同活動および人的つながりの強化	MI	8	1	0	1	
d) 情報普及システムおよびコミュニケーションネットワークの確立	事務局	11	3	1	0		
		MI	9	3	0	0	
		事務局	10	5	0	0	
		MI	7	5	0	0	
		事務局	6	7	1	0	
2.5 プロジェクト目標の達成のための各活動はどのようにとらえるか	(名)						
			たいへん有効	有効	有効でない	不明	
	a) HI における修士および博士課程の学習	MI	11	1	0	0	
	b) 共同研究	事務局	13	1	0	0	
	c) 日本の大学による支援	MI	8	3	0	0	
d) 研究機材の支給	事務局	13	1	0	0		
		MI	8	2	0	0	
		事務局	12	2	0	0	
		MI	7	4	0	0	
		事務局	11	4	0	0	

			たいへん有効	有効	有効でない	不明
2.6a <ホスト大学(HI)向け>プロジェクトの結果、貴大学(HI)における能力改善はみられたか	e) 分野別セミナー	MI	8	4	0	0
		事務局	10	4	0	0
	f) MI への短期訪問	MI	6	5	0	0
		事務局	9	6	0	0
	g) 研究やセミナーの後のコンタクト保持	MI	8	4	0	0
		事務局	13	2	0	0
	h) 研究仲間からの助言および共同作業	MI	7	5	0	0
		事務局	8	5	0	0
	i) SEED-Net 修了生とのネットを通じた討議や共同作業	MI	7	5	0	0
		事務局	9	6	0	0
	j) その他		-	-	-	-
(名)						
2.6a <ホスト大学(HI)向け>プロジェクトの結果、貴大学(HI)における能力改善はみられたか	a) 大学院学位の教員スタッフ数	MI	6	1	0	0
		事務局	9	4	4	4
	b) 大学院向け教育技能	MI	6	2	0	0
		事務局	10	0	4	4
	c) HIとして大学院プログラムへの受入数	MI	8	0	0	0
		事務局	11	0	3	3
	d) 大学院学生の学問レベル	MI	6	2	0	0
		事務局	10	0	5	5
	e) 研究活動の数	MI	6	1	0	0
		事務局	13	0	1	1
	f) 研究活動の質	MI	6	1	0	0
	事務局	11	0	3	3	
g) コース内容	MI	6	1	0	0	
	事務局	7	0	7	7	
h) その他 研究成果の学会誌掲載	MI	1	0	0	0	
i) その他 国際会議における発表	MI	1	0	0	0	

2.6b <非ホスト大学
(HI以外)向け>
プロジェクトの結果、
貴大学(HI以外)に
おける能力改善はみ
られたか

(名)

		改善された	変化なし	不明
a) 大学院学位の教員スタッフ数	MI	6	0	0
	事務局	12	0	1
b) 大学院向け教育技能	MI	5	1	0
	事務局	7	1	5
c) HIとして大学院プログラムへの受入数	MI	6	0	0
	事務局	7	1	6
d) 大学院学生の学問レベル	MI	6	0	0
	事務局	6	1	6
e) 研究活動の数	MI	6	0	0
	事務局	8	1	3
f) 研究活動の質	MI	6	0	0
	事務局	8	1	3
g) その他	MI	-	-	-
h) その他	事務局	1	0	0
		-	-	-

他、コメントとしては、

- ✓ 若手学生は戻ってからも熱心に取り組んでいる。新規研究の成果が生み出され、コース開発やイノベーションも同時にスタートする。
- ✓ AUN/SEED-Net を通じて、環境工学分野における博士クラスを組織化できた。修了生は研究面での高い生産性を示している。国際的に学生を受け入れることよりコミュニケーションスキルも向上した。共同研究は研究成果の改善の面で、学部および学生に寄与している。また、共同研究により MI, JSU, HI とも強い絆を形成した。
- ✓ 修了生のなかより、傑出した研究成果にて、高等教育委員会、ナショナルアカデミーあるいは企業主催での受賞者を生み出している。
- ✓ AUN/SEED-Net を通じて、SI では多くの修士、博士を輩出している。これらは学部スタッフでなかったとしても、戻ってからスタッフの一員となるかあるいは産業界に加わるものが期待されている。
- ✓ プロジェクト修了生は未だ教育スタッフに柔和手いいため、能力評価はこれからである。
- ✓ ホスト大学として、研究活動、大学院学生の質・量、機材設備における便益があった。国際的大学院プログラムの実施や MI, JSU とのネットワークも経験として得られた。非ホスト大学としては、今後博士号保持者のみを雇用するという方針のもと、プロジェクトでの修了生が戻ることを期待する。
- ✓ (事) 非ホスト大学にとっては高位学位取得者が増えただけ学部教育への貢献と研究レベルの向上は明らかである。
- ✓ (事) ホスト大学の大学院課程の充実や機材供与はプラスの貢献であり、非英語国 (インドネシア・タイ) は英語コースの設置が国際化につながっている。

<p>✓ (事) 殆どのホスト大学の大学院としての活動が恒常化したとも言える</p> <p>✓ (事) アセアン内にて共通分野の教員間のネットワークが強化されつつある</p> <p>✓ (事) 共通課題に関する意識も醸成されつつあるが、共通課題に取り組める専門能力・マネジメント能力は今後のパワーアップが必要である</p>	<p>(名)</p> <table border="1" data-bbox="343 1008 470 1769"> <tr> <td>MI</td> <td>事務局</td> </tr> <tr> <td>8</td> <td>11</td> </tr> <tr> <td>0</td> <td>2</td> </tr> </table> <p>ほとんどの回答がプロジェクト以外にも大学(MI)における教育・研究能力の改善に寄与した活動はあるとしている。その他、コメントとして、世界の大学および機関との共同ネットワークを確立した。他各種学会等に加入し、共同研究と学問的質の確保に活動する。HUT</p> <p>✓ ASEAN パートナーおよび国内外企業と一緒に EU 諸国との共同プロジェクトを実施している。ITC</p> <p>✓ マニラ近郊の産業界にて働く学生に対する遠隔教育を開始した。これについてはチュロンコン大、北大とも協議している。またファイルン政府からも別途奨学金の支給が開始されるとともに、研究基金についても近日中に整備の予定である。</p> <p>✓ 企業の支援のもと、ソーラーカーレースにも挑戦している。DLSU 他、学会および学会誌での認知、国際会議への参画等。</p> <p>✓ 厳選された海外大学との教育および研究面での協調関係を持っている。NUS</p> <p>✓ IT 教育プロジェクトの向上。</p> <p>✓ 政府－産業界の支援による e サイエンス基金による研究活動を推進中。他タクノ基金も開始予定。</p> <p>✓ 海外のパートナーとダブル学位の共同プログラムを開始、Asia-Link・世銀等他ドナーとの人材育成、科学研究プロジェクト・海外研究機関との教職員・学生人材交流、他大学・企業との相互提起訪問、国際機関・大学・企業からの設備投資、322 件の国家プロジェクト予算等。HCMUT</p> <p>✓ 高等教育省・科学技術省・海外政府/国際機関/企業からの基金他 IBT, UGM</p> <p>✓ (双)他大学・研究機関との国際協調、産業界との共同研究、国際レベルでの学生および教員交流。</p> <p>✓ (事) AUN /SEED-Net 以外の奨学金や他国の援助は当然貢献している筈。</p>	MI	事務局	8	11	0	2
MI	事務局						
8	11						
0	2						
<p>2.7 プロジェクト以外にも貴大学(MI)における教育・研究能力の改善に寄与した活動はあるか</p>	<p>(名)</p> <table border="1" data-bbox="1045 1164 1125 1769"> <tr> <td>ある</td> <td>11</td> </tr> <tr> <td>ない</td> <td>1</td> </tr> </table> <p>一つのホスト専任大学を除いて期待があると回答している。その他、コメントとしては、プロジェクトによる修士・博士号取得者は来年度よりの潜在能力向上となる。HUT</p> <p>✓ プロジェクトによる修士・博士号取得者は効率的なコース開発を支援している。ICT</p> <p>✓ プロジェクトによる修士・博士号取得者の戻り後、カリキュラム開発、研究の質改善への寄与を期待する。HCMUT</p> <p>✓ 同窓会組織、共同研究指導教職員、セミナー、国際会議等を通じた関係とコミュニケーションおよび調整機能強化。HCMUT, ITB,</p> <p>✓ 学生指導、コース教育、分野別セミナーの実施・参画等に期待する。</p>	ある	11	ない	1		
ある	11						
ない	1						
<p>2.8 プロジェクトによる修士・博士号取得あるいは能力改善にて貴大学に寄与するものへの期待はいかなるものか。</p>							

<ul style="list-style-type: none"> ✓ ジュニア学部スタッフの資質向上、学会誌掲載・国際会議参加による高質な研究、学術ネットワークの強化等がみられた。さらに期待することは、国立研究組織による研究成果の認知、シニア学部スタッフの毎年の論文発表、JSU との共同 TV 授業実施、産業界との共同研究。 ✓ 同窓会組織関係の維持。NUS ✓ 学位取得者は学内にて研究活動に従事してほしい。一方、コミュニティへの技術・知識移転のために、指導者あるいはコンサルタントとしても仕えてくれるであろう。 ✓ ネットワーク確立による共同作業の実施。 ✓ 共同作業にて関係性とネットワークを維持できるであろう。これは人的資源を共有して、教育・研究プログラムの拡張につながるものである。HI であると同時に SI として、学位取得者には学部スタッフとして勤務し、AUN/SEED-Net プログラムに積極的に参加してほしい。 	<p><フェーズ2への提言></p> <ul style="list-style-type: none"> ✓ より開発の遅れた、ベトナム、ラオス、カンボジア、ミャンマーの MI への修士・博士号取得奨学金を拡大すること。 ✓ 財政的支援パッケージへの期待を提案書に記載した。 ✓ 修了者はフルタイムの学部スタッフとして戻してほしい。 ✓ 国立研究センター主催会議への出席頻度増加、COE としての地位保全、MI および JSU との資源および施設の共同利用、カリキュラム協調、産業界との人的交流の MOU 署名、学術創設等。 ✓ 同窓会組織との関係の強化。NUS ✓ 教職員交換・インターネット利用共同講義・ジョイント学位・共同研究促進他。IBT, UGM, HCMUT ✓ プロジェクト修了者による新規コースの開設。 ✓ 日本人教職員の派遣による研究チーム指導と教職員、学生対象のセミナー開催。 ✓ HI-SI 間 (アドバイザースタッフとして) での共同研究を定常的に実施すべきである。 ✓ 同窓会名簿の管理に努めて、確立されたネットワーク (MI, JSU) を向上する。 ✓ 同窓会活動への財政的支援、国内他大学との共同活動のためのセンター設立。
---	---

<p>3. 効率性</p>	<p>(名)</p> <table border="1" data-bbox="1085 1008 1276 1769"> <thead> <tr> <th></th> <th>MI</th> <th>事務局</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>適切に活用された</td> <td>11</td> <td>12</td> </tr> <tr> <td>部分的に活用された</td> <td>1</td> <td>2</td> </tr> <tr> <td>適切に活用されていない</td> <td>0</td> <td>0</td> </tr> <tr> <td>わからない/判断できない</td> <td>0</td> <td>0</td> </tr> </tbody> </table>		MI	事務局	適切に活用された	11	12	部分的に活用された	1	2	適切に活用されていない	0	0	わからない/判断できない	0	0
	MI	事務局														
適切に活用された	11	12														
部分的に活用された	1	2														
適切に活用されていない	0	0														
わからない/判断できない	0	0														

3.1 プロジェクト成果の達成のために活動による投入 (財政支援、JUS、研究機材、分野別セミナー他) はいかに活用されたか

3.2<日本側>
プロジェクト成果の達成のための投入について、その量、質、タイミングについてはどうか

日本側	MI	専門家数3	専門家熟達度3	派遣タイミング3	<ul style="list-style-type: none"> • HIへの適切なコーディネート/コンサルテーションがあった • 実施期間中のプロジェクトオフィサー、アカデミックアドバイザーによる支援が適切であった。 • 熟達度、タイミングとも良 • 派遣頻度がより多く5回以上なおよい
1) 日本人専門家 (AUN/SEED-Net 事務局 アドバイザー、調整員等) 派遣→適切	事務局	7	6	3	<ul style="list-style-type: none"> • 調整員に JICA 職員が含まれていることは、この種のプロジェクトでは必須であり、JICA 内外にも大きな効果を与えている • 専門家の専門分野における知識経験には特に問題はない
同上→不適切	MI 事務局	専門家数2 5	専門家熟達度2 1	派遣タイミング1 6	<ul style="list-style-type: none"> • プロジェクトのサイズとして調整員の数が十分でない • 長期専門家5人体制が理想である • 会計担当の専門家が必要 • チーフアドバイザーかアカデミックアドバイザーの常駐が望まれる
2) 日本人教員の貴大学への派遣→適切	MI	専門家数3	専門家熟達度4	派遣タイミング5	<ul style="list-style-type: none"> • 分野別派遣教員は研究テーマに合致していた→2件 • 頻度、熟達度、タイミングとも研究にマッチした→2件 • 共同研究での直接対話・Eメールにより、自由闊達な意見交換があった • スケジュールは綿密かつ討議が最大限であった • 研究アンブレラにより相違はみられる
同上→不適切	事務局 MI	7 専門家数1	6 専門家熟達度0	9 派遣タイミング0	<ul style="list-style-type: none"> • 本邦支援大学の教官の専門的な知識に特に問題はない • 学生への訪問頻度が重要である • 非ホスト大学への派遣増加を望む
	事務局	7	2	3	<ul style="list-style-type: none"> • 現状では非ホスト大学への派遣が殆ど行われず、そちらへの直接的貢献が少ない • 限られた人材だけが派遣されている傾向があり、人材の活用が不十分 • セミナーなどへ集団で派遣されるため、有効な活用がされていない • 日本の現職の大学教員はタイムリーに十分な期間の派遣が容易でない体制になっている • 専門知識というよりも日本比べ研究レベルが必ずしも高くない • アセアンのメンバー国の教員・学生に対する指導について(日本との将来の関わり等を考えて)積極的に協力してくれる、また今までそういう経験がなくても意義を見出してきてくれて協力してくれる、という教員は実は実際にはあまり多くない

3.2<日本側>
プロジェクト成果の達成のための投入について、その量、質、タイミングについてはどうか

日本側									
3) 研究機材供与→適切	MI	機材種類4	機材数量3	設置タイミン	0				<ul style="list-style-type: none"> 機材は適切で有用でありプロジェクト目的に合致している、質の高い研究成果を生み出している 特殊機材はとりわけ有用である 研究用のより大型機材の可能性はあるか 要請ベースでの供与故に有効である JICA による購入・納品プロセスは時間がかかり、研究活動に遅れを生じる 予算上の制約がある。納入への手続きの煩雑さによる納期の掛かりすぎ
同上→不適切	事務局	12	6	1					
	MI	機材種類1	機材数量3	設置タイミン	1				
	事務局	3	6	10					

日本側									
4) 日本での修士・博士課程プログラム→適切	MI	対象者数5	学生の質5	奨学金総額5	支給期間3				<ul style="list-style-type: none"> 学生の質も高く、総額も適切 サントイッチ博士課程の場合、環境適応を考慮して期間延長するの一案であろう PhDはASEAN 人的資源育成に増加すべき 学生に質はSI によるが選別は適切である 学生の質は現状では維持されている。 奨学金の供与期間は現状で十分である PhD3 年は修了に不適切 効果発現増大のため、奨学金増加と学生の質改善を図るべきである 理想的にはもっと多い方が適当である。しかし、ホスト大学の Capacity, 学生の質の維持などを考慮すると増加にも問題があるかもしれない。 3 年間の博士課程終了は日本・ホスト大学の双方にとっても相当の努力(本人および指導教員)が必要である。資金面を考慮しないのであれば、3.5 年または4 年の期間が与えられると理想である。
同上→不適切	事務局	6	10	12	6				
	MI	対象者数3	学生の質3	奨学金総額0	支給期間3				
	事務局	7	2	0	7				

3.2<日本側>
プロジェクト成果の達成のための投入について、その量、質、タイミングについてはどうか

日本側												
5) 分野別セミナー→適切	MI 事務局	頻度 6 10	テーマ 7 11	開催地 6 11	参加者数 2 8	<ul style="list-style-type: none"> MI の活発な参加、ネットワーク、交流、継続的の共同研究に寄与、他類似コメントあり 開催頻度は十分である 現在までの時点では分野別セミナーは多くの成果を出している これまでのところ特に問題はないが、第2フェーズでは大きな変更が必要と思われる 持続性には FWS への同窓生参加を増大させる必要あり、非 MI の取り込み等 分野横断型テーマの場合、関連分野最低 2 名ないし 3 名程度参加すべきである、 参加メンバーが固まりすぎている傾向もあり、レピーターも大事だが新メンバーへの拡張も必要である 予算が可能であれば、より多くの参加者が可能となる 						
	MI 事務局	頻度 1 5	テーマ 1	開催地 1 1	参加者数 4 6	<ul style="list-style-type: none"> AUN/SEED-Net は実質的な財政支援を継続するので 大学院プログラムとの連携の良い事例である 2 件 共同研究援助は増額要、また機材購入への充当も認める 申請ベースであることは有効である。 研究毎に見直し要、とりわけ実験主体研究について、修士課程学生が HI 登録時に一部研究資金支払い可能なることを推奨する 額が多ければ感謝されるであろう 各項目とも適切である プログラムは極めて重要かつ有効である 学生数増加に伴い研究者増加すべき 日本的には十分である。期間も受け入れ側の事情から現状で良い 非ホスト大学にとって、機会は限られかつ不規則である、他類似コメント数件あり 日当が小額なため、日本では持ち出しとなる、他類似コメント数件あり 申込みより招待を受けるタイミングが遅れ気味である 数を増やせば喜ばれる。年度末に集中しすぎる。同じ人間が何回も行くケースがある。非ホスト大学のメンバーの参加を促進すべきである 						
6) 共同研究資金→適切	MI 事務局	総額 4 14	支援項目 5 10	資金支払時期 5 10	<ul style="list-style-type: none"> 総額 4 14 支援項目 0 10 資金支払時期 0 10 							
	MI 事務局	総額 1 1	支援項目 0 3	資金支払時期 0 3	<ul style="list-style-type: none"> 総額 1 1 支援項目 0 3 資金支払時期 0 3 							
7) JSU への短期訪問支援→適切	MI 事務局	財政支援 額 3 11	研究者訪問数 4 9	訪問タイミン グ 4 9	<ul style="list-style-type: none"> 財政支援 額 3 11 研究者訪問数 4 9 訪問タイミン グ 4 9 							
	MI 事務局	財政支援 額 3 1	研究者訪問数 3 5	訪問タイミン グ 3 1	<ul style="list-style-type: none"> 財政支援 額 3 1 研究者訪問数 3 5 訪問タイミン グ 3 1 							

	日本側 8) MI 間での短期訪問支援→ 適切 同上→不適切	MI 事務局 MI 事務局	6 6	1 5	1 7	・共同研究奨励のために継続させるべき
3.2 < 貴大学 (MI) 側 > プロジェクト成果の達成のための投入について、その量、質、タイミングについてはどうか	貴大学(MI)側 1) 貴大学窓口の要員配置→ 適切 同上→不適切 2) コストシェアの体制→適切	MI 事務局 MI 事務局 MI 事務局	要員数 8 11 要員数 0 3 総額 4 総額 0 5	要員資格 7 6 要員資格 1 6 支援項目 6 総額 4 支援項目 0 6	要員能力 8 6 要員能力 1 8 支払タイミン グ 3 その他 事務スペース 2 人月 2 3 支払タイミン グ 0 1	<ul style="list-style-type: none"> ・管理 4 名学部 2 名 (2BS, 2MS, 2PhD) という事例あり NUS ・HI において、プログラムは有資格の能力あるスタッフにより効率的に運営されている USM ・業務遂行にはスタッフの資格要件や能力が左右する ・平均的には問題ないと言えるが、大学に依ってはこれらの問題が生じていることもある。ただプロジェクトの進行と共に改善されている ・すべての大学に当てはまるわけではないが、一部の大学においては全部の項目あるいは一部の項目について改善が望まれる ・AUN/SEED-Net 事務局および JICA 現地事務所とは良好な関係を保ち、適切な奨学金支払や運営手続きを確保する NUS ・PhD 学生の修年延長にも対処、独自で機材調達/維持管理費を充当する、その他施設利用やスタッフ賃金も補助 DLSU ・授業料補てん、とりわけ修年延長の場合 2 件 USM 他 ・プロモーション出張時に AUN/SEED-Net 支給の不足分補てん ・留学生への便宜供与 (出迎え、当初宿泊) ・必要な事務スペースや労力を充当 ITB, UGM ・現状は「学修期間の延長時」の授業料免除が主たるシェアだが、この点については問題は少なくなっている。 ・多少のスピードアップ要 現状のコストシェアは全体の予算からは微々たるものであり、第二フェーズの課題である。しかし、これはメンバー国により偏りが生ずることを是認する必要がある。

<p>3.3 実施プロセスの効率性に影響を及ぼす要因は何か、フェーズ2に向けての提言とか</p>	<p>コメントとしては、</p> <ul style="list-style-type: none"> ✓ フェーズ1においては概ね良好に実施されたものの、サードイッチプログラム等やや難があった。これは統一手順や、研究トピック選定、要求研究水準、論文出版等について MI のみならず、HI, JSUとの合意形成がなかったためである。これを教訓として、HI, JSU含めて、効率性の要因について議論し、実施プロセスの改善につなげることができる。 ITC ✓ すでに効率よく運営されており、これを維持すればよい。 UP ✓ 実施プロセスの効率性については満足している。 NUS ✓ 学生選別は学力によるものだが、SI のなかにはかならずしも学力優秀者を揃えているわけではなく、スタッフの資質向上が望めないことになる。選別には SI 側の優先度も考慮し、奨学金も割り当てとすべきである。 NUL ✓ AUN/SEED-Net 事務局、調整員とも効率的かつ献身的である。DLSU もプロジェクトを支援すべくコミットしている。強固なモニタリングシステムも確立された。JSU もプロジェクトの成功裡の実施にコミットしている。MI も協力的である。プロモーションツアアは応募者との直接面談の機会を与えて、HI にとつての市場を提供することになる。 提言としては、AUN/SEED-Net は MI に共同研究のための支援をすることである。 ✓ いくつかの MI では AUN/SEED-Net 活動についての情報が潜在的な学生/スタッフの行き届いていない。特別講義とかの別枠にて扱うのも一案。UOM ✓ 重要な問題は財政支援である。コストシェアの要素はあるものの、AUN/SEED-Net および JICA よりもたらされている。産業界からのコミットおよび支援は次期フェーズにおいて重要な要因である。AUN/SEED-Net は産業界のニーズを特定し、MI, HI にて適切な共同研究が計画できるようにワーキング協議会を設立すべきである。AUN/SEED-Net プログラムが ASEAN 地域での実体かつ高等教育における重要な役割遂行のお手本として地域の人的資源開発を促進すべきである。HI 同士における学際的領域研究の適切な研究計画策定も視野にいれる。改善された E ネットワークは HI, MI, JSU の愛代での情報アクセス・普及・フローに寄与する。フェーズ2においても AUN/SEED-Net が持続的を確保するように堅固な同窓コミュニティを設立することである。 USM ✓ スタッフが重要(アサイン人数、資格、能力) ✓ 実施プロセスは効率的かつマネジメント・コミュニケーションとも良好であるが、機材調達に関連し JICA 現地事務所の関与も要する(事)学位プログラムが基本だが、その他のプログラムはその支援として「研究の充実」「ネットワーク形成」など主目的にかなっている。現フェーズは、ホストにとつて「大学院の充実」に非ホストには「人材育成」に主として寄与している。アセアン全体の底上げには非ホストへのきめ細かいプログラムが第二フェーズでは必要である。 ✓ (事) 参加大学の積極性・主体性が重要要因である。それが強化されるようなプログラムを構築する必要がある。フェーズ2は、JICA サイドから見ると、最も適切にアセアン側にフェーズアウトするのがねらいのひとつであると考ええる。それが有効・達成するための最大限の日本側の協力・支援を期待したい。 ✓ (事) 各国の政府の方針と予算配分。そして各大学の方針と予算配分。粘り強く改善を働きかける必要がある。 ✓ (事) テレビ会議システムでなくとも、Skype などを利用した少数人数間のコミュニケーションが可能なインターネットスピードがメンバー国でも確保されれば、ある程度改善が可能か。 ✓ (事) メンバー校側からの Contribution がどの程度、増えていくのかで、また JICA 以外の外部資金がどの程度得られるかで、プログラムの量→質も左右される部分は少なくない
<p>4. インパクト</p>	

<p>4.1 上位目標は“ASEAN 諸国の産業界を再活性化するための人的資源開発によって、経済的持続性が拡大される”というものである。プロジェクト目標達成の結果として、上位目標に到達するか</p>	<p>(名)</p> <table border="1" data-bbox="180 1016 371 1776"> <thead> <tr> <th></th> <th>MI</th> <th>事務局</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>部分的に達成した</td> <td>11</td> <td>0</td> </tr> <tr> <td>達成が予測される</td> <td>1</td> <td>11</td> </tr> <tr> <td>達成困難である</td> <td>0</td> <td>1</td> </tr> <tr> <td>わかからない/判断できない</td> <td>0</td> <td>2</td> </tr> </tbody> </table> <ul style="list-style-type: none"> ✓ 部分的達成の理由としては、工学教育の知識は ASEAN 諸国に適用可能、大学パートナー間での人的資源の統合しやすさ、21 世紀のコンテクスト(アカデミックエグゼレンス、国家目標、産業研究、ハイテク開発)に対応する必要性、持続的開発という社会的ゴールに向けた効果的な研究開発への貢献—人口増加下でのニーズ、ライフサポートシステム、飢餓と貧困削減、持続的開発の確保、知識格差と知的協力推進 ✓ (双)AUN/SEED-Net は工学分野での人的資源開発の拡大を刺激したことにより、上位目標は達成されるであろう。産業界の再活性も続くものである、類似例数件あり ✓ 修了生は知識・経験を母国に持ち帰り、経済界に貢献することになる。 ✓ (双)修了生の数はいまだに、十分ではない。 NUOL ✓ MI, JSU のシナジーパートナーシップは、化学工学科のみならず全ての分野でのアカデミックネットワークと良好な関係を育成した。学科内の研究、学部、学生ともに改善がみられる。非 MI とのアカデミック結束も強化された。学部と学生との密接な研究活動によって斬新な大学院プログラムが開発された。 ✓ いくらかの学生は修了後に MI の母国において産業界に従事する。他は MI にて教員として、産業界にて働く未来の技術者を教えている。同窓会組織は各 MI, HI, JSU の活発な巻き込みを通じて、AUN/SEED-Net プログラムを支援するものとして継続が期待される。 ✓ (事) わかからない/判断できない理由として、現状では「何とも言えない」というところで、人材は容易には育たない。 ✓ (事) Overall Goal は目的から少し飛びすぎたゴールとなっている。解釈次第で数年後に貢献可能ではあるが、あまり本質的でないと思われる。 		MI	事務局	部分的に達成した	11	0	達成が予測される	1	11	達成困難である	0	1	わかからない/判断できない	0	2
	MI	事務局														
部分的に達成した	11	0														
達成が予測される	1	11														
達成困難である	0	1														
わかからない/判断できない	0	2														
<p>4.2 上位目標達成に影響する内的要因は存在するか</p>	<ul style="list-style-type: none"> ✓ わが国では、半導体産業を除き、産業界にて修士・博士を雇用することはない。引き続き、工学での人的資源開発の必要性の意識涵養を産業界に向けて発しているものである。産業界への提唱プログラムを含めることを推奨する。NUS ✓ わが国の学部学生のレベルは他 MI に立ち遅れている。 NUOS ✓ 大学は MI への短期訪問への展望を欠いている。宿泊施設も同様。政府関連省庁は、プロジェクトに最低限の関与しかしない。次期フェーズへの提言としては、AUN/SEED-Net 事務局は政府当局の関与を見直すこと、AUN/SEED-Net 事務局、JICA 事務所支援の HI は、アセアン諸国における産業界および非 MI との協調とネットワーク生成を助成すること。DLSU ✓ 他の HI は硬直化しており、調整は困難である。UOM ✓ 工学部全体の支援と貢献、首尾一貫した管理運営、書面や手続き上の恩恵、実施し易い環境等、類似例数件あり ✓ 参画する学科スタッフの大学院プログラム拡大へのコミットメント 															

	<p>✓ 奨学金や共同研究への財政支援、高度な研究機材等に問題あり。提言としては、これらに対する財政支援である。この目的において、関係する産業界の取り込みもすべきである。プログラムの成果は、まさにASEAN 諸国内産業界の再活性化のための人材開発であるからには、USM 類似例数件あり</p> <p>✓ 技術的ゴールと目標に対する共通認識</p> <p>✓ 地域および国際的認定制度</p> <p>✓ (事) 高等教育による人材育成プロジェクトさえも「5 年」という縛りがあるのは何としても理解に苦しむし、またそれを根拠にした暴論が時々日本サイドから出る。こういうプロジェクトは最初の5年に適正な成果が出たら、10～20年で以降は考えたい。「明らかに途中」と思える時期に終了したら、肝心な成果は他国に取られる。</p> <p>✓ (事) 各国の経済状況や政治状況の影響が大きい。事業の内容と設定されたゴールの間には十分な論理性・整合性がない。これら2つ目の内容については改善の余地がある。</p>																																																																		
<p>4.3 プロジェクトではどのようなインパクトがあったか</p>	<table border="1"> <thead> <tr> <th></th> <th></th> <th>正のインパクト</th> <th>負のインパクト</th> <th>インパクトなし</th> <th>わからない</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>a) 政策および規約の変更(貴あるいは他大学機関)</td> <td>MI 事務局</td> <td>9</td> <td>0</td> <td>3</td> <td>0</td> </tr> <tr> <td>b) 学習あるいは教育指導面での変化</td> <td>MI 事務局</td> <td>11</td> <td>0</td> <td>0</td> <td>3</td> </tr> <tr> <td>c) 技術面での変化</td> <td>MI 事務局</td> <td>9</td> <td>0</td> <td>2</td> <td>1</td> </tr> <tr> <td>d) プロジェクト以外でのアカデミック面の交流</td> <td>MI 事務局</td> <td>12</td> <td>0</td> <td>0</td> <td>2</td> </tr> <tr> <td>e) その他</td> <td>MI 事務局</td> <td>9</td> <td>0</td> <td>2</td> <td>1</td> </tr> <tr> <td></td> <td></td> <td>9</td> <td>0</td> <td>1</td> <td>4</td> </tr> <tr> <td></td> <td></td> <td>9</td> <td>0</td> <td>3</td> <td>0</td> </tr> <tr> <td></td> <td></td> <td>10</td> <td>0</td> <td>0</td> <td>4</td> </tr> <tr> <td></td> <td></td> <td>0</td> <td>0</td> <td>0</td> <td>0</td> </tr> <tr> <td></td> <td></td> <td>0</td> <td>0</td> <td>0</td> <td>0</td> </tr> </tbody> </table> <p>コメントとしては、</p> <p>✓ 3 大学との MOU 署名 ICT、3 大学3企業との MOU 署名 UGM、二十数大学・コンソーシアムとの MOU 署名 ITB</p> <p>✓ AUN/SEED-Net を手本とした政府奨学金プログラム、非英語圏学生への学部スタッフの適応、研究文化や出版面での拡大、他 MI との学術交流および協調(6 大学) UP</p> <p>✓ 学部の資格面での改善、研究活動と学会誌出版の増加、MI との強固な共同研究および学術ネットワーク、衛星通信設備利用の遠隔教育等 JSU とのチーム指導、プロジェクト外の学術交流としては 5 大学機関との MOU 署名含む活動がある。 DLSU</p> <p>✓ フェーズ2支援に向けた HI からのコストシェア枠組み、留学生呼び込みを寄与するカリキュラム改善、JSU との共同研究および監理を通じた活動参加より学んだ新規技術、MOU 署名等による他大学との学術研究活動(2 大学) USM</p> <p>✓ (事) 上記4項目は当然 Positive な Impact を与える。この Impact を更に顕著にして且つメンバー大学のみならずメンバー国政府機関および国民が認識し得るように、そして日本の「顔」が十分見えるようにするためのプロジェクト継続である。特に、b)による親日家・知日家の養成は日本へ大きな裨益をもたらす</p> <p>✓ 英語による講義は学生の語学能力を改善するのみならず、文化交流にも多大な影響を与えた</p> <p>✓ 日本人教授との共同研究は JSU と MI との間にて技術交流を促進した</p>			正のインパクト	負のインパクト	インパクトなし	わからない	a) 政策および規約の変更(貴あるいは他大学機関)	MI 事務局	9	0	3	0	b) 学習あるいは教育指導面での変化	MI 事務局	11	0	0	3	c) 技術面での変化	MI 事務局	9	0	2	1	d) プロジェクト以外でのアカデミック面の交流	MI 事務局	12	0	0	2	e) その他	MI 事務局	9	0	2	1			9	0	1	4			9	0	3	0			10	0	0	4			0	0	0	0			0	0	0	0
		正のインパクト	負のインパクト	インパクトなし	わからない																																																														
a) 政策および規約の変更(貴あるいは他大学機関)	MI 事務局	9	0	3	0																																																														
b) 学習あるいは教育指導面での変化	MI 事務局	11	0	0	3																																																														
c) 技術面での変化	MI 事務局	9	0	2	1																																																														
d) プロジェクト以外でのアカデミック面の交流	MI 事務局	12	0	0	2																																																														
e) その他	MI 事務局	9	0	2	1																																																														
		9	0	1	4																																																														
		9	0	3	0																																																														
		10	0	0	4																																																														
		0	0	0	0																																																														
		0	0	0	0																																																														

5. 自立発展性

5.1 プロジェクト完了後に AUN/SEED-Net の自立発展性に影響する能力、活動、支援策はつぎのうちどれかあるととらえるか

	MI	最重要	やや影響	無関係
a) AUN/SEED-Net 事務局のマネジメント能力	MI 事務局	9	3	0
b) HI の能力	MI 事務局	12	2	0
c) 他 MI の能力	MI 事務局	11	1	0
d) 修士・博士課程のための奨学金	MI 事務局	14	0	0
e) 共同研究活動	MI 事務局	11	1	0
f) 日本の大学からの支援	MI 事務局	11	3	0
g) 分野別セミナー	MI 事務局	10	2	0
h) MI 間での短期訪問	MI 事務局	14	0	0
i) 研究あるいはセミナー等イベント終了後のコンタクト保持	MI 事務局	8	2	0
j) 同僚への助言あるいは支援	MI 事務局	11	3	0
k) AUN/SEED-Net 修了生の帰国後における討議や共同作業	MI 事務局	7	5	0
その他	MI 事務局	8	6	0
	MI 事務局	7	4	
	MI 事務局	11	3	0
	MI 事務局	9	3	0
	MI 事務局	12	2	0
	MI 事務局	9	3	0
	MI 事務局	8	5	0
	MI 事務局	10	1	-
	MI 事務局	13	1	0
	MI 事務局	1	0	0

5.2 個々の活動について、これまでの自立発展性はどうかなるものか

		自立発展的	やや影響	無関係
a) ASEAN 諸国内での修士・博士課程向け奨学金	MI 事務局	5 4	5 6	1 5
b) 日本での博士課程向け奨学金	MI 事務局	4 1	4 10	3 3
c) 共同研究活動	MI 事務局	7 1	2 5	2 8
d) JSU からの教員派遣	MI 事務局	1 1	6 9	4 4
e) 分野別セミナー	MI 事務局	5 3	4 8	2 3
f) JSU への短期訪問	MI 事務局	1 2	7 8	3 4
g) MI への短期訪問	MI 事務局	2 2	3 4	5 8
h) AUN/SEED-Net 事務局	MI 事務局	7 2	3 5	2 7
i) 研究あるいはセミナー等イベント終了後のコンタクト保持	MI 事務局	10 9	2 0	0 5
j) 同僚への助言あるいは支援	MI 事務局	10 9	2 1	0 3
k) AUN/SEED-Net 修了生の帰国後における討議や共同作業	MI 事務局	10 9	2 1	0 4
その他				

<p>5.3 AUN/SEED-Netの自立発展性に影響する外部要因はあるか</p>	<p>✓ 国毎に異なるマネジメントおよび文化。他、HI 以外より挙げられたコメントを精査してほしい。これらはプロジェクトゴール達成にかかわるものを含むかもしれない。ITC</p> <p>✓ (双)政府関連省庁は奨学金支給、旅費、国際会議組織化等々を拡大することおよびプロジェクトへの積極的参画が望まれる。他、HI の大学院プログラムは研究活動を通して拡大された。プロジェクトは研究環境を涵養した。学部の資格向上に寄与した。学際的プロジェクトは高度な研究目指して奨励されるべきである。DLSU</p> <p>✓ 他 HI の協力と参加 UOM</p> <p>✓ 同窓会への継続的な活動参加は SEED-Net プログラムの持続性の主要因である。各国政府の継続的かつ強固な支援は SEED-Net プログラム持続性確保に必要である。USM</p> <p>✓ MI と日本との間の政治的ネットワークと当事国の実施環境</p> <p>✓ インパクトの増大のためには、規模の拡大が必須である。この場合は当事国政府と産業界の支援が必須である 類似例数件あり</p> <p>✓ (事) プロジェクトの Impact がどこまで及ぶかに依る。特に各国政府機関に現在のスキームの成果が認識されるかどうかにかかると。そのためには「人材育成」というプロジェクトの性格から短期間に成果が顕著にはならないので、日本からの援助は程度はともかく継続が必須である。</p> <p>✓ (事) 第1フェーズでは十分な持続性は得られない。第2フェーズが実施可能となるように日本側の適切な支援が得られることは大きな持続性の要因である。第2フェーズが終了される時期には、身の丈にあった規模で、持続可能性が得られるであろう。</p> <p>✓ (事) 現在の成果などには期待以上と認識している。その理由は幾つかあるが、プロジェクトとして 2 年間の準備期間がありその間に内容の修正が可能であったことが大きい。また、会議・セミナーなどを通してメンバー大学との頻繁な意見交換が行われたことも有効であった。しかし、未だ改善の余地は多くあり、第2フェーズへの期待は大きい。</p>
<p>貴大学参考データ 学位取得者数と比率</p>	<p>✓ HI としての NUS の場合、もともと 300 名近いスタッフ全員が PhD 保持者。UP の場合も 100%PhD、DLSU および USM も 80~90%PhD かつ残り Ms である</p> <p>✓ ITC, UM の場合はこれまで高位学位取得者は皆無に近い状態であったものが、ようやく数名程度含まれるようになった</p> <p>✓ UOL の場合、PhD および Ms 合わせて十数%であったものが、30%を上回るようになった。ただし、PhD は 2%以下</p> <p>✓ HCMUT の場合、スタッフに占める PhD 約 2 割、Ms4 割程度である。今後修了者が加わり、これらは増大する</p> <p>✓ ITB では、学科により異なるが、6~8 割近くが PhD である。プロジェクトの恩恵により、比率は不明、</p> <p>✓ UGM ではここ数年で PhD は 10 人以下より倍増しているが、比率は不明、</p> <p>✓ HI としての NTU では、PhD 保持者は 7 割近くを占め計 1100 名以上</p>

備考: MI からの回答状況 2007/6/21 現在回答済 HUT, ITC, UP, DLSU, NUS, NUOL, UM, USM, UGM, ITB, HCMUT, NTU 計 12 大学
事務局からの回答については、日本人 5 人、タイ人 9 人

JSU 質問票まとめ

9 大学 19 人から回答。

実績																															
1.1 教員の質が高位学位取得を通じて改善されたと考えられるか	<table border="1"> <thead> <tr> <th></th> <th>(人)</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>非常に改善</td> <td>4</td> </tr> <tr> <td>ある程度改善</td> <td>11</td> </tr> <tr> <td>あまり</td> <td>-</td> </tr> <tr> <td>全く</td> <td>-</td> </tr> <tr> <td>わからない/判断できない</td> <td>4</td> </tr> </tbody> </table> <p>8割の JSU 教員が SI の教員の質が高位学位取得を通じて改善されたと感じている。</p>		(人)	非常に改善	4	ある程度改善	11	あまり	-	全く	-	わからない/判断できない	4																		
	(人)																														
非常に改善	4																														
ある程度改善	11																														
あまり	-																														
全く	-																														
わからない/判断できない	4																														
1.2 (1) ホスト大学の大学院プログラムは向上したと考えられるか	<table border="1"> <thead> <tr> <th></th> <th>(人)</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>非常に向上</td> <td>7</td> </tr> <tr> <td>ある程度向上</td> <td>10</td> </tr> <tr> <td>あまり</td> <td>-</td> </tr> <tr> <td>全く</td> <td>-</td> </tr> <tr> <td>わからない/判断できない</td> <td>2</td> </tr> </tbody> </table> <p> ✓ 9割の JSU 教員が HI の大学院プログラムが何らかの形で向上したと感じている。 ✓ プロジェクトの実施によって、研究成果が国際的な水準になった大学もあれば、国際水準になりつつある大学もある。博士課程のプログラム運用についてプロジェクト期間中に問題点が改善されてコースワークがきちんと整備された大学もある。供与された機材により高度な研究成果が得られるようになったこと、日本の支援大学教員による指導、プロジェクトを担当する教員の取り組み姿勢などがプログラム向上の大きな要因である。 ✓ ただし学際的な領域では他分野との連携を強化する必要がある。 ✓ 国内支援体制の幹事大学、協力大学というスキームに無理があると思われる。 </p>		(人)	非常に向上	7	ある程度向上	10	あまり	-	全く	-	わからない/判断できない	2																		
	(人)																														
非常に向上	7																														
ある程度向上	10																														
あまり	-																														
全く	-																														
わからない/判断できない	2																														
(2) それぞれのホスト大学について、大学院プログラムが向上したか	<table border="1"> <thead> <tr> <th></th> <th colspan="4">(人)</th> </tr> <tr> <th></th> <th>非常に向上</th> <th>ある程度向上</th> <th>あまり向上していない</th> <th>向上してない</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>フィリピン</td> <td>1</td> <td>2</td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td>マレーシア</td> <td>1</td> <td>1</td> <td></td> <td>1</td> </tr> <tr> <td>タイ</td> <td>1</td> <td>3</td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td>モンクット王工科大学 (KMITL)</td> <td>1</td> <td>1</td> <td></td> <td></td> </tr> </tbody> </table>		(人)					非常に向上	ある程度向上	あまり向上していない	向上してない	フィリピン	1	2			マレーシア	1	1		1	タイ	1	3			モンクット王工科大学 (KMITL)	1	1		
	(人)																														
	非常に向上	ある程度向上	あまり向上していない	向上してない																											
フィリピン	1	2																													
マレーシア	1	1		1																											
タイ	1	3																													
モンクット王工科大学 (KMITL)	1	1																													

	インドネシア	バンドン工科大学 (ITB)	1	1												
	✓ 全般的にどのホスト大学の大学院プログラムは向上していると評価されている。(マラヤ大学については情報を得られなかった)。	ガジャマダ大学 (UGM)	3	2												
1.3 メンバー大学間の共同活動と人的つながりが強化されたと考えられるか	<ul style="list-style-type: none"> ✓ 回答者全員が、メンバー大学間の共同活動と人的つながりが強化されたと感じている。 ✓ 全般的に、FWS、相互大学訪問、ミーティングなどを実施することで、各分野の人的なネットワークが形成され、各メンバー大学の状況も把握できるようになったと評価されている。 ✓ メンバー大学間の研究成果を持ち寄って、論文集の出版が行なわれているケースもある。 ✓ 中には、ホスト大学、メンバー大学、JSU で e-learning システムの開発とコンテンツ教材の開発が進められているケースや、ホスト大学と JSU で AUN/SEED-Net プロジェクトの人的ネットワークを活用して JSU が実施している他のプログラム(例えば、ユネスコ人材育成プログラム)で、ホスト大学のスタッフを採用したり、ホスト大学とメンバー大学(ホーチミン工科大学、ハノイ工科大学、ブラパー大学、ガジャマダ大学等)で当プロジェクトを修了して帰国したスタッフを含めた共同研究等が行われているケースなど、波及効果がみられる。 ✓ ただし、上記のような例は一例であり、人的ネットワークを通じて具体的な共同活動や研究に至ったケースはそれほど多くない。また分野を超えたネットワークはまだ弱いため、これは今後の課題である。 	<table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <thead> <tr> <th></th> <th style="text-align: center;">(人)</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>非常に強化</td> <td style="text-align: center;">12</td> </tr> <tr> <td>ある程度強化</td> <td style="text-align: center;">6</td> </tr> <tr> <td>あまり</td> <td style="text-align: center;">-</td> </tr> <tr> <td>全く</td> <td style="text-align: center;">-</td> </tr> <tr> <td>わからない/判断できない</td> <td style="text-align: center;">1</td> </tr> </tbody> </table>		(人)	非常に強化	12	ある程度強化	6	あまり	-	全く	-	わからない/判断できない	1		
	(人)															
非常に強化	12															
ある程度強化	6															
あまり	-															
全く	-															
わからない/判断できない	1															
1.4 情報配信システム、活動管理体制、コミュニケーション・ネットワークがきちんと確立したと考えられるか	<ul style="list-style-type: none"> ✓ 全般的に情報配信システム、活動管理体制、コミュニケーション・ネットワークが確立したと評価されている。具体的には、HP の立ち上げや事務局の体制が強化され機能している点が評価されている。 ✓ 中には、Web からの情報発信量をもう少し増加して欲しいことや、定期的な情報提供は、まだ発信されるに至っていないと感じる声もあった。 ✓ 将来を考えると AUN/SEED-Net 事務局の機能を弱めていきながら、アセアンの各ホスト大学のその役割を移行し彼らの独立性を高めしていくことが重要だとの意見もあった。 	<table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <thead> <tr> <th></th> <th style="text-align: center;">(人)</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>きちんと確立</td> <td style="text-align: center;">8</td> </tr> <tr> <td>ある程度確立</td> <td style="text-align: center;">6</td> </tr> <tr> <td>あまり</td> <td style="text-align: center;">2</td> </tr> <tr> <td>全く</td> <td style="text-align: center;">-</td> </tr> <tr> <td>わからない/判断できない</td> <td style="text-align: center;">3</td> </tr> </tbody> </table>		(人)	きちんと確立	8	ある程度確立	6	あまり	2	全く	-	わからない/判断できない	3		
	(人)															
きちんと確立	8															
ある程度確立	6															
あまり	2															
全く	-															
わからない/判断できない	3															
1.5 (1) 参加大学の				(人)												

<p>活発な交流と国内支援大学(JSU)との協働関係を通じて、プロジェクトが目標としている「参加大学(MI)の教育と研究能力が向上」が達成されたと考えられるか</p>	<p>全般的に向上</p> <table border="1" data-bbox="183 840 335 1780"> <tr><td>9</td></tr> <tr><td>5</td></tr> <tr><td>1</td></tr> <tr><td>-</td></tr> <tr><td>4</td></tr> </table> <p>向上した大学が多いが、まだ不十分な大学もある</p> <p>不十分な大学が多い</p> <p>あまり向上していない</p> <p>わからない/判断できない</p> <p>✓ 約4割の回答者が参加大学の教育と研究能力が全般的に向上したと評価しているが、約3割はまだ不十分な大学もあると認識している。</p> <p>✓ JSUの教員は留学生やホスト大学の教員との協議や意見交換、セミナーでの発表、メンバー大学の日本短期派遣などによって、プロジェクト前と比較すると参加大学の教育と研究能力は確実に向上したと判断している。</p> <p>✓ ただしメンバー大学の中には、研究成果を持ち寄って出版される論文集に投稿できるレベルに達していない大学もいくつか残っているという意見やメンバー大学間のレベルの差があるという意見もあった。</p> <p>✓ さらに、本当の効果は終了した学生が自国の大学に戻ってから研究を継続し、形成された人的ネットワークを継続して始めて効果がでたと判断できるので、現時点で評価はできなという意見もあった。</p> <p>✓ 現時点で本プロジェクトで修士や博士の学位を取得し、母校に戻って教育・研究にたずさわっているスタッフはまだ僅かなので、その効果が見られるという段階ではないという意見もあった。</p> <p>✓ また、プロジェクトの範囲外ではあるが、自国の大学に戻った後に研究環境の不整備や資金不足で研究が継続できないケースもあり、成果があるかどうかはこの点も課題である。</p> <p>✓ 関わっている分野で、修士課程を修了した学生が、自国の大学に戻り、修士の研究課題に関連した、学生実験テーマを立ち上げ学生の実験・教育指導を既に行っている。</p>	9	5	1	-	4																																																							
9																																																													
5																																																													
1																																																													
-																																																													
4																																																													
<p>(2) メンバー大学を個別に見た場合、その教育と研究能力はプロジェクトを通じて向上したと考えられるか</p>	<p>(人)</p> <table border="1" data-bbox="917 660 1495 1736"> <thead> <tr> <th></th> <th>教育能力 (教育の質)</th> <th>研究能力 (研究の質)</th> <th>大学院の学生 レベル</th> </tr> </thead> <tbody> <tr><td>カンボジア工科大学(ITC)</td><td>3</td><td>3</td><td>1</td></tr> <tr><td>バンドン工科大学(ITB)</td><td>2</td><td>1</td><td>1</td></tr> <tr><td>ガジャマダ大学(UGM)</td><td>5</td><td>5</td><td>4</td></tr> <tr><td>ラオス国立大学(NUOL)</td><td>5</td><td>4</td><td>3</td></tr> <tr><td>マラヤ大学(UM)</td><td>-</td><td>1</td><td>-</td></tr> <tr><td>マレーシア科学大学(USM)</td><td>4</td><td>6</td><td>3</td></tr> <tr><td>ヤンゴン大学(UY)</td><td>2</td><td>2</td><td>-</td></tr> <tr><td>ヤンゴン工科大学(YTU)</td><td>-</td><td>-</td><td>-</td></tr> <tr><td>デラサール大学(DLSU)</td><td>3</td><td>3</td><td>3</td></tr> <tr><td>フリピン大学デリマン校(UP)</td><td>1</td><td>1</td><td>-</td></tr> <tr><td>ブラバール大学(BUU)</td><td>-</td><td>-</td><td>-</td></tr> <tr><td>チュロンコン大学(CU)</td><td>2</td><td>2</td><td>2</td></tr> <tr><td>モンクト王工科大学ラカバン校(KMITL)</td><td>2</td><td>3</td><td>2</td></tr> <tr><td>ホーチミン工科大学(HCMUT)</td><td>4</td><td>4</td><td>2</td></tr> </tbody> </table>		教育能力 (教育の質)	研究能力 (研究の質)	大学院の学生 レベル	カンボジア工科大学(ITC)	3	3	1	バンドン工科大学(ITB)	2	1	1	ガジャマダ大学(UGM)	5	5	4	ラオス国立大学(NUOL)	5	4	3	マラヤ大学(UM)	-	1	-	マレーシア科学大学(USM)	4	6	3	ヤンゴン大学(UY)	2	2	-	ヤンゴン工科大学(YTU)	-	-	-	デラサール大学(DLSU)	3	3	3	フリピン大学デリマン校(UP)	1	1	-	ブラバール大学(BUU)	-	-	-	チュロンコン大学(CU)	2	2	2	モンクト王工科大学ラカバン校(KMITL)	2	3	2	ホーチミン工科大学(HCMUT)	4	4	2
	教育能力 (教育の質)	研究能力 (研究の質)	大学院の学生 レベル																																																										
カンボジア工科大学(ITC)	3	3	1																																																										
バンドン工科大学(ITB)	2	1	1																																																										
ガジャマダ大学(UGM)	5	5	4																																																										
ラオス国立大学(NUOL)	5	4	3																																																										
マラヤ大学(UM)	-	1	-																																																										
マレーシア科学大学(USM)	4	6	3																																																										
ヤンゴン大学(UY)	2	2	-																																																										
ヤンゴン工科大学(YTU)	-	-	-																																																										
デラサール大学(DLSU)	3	3	3																																																										
フリピン大学デリマン校(UP)	1	1	-																																																										
ブラバール大学(BUU)	-	-	-																																																										
チュロンコン大学(CU)	2	2	2																																																										
モンクト王工科大学ラカバン校(KMITL)	2	3	2																																																										
ホーチミン工科大学(HCMUT)	4	4	2																																																										

	ハノイ工科大学 (HUT)
<p>1.6 上位目標の達成に AUN/SEED-Net が貢献するためには、どのような点に重点を置くべきか</p>	<p>ハノイ工科大学 (HUT)</p> <ul style="list-style-type: none"> ✓ 全体的に、プロジェクト開始前と比較すると、メンバー大学の教育・研究能力が向上したといえる。 ✓ 大学院の学生レベルについては、向上したと評価された大学もあるが、全般的に教育の質と研究の質の向上が大学院生のレベル向上につながるのには、まだ時間が必要だという評価だと考えられる。 <p>＜教育的な支援＞ ()内は同じ回答をした人数</p> <ul style="list-style-type: none"> ✓ フェーズ 1 を通じて教育支援を行なったメンバー大学、人材に対する定期的なフォローアップが必要(情報の供与、学生の日本への継続的な受け入れなど)。(2) ✓ 教育の質を高めるには、もつと基礎的な設備の充実をはからなければ、現実には厳しいものがある。 ✓ 国のインフラ整備や生活環境の向上のためには、当面は公共事業や農業、環境保全、廃棄物処理などに関わる分野の技術者・教育者の養成が大切であると認識している。そのような社会基盤体制が整うまでは息の長い継続支援と日本側のアドバイザーの掘り起こしが大切ではないか。 ✓ 日本で博士号を取得する優秀な留学生の数を大幅に増やす。工科系においては博士号が重要である。留学生在が日本をよく知ること、有意な人材として将来活躍することが見込める。 ✓ 単に学問のためだけの教育・研究の能力向上だけでなく、大学がその国・地域にとって役に立つための研究テーマの選び方および大学のあり方についての深い議論と検討が重要であると考える。 ✓ 学位取得後、自立を促すための研究活動や資金の支援 (2) ✓ 研究課題においても、当該国のニーズ、実情を反映した課題の選択 (全てに最先端・ハイクな研究課題を採択しない)が必要と思われる。 ✓ 国内支援大学の数を増加させ、学位を取得する学生を増加すること ✓ アセアン諸国が持続的に発展するためには、産業を興し、発展させる人材の養成、特にリーダーや教員になる人材と、それらを積極的に支える多くの人材の養成が必要。時間はかかるが、優れた教員の養成を行いながら、それらを支える工科系の人材を自国で養成できるようにすべき。 <p>＜資金援助＞</p> <ul style="list-style-type: none"> ✓ 学生が日本大学に留学する際に、学生への留学資金の援助に加えて、研究資金の援助があればいいのではないかと思う。 <p>＜人的ネットワークの強化＞</p> <ul style="list-style-type: none"> ✓ 現在進めている高等教育のシステムをサポートすること、関連する人材のネットワークを形成することが重要と考える。 ✓ 全ての国、大学からの当プロジェクトへの参加 ✓ 修了生の就職先を斡旋や、修了生同士のネットワークをサポートするような活動 (4) <p>＜産業界の巻き込み＞</p> <ul style="list-style-type: none"> ✓ 「産業界を活性化させる」という視点では、日本の企業へのインターンシップなども含めた、産学官の共同サポートを考慮に入れてもよいのでは。 ✓ 大学と産業界とのつながりを持たせるような仕組み(センターなど)作りにも重点を置いたほうがいいのと考える。 ✓ 共同研究テーマを立ち上げる際に、研究に関係する現地企業(日本からの進出企業があればベター)があれば共同研究の形で研究支援に参加してもらおう。 <p>＜他分野との連携＞</p> <ul style="list-style-type: none"> ✓ 生体材料工学の発展においては工学だけでなく、必要な医学系との連携の構築。

	<p>✓ ラオス・カンボジアへの重点化、災害について防災、復旧についての連携強化。</p>																																																
<p>2. 実施プロセスについて</p> <p>2.1 実施プロセスについて</p>	<p>(人)</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th></th> <th>適切だった</th> <th>ある程度適切だった</th> <th>あまり適切でなかった</th> <th>全く適切でなかった</th> <th>わからない</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>a. 活動計画、意思決定システム</td> <td>10</td> <td>4</td> <td></td> <td></td> <td>4</td> </tr> <tr> <td>b. 分野別のシステム(9分野)</td> <td>10</td> <td>5</td> <td>1</td> <td></td> <td>3</td> </tr> <tr> <td>d. 運営委員会の開催・機能</td> <td>4</td> <td>3</td> <td></td> <td></td> <td>9</td> </tr> <tr> <td>e. 国内支援委員会の開催・機能</td> <td>4</td> <td>5</td> <td></td> <td></td> <td>9</td> </tr> <tr> <td>f. メンバー大学の数</td> <td>7</td> <td>7</td> <td>1</td> <td></td> <td>3</td> </tr> <tr> <td>g. 奨学金プログラムの対象者の選考</td> <td>8</td> <td>5</td> <td></td> <td></td> <td>5</td> </tr> <tr> <td>h. 国内支援大学の数</td> <td>2</td> <td>10</td> <td></td> <td>1</td> <td>6</td> </tr> </tbody> </table> <p>適切でなかった理由：</p> <p>✓ 当分野における国内支援大学間の連携が不十分だった。</p> <p>✓ MI は、全分野について画一的に選ばれていたが、分野ごとに適切な大学もあれば、ふさわしくない大学もあったのではないかと。MI としてより適切な大学があり、その大学からも SEED-Net に参加したい要望が寄せられていた。</p> <p>✓ 意思決定システムについては、あまり明瞭でないという気がするが、少なくともホスト大学の意見に加え、国内支援委員の意見を反映する場が、(国内支援委員会とは別に)必要ではないかと。日本側からのプロジェクトの現場が最も見えているはずの国内支援委員の意見がこれまでに真剣に収集される機会がほとんどなく、大学へのヒアリングを早い時期に実施してほしかった。</p> <p>✓ ホスト大学の代表は意思決定システムに関与しているが、日本側への遠慮があり率直な意見が自由に述べているようには感じなかった。</p>		適切だった	ある程度適切だった	あまり適切でなかった	全く適切でなかった	わからない	a. 活動計画、意思決定システム	10	4			4	b. 分野別のシステム(9分野)	10	5	1		3	d. 運営委員会の開催・機能	4	3			9	e. 国内支援委員会の開催・機能	4	5			9	f. メンバー大学の数	7	7	1		3	g. 奨学金プログラムの対象者の選考	8	5			5	h. 国内支援大学の数	2	10		1	6
	適切だった	ある程度適切だった	あまり適切でなかった	全く適切でなかった	わからない																																												
a. 活動計画、意思決定システム	10	4			4																																												
b. 分野別のシステム(9分野)	10	5	1		3																																												
d. 運営委員会の開催・機能	4	3			9																																												
e. 国内支援委員会の開催・機能	4	5			9																																												
f. メンバー大学の数	7	7	1		3																																												
g. 奨学金プログラムの対象者の選考	8	5			5																																												
h. 国内支援大学の数	2	10		1	6																																												
<p>2.2 プロジェクト関係者(メンバー大学、国内支援大学など)はプロジェクトの活動に積極的に参加していると考えられるか</p>	<p>(人)</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th></th> <th>積極的に参加している</th> <th>参加は不十分である</th> <th>どちらともいえない</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>a. ホスト大学</td> <td>17</td> <td>-</td> <td>2</td> </tr> <tr> <td>b. ホスト大学以外のメンバー大学</td> <td>10</td> <td>3</td> <td>5</td> </tr> <tr> <td>c. 国内支援大学</td> <td>14</td> <td>2</td> <td>3</td> </tr> </tbody> </table> <p><関係者のプロジェクトへの参加についてよかった点></p> <p>✓ 地質・資源工学では、HI、MI、JSU が積極的に参加していたことがよかった。分野別セミナー開催時には、HI、MI、JSUC からの研究発表による国際シンポジウムも開かれ、SEED-Net 奨学生も研究発表を行ない、さらに JSUC からは、別の資金、研究費等から、教員、大学院生の参加もかなりあった。</p> <p>✓ 化学に関してホスト大学と JSU は積極的に参加している。環境についても、ここ数年積極的に活動を行ってきている。</p> <p>✓ JSU(ある大学)では、支援分野の環境工学・化学工学・電気電子工学以外の分野でも多くの参加教員をリストアップするなど、全体制で当たっている。当プロジェクトの人材ネットワークを活用し、優秀な研究者・学生の確保ができたと思われる。</p> <p><改善点></p> <p>✓ ホスト大学の本プロジェクト関係者が少人数に固定化する傾向があったので、関係者を増やすような意見をホスト大学に対し述べてきた。</p>		積極的に参加している	参加は不十分である	どちらともいえない	a. ホスト大学	17	-	2	b. ホスト大学以外のメンバー大学	10	3	5	c. 国内支援大学	14	2	3																																
	積極的に参加している	参加は不十分である	どちらともいえない																																														
a. ホスト大学	17	-	2																																														
b. ホスト大学以外のメンバー大学	10	3	5																																														
c. 国内支援大学	14	2	3																																														

<ul style="list-style-type: none"> ✓ 国内支援大学は、教員の個人的なネットワークを柔軟に生かせるような仕組みがあるか、より適切な配置ができたのか、と思う。 ✓ フェーズ2 では、日本の大学の掘り起こしを個別大学ごとに投げかけてはどうか。全国公募での競争では、どうしても全国的に組織を作る必要があり、日常業務に忙殺されて大学としてあまりその気になるところは多くないと思う。 ✓ 学生の研究の進捗状況、教員の指導等について、あまり負担にならない程度でいいが、HI、MI、JSU 間で定期的に報告あるいは協議するシステムを作ることが望ましい。 ✓ 教員同士の個人的なつながりをベースに活動している点があり、それは組織的な活動へ改善していく必要がある。 	<ul style="list-style-type: none"> <よい点・工夫されている点> ✓ 国内支援大学・ホスト大学・メンバー大学の教員間の連携に関するサポートが柔軟で、スムーズに実施されている。 ✓ プロジェクトの成否は、HI の活動と熱意が大きく影響する。その意味でフェーズ I での GMU は極めて積極的であった。 ✓ 予算措置も含めて教員間の交流が比較的活発に行われている点については評価できる。 ✓ サンドイッチプログラムで、JSU に研究費を手当てしていることは特筆すべき事項である。(このような仕組みがないと JSU 体制はくずれ、るものと思われる) <改善点> ✓ プロジェクトの進行状況における評価のフィードバック体制の確保 ✓ 分野間の交流がもっと必要。関連のある分野間で共同セミナーを実施したり、共同シンポジウムを実施することは有意義であろう。また、分野別セミナー開催を、関連の国際会議などに時期や場所を合わせ、セミナー参加者が国際活動を倍増させたり、国際学会の中に AUN/SEED-Net セッションを作ったりと、活発な国際活動に関与していくことが必要。 ✓ 重点分野別のホスト校の決定が難しいとは思いますが、第 2 フェーズでは見直しをしてもよいのではと感じる。 ✓ 国内支援校に関しては幹事校と協力校の関係が明確でなく、必ずしも適切な人選ができていないように思われる。 ✓ 優秀な人材(研究者)の確保、研究費の支援など日本の大学の参加のモチベーションを高める手段を構築できないだろうか。 ✓ どうしても専門が広範囲になるので、必ずしも参加者全員の関心の高いトピックスばかりではないし、場合によっては研究接点を見つけるのが難しい。 ✓ インドネシアの学生が、マレーシアで修士研究を行って、さらに日本のドクターコースへ進学できるような、一貫した教育システム。 ✓ 日本の教授陣が、メンバー大学を訪問できるシステム。 ✓ 地質工学分野について、事務局の努力にもかかわらず、HI、国内支援(幹事大学および支援)大学間のコミュニケーションが改善されていない。 ✓ もう少し、ホスト大学、メンバー大学、国内支援大学間の連携強化が必要で、そのための相互交流の機会を現状より多くした方がよい。
<p>1. 妥当性</p> <p>(1) わが国の工学系教育・研究</p> <p>1. AUN/SEED-Net の活動やネットワークに参加することで得られる意義・メリット(あるいはデメリット)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ✓ グローバル化が必然として進んでいく工学系教育・研究においては、1 つの国に限定せず教育・研究に関して多様な性を持つ多くの大学と連携して 1 つのプロジェクトを推進するのは意義がある。 ✓ アジアへの支援が中心になるのは妥当であり、基盤インフラの整備のようなハード面だけでなく、ソフト面での支援が重要である。その中でも人材育成への支援が、その国の将来にとって、またその国と日本とのパートナーシップを築く上でも重要である。 ✓ 積極的にアジアの発展に寄与することが我が国の今後の発展にとって必要不可欠であると、考えられ、その意味か

メリット)について

- ✓ からも当該プロジェクトは意義あるものと思われる。
 - ✓ 現代の地球規模での問題を解決するための工学分野の教育、研究には、国際連携は欠かせない。ケーススタディも海外での現地調査が必然的に多く、国際共同研究のパートナーとして、アジア各国の研究者、大学院生も、国際的に十分な水準であることは、共同研究を進める上でも非常に重要である。
 - ✓ ASEAN 諸国は今後成長が見込まれる国々であり、将来性のある国の次世代リーダーをわが国が育成することは工学系教育・研究だけでなく、わが国の将来にとって極めて大きいと思われる。(2)
 - ✓ 地域によって社会が求める研究テーマに大きな差があるということを認識するためのよききっかけとなりうる。
 - ✓ 意義というより責任がある。
 - ✓ 我が国の教員の目をアセアン諸国にもっと向かせることができると思う。国際化は必ずしも欧米に行くことではなく、アセアン諸国の意欲のある学生を教育することでもあると思う。
 - ✓ 現時点ではわが国の工学教育や研究の面でメリットはあまりないと思われるが、AUN/SEED-net の活動を通じて、これらの国々が研究・教育の面で力をつけてくれれば、日本の対等パートナーにもなってくるうえ、日本とアセアン、あるいは日本を含むアジア、さらには環太平洋といった大きなまとまりが形成できれば、日本が世界に向けて情報発信し、世界に対してリーダーシップをとる上で、大きな力になると考える。
 - ✓ 親日的な ASEAN の工学系大学の優秀な学生を ASEAN 諸国に輩出することができる。(2)
 - ✓ ASEAN の工学系大学の優秀な学生が日本に来て、優れた研究を行うことが可能になる。
 - ✓ 建設マネジメント分野においては、地域の実情に応じてその方法論は異なるが、研究範囲が飛躍的に広がることになり、その意義は極めて大きい。
- 日本の若手研究者、特に修士課程学生の意識の変化、グローバル化。

- (2)貴大学の組織
- ✓ 基本的にまじめで優秀な SEED-NET 学生を留学生として研究室で指導することは、他の学生などへの影響を考えると有益である。
 - ✓ 連携して研究成果を多数発表していくことは、研究成果としての業績だけではなく、国際的な連携プロジェクトの実現にもつながり、本専攻・本研究科にとっても有益である。(2)
 - ✓ 大学の国際化戦略と合致する。
 - ✓ 所属大学・部門ではアジアとの連携が重視されている(2)。東南アジア主要大学と協定を結び、共同研究、交流が進められており、AUN/SEED-Net の活動も、その延長に位置づけられている。さらに、JICA の事業に参加することは、社会貢献、国際貢献として位置づけられている。
 - ✓ 地質・資源工学分野は、地球規模での問題を教育、研究の対象としており、国際連携は欠かせない。ケーススタディも海外での現地調査が必然的に多く、国際共同研究のスキームが数多くあることは、大きなメリットである。
 - ✓ 東南アジアの協定締結大学から積極的に留学生を受け入れており、SEED-Net 本邦博士プログラムもその延長として、非常に有効に機能したほか、分野別セミナーなど、HI および MI 大学からも、本学への留学希望者との面談などが行なわれるなど、本学への留学希望者を発掘できる機会が多くあったことがメリットとしてあげられる。
 - ✓ 本プロジェクト修了者で非常に優秀な若手人材を、大学の研究スタッフとして雇用しているが、教育・研究に貢献している。大学の国際活動に大いに貢献している。
 - ✓ 日本は、欧米から学んできたので、今の日本の立場ではメリットの議論より責任があると感じる。
 - ✓ 所属大学へ優秀な学生を確保することができる(2)。

<ul style="list-style-type: none"> ✓ 国際協力という実績作りと、将来 ASEAN の大学が教育・研究面で力をつけたときに、よきパートナーとなるためのパイプ作り ✓ 所属大学とアセアン諸国の大学との教育・研究連携プログラムに発展する可能性がある。 ✓ ASEAN の工学系大学の優秀な学生が本学に来て、優れた研究を行うことが可能になる。 ✓ 国際性が育まれる(2)。 ✓ 人的つながりを生かして大学間交流を深めることで、留学生の増加が期待される。 ✓ 本学で行っているプログラム(ユネスコ人材育成プログラムなど)において、本プロジェクトの人材ネットワークを活用できることは、大きなメリットと思われる。 ✓ ASEAN からの優秀な学生との交流は、本学学生にとって他では得られない貴重な経験と思われ、本学の教育・研究の向上にもつながると思われる。 <p><デメリット></p> <ul style="list-style-type: none"> ✓ 組織として取り組むには分野別の枠組みを再考した方が良い。 ✓ 組織としてはメリットもあまり感じられない。 	<p>(3)個人(個々の教員)</p> <ul style="list-style-type: none"> ✓ 世界的なレベルの高い研究をしてみたいと考える学生に、その環境を提供できることは意義がある。 ✓ 優秀であっても、環境がそろわなければ、研究を推進して行けない。各学生に、どのような環境が必要なのか、教育を通して、その手法を学ぶことができるし、有益な成果も得られる。 ✓ ASEAN 諸国への貢献 ✓ 東南アジアの各地域をケーススタディとして、これまでも現地での調査、現地の主要大学との共同研究を以前から行なってきた。AUN/SEED-Net による共同研究、交流もその延長上であり、研究をさらに発展させることができた。 ✓ 当該分野は、地球規模での問題を教育、研究の対象としており、国際連携は欠かせない。ケーススタディも海外での現地調査が必然的に多く、国際共同研究のスキームが数多くあることは、大きなメリットである。 ✓ 分野別セミナーなどに、HI および MI 大学からも、本学への留学希望者との面談などを行ない、本学で受け入れる留学希望者を発掘する機会が多くあったことがメリットとしてあげられる。 ✓ 所属大学の方針にそった事業に参画できることは非常によい。 ✓ アセアン諸国の指導的教員と人的関係を構築できることも大きい。 ✓ 東南アジアのフィールド研究に力を入れることができ、また日本側の学生の現地派遣のためのインフラがかかり整備されたことはメリットである。 ✓ ホスト校の担当者との共同研究を通じて、別の留学生の受入れに際しても共同指導体制を考えることができる点がある。メリットとなった。 ✓ 優秀な人材を受け入れることができる(2)。 ✓ 国際協力という実績を作る、人的つながりを形成すること、将来の良き研究・教育のパートナーになりえるようすること ✓ 研究や勉学に対するひたむきさを実感できる点が教員としてはうれしい。 ✓ 日本人学生の博士進学率が低迷する中、優秀な学生を経済的な負担を心配せずに受け入れられること。 ✓ 研究の進展につながる(2)。 ✓ ASEAN の工学系大学の優秀な当研究室に来て、ASEAN の工学系大学の教員達と連携を持ちつつ、優れた研究を継続して行うことが可能になる。
---	---

<ul style="list-style-type: none"> ✓ 語学力を向上させ、文化・慣習を理解するなど、国際性を育むよい機会になる。 ✓ 人的つながりができたので、将来的には、共同研究あるいは学生の交流等につながるものと考ええる。 ✓ 研究範囲の拡大(3)。新たなテーマ、実験フィールドの発見。 ✓ 海外を対象に教育の機会が得られ、さまざまな国に教え子を持つことが出来る事、それが教員にとって一番のメリットと思う。 ✓ 参加しているユネスコ人材育成プログラムにおいて、化学工学分野のホスト大学であるDLSUより優秀なスタッフを研究員として迎えることができ、当プログラムに大いに貢献して頂いた。また、現在、博士後期課程の学生も1名おり、当研究室の日本人学生を含めた在校生の良い刺激、国際交流の機会となっている。 ✓ アジア事情の理解につながる。 <p>＜デメリット＞</p> <ul style="list-style-type: none"> ✓ 限られた予算および支援先の人的資源等の制約のもとに、効果を挙げるにはかなりの負担がかかる。 ✓ デメリットは時間がとられる。相手方が来学した時の接遇等に個人資金しか財政資源がない。 ✓ 学生の能力によっては教育上の負担が増加する。 ✓ デメリットは時間的な拘束が多少ある以外はとくに感じない。 	<p>2. フェーズ2で得られる意義・メリット</p> <p>(1)貴大学の組織</p> <p>①「ASEANの地域・産業界が共通に抱える課題(防災、環境、エネルギー、天然材料等)に対処する研究活動」、②「ネットワークのさらなる強化・拡充(地域学会の設立、メンバー大学以外の大産学、産業界等巻き込み)」、③「ジュニア・アセアンの大学を中心とした教員の資格向上の継続と大学院プログラムの強化」、④「ASEAN-Japan Partnership University of Technology(ネット</p> <ul style="list-style-type: none"> ✓ ネットワーク大学設立のスキームは効率的なプラットフォームとして機能し得る。参画するメリットというより、継続、持続性の観点から協力を考える。 ✓ 所属する大学、部門においては、アジアとの連携が重視されている。東南アジア主要大学と協定を結び、共同研究、交流が進められており、AUN/SEED-Netの活動も、その延長に位置づけられていることから、フェーズ2で計画されているネットワーク大学の設立はその延長上にある。当該分野は、まさに、フェーズ2で計画されている①の問題を教育、研究の対象としており、国際連携は欠かせない。ケーススタディも海外での現地調査が必然的に多く、国際共同研究のスキームが数多くあることは、大きなメリットであり、この延長上にフェーズ2で計画されている②が位置づけられる。また、JICAの事業に参加することは、社会貢献、国際貢献として位置づけられている。東南アジアの協定締結大学から積極的に留学生を受け入れ、これもこの延長上にフェーズ2で計画されている③が位置づけられる。 ✓ 所属大学はアジア志向を大学の方針の一つとして掲げており、組織の方針とフェーズ2の方針が一致するために参加する意義がある。 ✓ 東南アジアの主要大学とのパートナーシップが強化される点は、大きなメリットである。優秀な留学生を確保するため、の現地におけるインタビュアーが容易になる点も意義がある。アセアンの資源国との工学教育を通じた本プロジェクト推進は、これらの目的に大いに役立っている。 ✓ 優秀な人材の確保(2) ✓ 大学として社会にアピールすることができる。 ✓ 国際貢献の実績作りではメリットがある。 ✓ 大学の国際化戦略と合致し、継続的な交流関係が期待できる。 ✓ アセアン諸国への所属大学の認知度の向上。 ✓ 大学の教育・研究プログラムの多様性に繋がる可能性がある。 ✓ ASEANの工学系大学の優秀な学生が本学に来て、優れた研究を行うことが可能になる。
---	---

<p>ワーク大学)の設立</p> <ul style="list-style-type: none"> ✓ 国際性が育まれる。 ✓ 産業界への優秀なアジア人材供給という面で、産業界を巻き込んだ産学連携のプロジェクトの一環となる可能性があり、期待される。 ✓ 相手方の大学との交流協定等により、学生の交流が盛んになり、優秀な留学生の確保が期待される。 ✓ 新しい共同研究プロジェクトによる刺激。 ✓ 大学内の英語コースのさらなる発展。 ✓ これまでに培ったメンバー大学との協力体制の継続ができること、新たな関係を持つことが出来ること。 ✓ ASEAN 地域の発展に貢献することができ、またASEANの大学との交流を通し、ネットワークの構築を行うことができる。 ✓ 本プロジェクトを通して大学が国際交流(国際貢献)に参加していることを内外に広報することの意義は大きい。 <p><デメリット></p> <ul style="list-style-type: none"> ✓ ②③④については、ロードが重くなるわりに大学としてのアウトプットが低下し、デメリットが強くなると予想する。とくに、相手国の産業界をどういう形で巻き込むかによって、メリットはなくなる。 	<ul style="list-style-type: none"> ✓ 現時点では判断できない。 <p>(2)個人(個々の教員)</p> <ul style="list-style-type: none"> ✓ 工学研究は、個人のみで進められることは少なく、関連するグループとともに国際的に認められるプロジェクトを遂行できると考える。 ✓ 当該分野は、フェーズ2で計画されている①の問題を教育、研究の対象としており、国際連携は欠かせない。ケーススタディも海外での現地調査が必然的に多く、国際共同研究のスキームが数多くあることは、大きなメリットであり、この延長上にフェーズ2で計画されている②が位置づけられる。 ✓ 国際教育の実現には大いに関心を持っているので、国際ネットワーク大学設立に向けても貢献したいと考えている。 ✓ 優秀な人材の確保(2) ✓ ①については、新しいテーマの発掘と推進という点でメリットはありそうである。 ✓ 受け入れる学生にもよるが、研究戦力に育て上げるままではたいへんであり、そのハードルがクリアできれば大きな実を与えてくれる。 ✓ 研究の活性化につながる。 ✓ ASEAN の工学系大学の優秀な当研究室に来て、ASEAN の工学系大学の教員達と連携を持ちつつ、優れた研究を継続して行うことが可能になる。 ✓ 語学力を向上させ、文化・慣習を理解するなど、国際性を育むよい機会になる。 ✓ 新しい研究テーマのチャンス ✓ さらなる研究フィールドの展開 ✓ ASEAN の発展に貢献でき、ネットワークを通じて、優秀な学生の確保ならびに、研究室における国際交流を行うことができる。 ✓ 個々の教員の研究が広く ASEAN の大学と一緒に伸張していくことの満足と、国際交流に参画している事の満足感がある。 <p><デメリット></p> <ul style="list-style-type: none"> ✓ ③については、どのレベルの大学まで広げようとしているのか、その程度によってはロードばかり増えて研究が進ま
---	--

	<p>なくなるなどのデメリットが拡大することになる。</p> <p>✓ 研究教育のレベルを上げることが真摯に考えられる ASEAN の教員は、増加しているとはいえまだ一握りで、ネットワーク大学の設立を彼らは望んでいるのだろうか。</p>																																																												
<p>2. 有効性</p> <p>2.1 プロジェクト目標達成のために、本プロジェクトのアプローチは有効だったか</p>	<p>✓ 有効だった。非常に有効な戦略であると評価する。(3)</p> <p>✓ MI からの本邦支援大学への短期訪問プログラムがもっと有効に機能していればよかった、という印象がある。(率直なところ、単なる表敬訪問、見学になってしまったケースもあったような印象がある。一方で実質的な成果があった訪問もあった。)</p> <p>✓ アプローチ自体は有効。フェーズ2においてネットワークの更なる強化・拡充(メンバー大学以外の大学)はもともとでもであるが、工学を中心とした学際領域への発展を考えるのであれば必要な学部の取り込みも必須である。</p> <p>✓ ホスト大学には教育・研究に最低限必要な設備が整い始めていて、メンバー大学へのこのような資金供与がなされていないため、本プロジェクトで学位を得て自分の大学にスタップとして戻った卒業生は、思ったような教育・研究ができているので、基礎的な教育・研究設備が絶対必要である。</p> <p>✓ もう少し継続して卒業生の社会での活躍を追跡調査する必要があると思う。</p> <p>✓ MI の教育・研究能力が向上したかどうかは、現時点ではなんとも言えないが、少しずつ、これらを向上させようという教員の意識はできていないのではないか、少なくとも FWS 等で見ている範囲ではそう思える。しかし、現実はどうしようとしているのかは不明で、その意味ではあまり有効ではなかったかもしれない。向こうの中堅および上級教員に研究をさせたほうがいいのかもしれない。</p> <p>✓ 短期に評価はできないが、本プロジェクトの修了生は各出身国/大学において長期に影響を与え、さらに彼らの教え子の教育を通し、その効果は連鎖反応的に継続/増大することが期待できる。</p> <p>✓ 有効だったと思うが、学位を取った後のフォロー、3 年間で学位を取らせ研究者として自立させることが実際はかなり困難であるため、1,2 年延長して留学継続出来るような対応ができればよかったのではないかと。</p> <p>✓ 5 年間の第一フェーズでは、多くの学位取得者を輩出し、教育者・研究者としての種をまいた段階であり、今後の活躍が期待できると共に、彼らの更なるサポートも必要と思われる。</p>																																																												
<p>3. 効率性</p> <p>3.1 プロジェクトで実施した以下の活動は、「参加大学(MI)の教育と研究能力が向上する」という目標に対して、効果を発現させるために有効だったか</p>	<table border="1"> <thead> <tr> <th></th> <th>大変有効</th> <th>有効</th> <th>あまり有効でない</th> <th>有効でない</th> <th>わからない</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>a. ホスト大学での域内修士取得プログラム</td> <td>8</td> <td>8</td> <td></td> <td></td> <td>2</td> </tr> <tr> <td>b. サンドイッチ博士号プログラム</td> <td>11</td> <td>5</td> <td>1</td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td>c. 日本での博士号取得プログラム</td> <td>13</td> <td>4</td> <td></td> <td></td> <td>1</td> </tr> <tr> <td>d. 共同研究</td> <td>9</td> <td>5</td> <td>1</td> <td>1</td> <td>2</td> </tr> <tr> <td>e. 日本への短期訪問プログラム</td> <td>4</td> <td>10</td> <td>2</td> <td>1</td> <td>1</td> </tr> <tr> <td>f. メンバー大学間短期訪問プログラム</td> <td>5</td> <td>5</td> <td></td> <td>1</td> <td>6</td> </tr> <tr> <td>g. 分野別セミナー</td> <td>9</td> <td>8</td> <td></td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td>h. その他学術セミナー・ワークショップ</td> <td>4</td> <td>8</td> <td>1</td> <td></td> <td>4</td> </tr> <tr> <td>i. 日本人教員の派遣</td> <td>11</td> <td>4</td> <td></td> <td></td> <td>3</td> </tr> </tbody> </table>		大変有効	有効	あまり有効でない	有効でない	わからない	a. ホスト大学での域内修士取得プログラム	8	8			2	b. サンドイッチ博士号プログラム	11	5	1			c. 日本での博士号取得プログラム	13	4			1	d. 共同研究	9	5	1	1	2	e. 日本への短期訪問プログラム	4	10	2	1	1	f. メンバー大学間短期訪問プログラム	5	5		1	6	g. 分野別セミナー	9	8				h. その他学術セミナー・ワークショップ	4	8	1		4	i. 日本人教員の派遣	11	4			3
	大変有効	有効	あまり有効でない	有効でない	わからない																																																								
a. ホスト大学での域内修士取得プログラム	8	8			2																																																								
b. サンドイッチ博士号プログラム	11	5	1																																																										
c. 日本での博士号取得プログラム	13	4			1																																																								
d. 共同研究	9	5	1	1	2																																																								
e. 日本への短期訪問プログラム	4	10	2	1	1																																																								
f. メンバー大学間短期訪問プログラム	5	5		1	6																																																								
g. 分野別セミナー	9	8																																																											
h. その他学術セミナー・ワークショップ	4	8	1		4																																																								
i. 日本人教員の派遣	11	4			3																																																								

	<p>j. 研究機材の供与 6 9 1</p> <p>k. SEED-Net の学生のモニタリング 4 9 4</p> <p>l. SEED-Net の広報活動 5 9 3</p> <p>その他</p> <p>✓ 全般的に活動は有効だったという評価で日本での博士号取得プログラムは特に有効だという意見が多かった。</p> <p>✓ 一方で有効でなかったと評価された活動もいくつかある。</p>																																																				
<p>3.2 プロジェクトの投入の「質」「量」「タイミング」について</p>	<p>不適切なもの</p> <table border="1" data-bbox="459 280 970 1758"> <thead> <tr> <th data-bbox="459 1070 497 1758"><日本側></th> <th colspan="3" data-bbox="459 280 497 1070">調査項目</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td data-bbox="497 1070 536 1758">a. AUN/SEED-Net 事務局への日本人専門家の派遣</td> <td data-bbox="497 280 536 1070">□人数</td> <td data-bbox="497 280 536 1070">□専門分野 1</td> <td data-bbox="497 280 536 1070">□タイミン</td> </tr> <tr> <td data-bbox="536 1070 574 1758">b. メンバー大学への国内支援大学教員の派遣</td> <td data-bbox="536 280 574 1070">□人数</td> <td data-bbox="536 280 574 1070">□専門分野</td> <td data-bbox="536 280 574 1070">□その他 1</td> </tr> <tr> <td data-bbox="574 1070 612 1758">c. 域内修士プログラムへの支援</td> <td data-bbox="574 280 612 1070">□奨学金の額</td> <td data-bbox="574 280 612 1070">□支援対象 1</td> <td data-bbox="574 280 612 1070">□その他</td> </tr> <tr> <td data-bbox="612 1070 651 1758">c. サンドイッチ博士プログラムへの支援</td> <td data-bbox="612 280 651 1070">□奨学金の額</td> <td data-bbox="612 280 651 1070">□支援対象</td> <td data-bbox="612 280 651 1070">□その他 1</td> </tr> <tr> <td data-bbox="651 1070 689 1758">c. 本邦博士プログラムへの支援</td> <td data-bbox="651 280 689 1070">□奨学金の額</td> <td data-bbox="651 280 689 1070">□支援対象 1</td> <td data-bbox="651 280 689 1070">□その他</td> </tr> <tr> <td data-bbox="689 1070 727 1758">d. 共同研究支援</td> <td data-bbox="689 280 727 1070">□金額 1</td> <td data-bbox="689 280 727 1070">□支援対象</td> <td data-bbox="689 280 727 1070">□その他</td> </tr> <tr> <td data-bbox="727 1070 766 1758">e. 国内支援大学あるいはメンバー大学への短期派遣制度への支援</td> <td data-bbox="727 280 766 1070">□財務支援</td> <td data-bbox="727 280 766 1070">□受入人数</td> <td data-bbox="727 280 766 1070">□その他 1</td> </tr> <tr> <td data-bbox="766 1070 804 1758">f. 機材供与</td> <td data-bbox="766 280 804 1070">□機材の種類</td> <td data-bbox="766 280 804 1070">□量 1</td> <td data-bbox="766 280 804 1070">□その他</td> </tr> <tr> <td colspan="4" data-bbox="804 280 842 1758"><アセアン各国側></td> </tr> <tr> <td data-bbox="842 1070 880 1758">g. AUN/SEED-Net 事務局の人員配置 (タイによる)</td> <td data-bbox="842 280 880 1070">□人数</td> <td data-bbox="842 280 880 1070">□経験</td> <td data-bbox="842 280 880 1070">□その他</td> </tr> <tr> <td data-bbox="880 1070 919 1758">h. メンバー大学の担当者の配置</td> <td data-bbox="880 280 919 1070">□人数</td> <td data-bbox="880 280 919 1070">□経験</td> <td data-bbox="880 280 919 1070">□その他 1</td> </tr> <tr> <td data-bbox="919 1070 957 1758">i. メンバー大学による費用負担</td> <td data-bbox="919 280 957 1070">□金額</td> <td data-bbox="919 280 957 1070">□対象費目</td> <td data-bbox="919 280 957 1070">□タイミン</td> </tr> </tbody> </table> <p>✓ 機材供与の設置時期に関しては、不適切だったという意見が多かった。</p> <p><理由></p> <p>✓ 研究機器、機材の調達システムを効率化する必要がある。</p> <p>✓ 機材が納入された時期が大きく遅れて、初年度に入学の修士学生の修了後になってしまい、初年度入学の学生の研究に用いることができなかった。</p> <p>✓ 機材供与について、ホスト大学への量は決して十分といえないが徐々に充足している。メンバー大学への機材供与はまったく考慮されていないので、今後の検討に値する。また、これまでの機材供与の時期については予想より1~2年遅れる傾向があり、(JICAの)購入システムの見直しが必要である。</p> <p>✓ 機材は納入まで時間がかかる。メンバー大学の担当者は役割がこちらからは見えなかった。</p> <p>✓ 機材供与の問い合わせがあつてから2年以上経過して納入され、その頃にはサンドイッチ学生が日本に来ていた。このため、HIで研究が実施されないまま日本に来ていた。受け入れ側のほうに問題があつたのかどうかについては不明であるが。</p> <p>✓ 機材の供与に関して、環境工学はUPの学内事情により、開始が遅れたため大型機材の寄与の期間短くなり、支援が不十分であるように</p>	<日本側>	調査項目			a. AUN/SEED-Net 事務局への日本人専門家の派遣	□人数	□専門分野 1	□タイミン	b. メンバー大学への国内支援大学教員の派遣	□人数	□専門分野	□その他 1	c. 域内修士プログラムへの支援	□奨学金の額	□支援対象 1	□その他	c. サンドイッチ博士プログラムへの支援	□奨学金の額	□支援対象	□その他 1	c. 本邦博士プログラムへの支援	□奨学金の額	□支援対象 1	□その他	d. 共同研究支援	□金額 1	□支援対象	□その他	e. 国内支援大学あるいはメンバー大学への短期派遣制度への支援	□財務支援	□受入人数	□その他 1	f. 機材供与	□機材の種類	□量 1	□その他	<アセアン各国側>				g. AUN/SEED-Net 事務局の人員配置 (タイによる)	□人数	□経験	□その他	h. メンバー大学の担当者の配置	□人数	□経験	□その他 1	i. メンバー大学による費用負担	□金額	□対象費目	□タイミン
<日本側>	調査項目																																																				
a. AUN/SEED-Net 事務局への日本人専門家の派遣	□人数	□専門分野 1	□タイミン																																																		
b. メンバー大学への国内支援大学教員の派遣	□人数	□専門分野	□その他 1																																																		
c. 域内修士プログラムへの支援	□奨学金の額	□支援対象 1	□その他																																																		
c. サンドイッチ博士プログラムへの支援	□奨学金の額	□支援対象	□その他 1																																																		
c. 本邦博士プログラムへの支援	□奨学金の額	□支援対象 1	□その他																																																		
d. 共同研究支援	□金額 1	□支援対象	□その他																																																		
e. 国内支援大学あるいはメンバー大学への短期派遣制度への支援	□財務支援	□受入人数	□その他 1																																																		
f. 機材供与	□機材の種類	□量 1	□その他																																																		
<アセアン各国側>																																																					
g. AUN/SEED-Net 事務局の人員配置 (タイによる)	□人数	□経験	□その他																																																		
h. メンバー大学の担当者の配置	□人数	□経験	□その他 1																																																		
i. メンバー大学による費用負担	□金額	□対象費目	□タイミン																																																		

	<p>思われる。プロジェクトの末期であっても、必要な機材の供与を行う必要があると思われる。サンドイッチの部分、つまり日本の大学での研究期間が早めでないと、研究の方向性が定まることが遅くなり、3年で学位を取得するのが非常に苦しくなる。</p> <p>サンドイッチ博士課程では、最初に日本で研究の仕方を学び、それからHIで本格的に取り組む方が時間的なロスが少なくてすむのではないかと思う。</p> <p>(本邦博士プログラムへの支援)博士課程学生の国際活動への支援はまったくなく、プロジェクト研究への財政支援もない。これらは国内支援大学に完全に依存している。年間50～100万円程度は一人の本邦博士プログラム学生に実際に使用している。これらは本来、AUN/SEED-Netプロジェクトから支給されるべきではないでしょうか。</p> <p>(e)短期派遣制度: これまでは年度末に集中する傾向があり、もっと早い時期にすべきと考える。</p> <p>e: 交流の回数を増やす方が効果が上がる。</p> <p>4名のメンバー大学教員が1週間日本に滞在したが、受け入れ側も十分な準備やスケジュール調整ができず、費用対効果が小さかったように感じられた。</p> <p>日本人専門家の専門分野がプロジェクト全体の運営上どのように役に立っているのかがわからない。</p> <p>修士学生について、日本から co-investigator がついても、メンバー大学への派遣予算などないため十分な研究指導が出来ない。よって関係構築ができない。もし継続して博士課程へ進学、となった場合、マッチングの問題が発生する可能性があり、できれば修士学生の時代から、日本側教員とのコミュニケーションのための予算措置などがあると良いと思う。</p> <p>bは派遣回数を増やすほうが良い。</p> <p>c: 日本への派遣時期はできるなら日本の学期と合わせた、3月、9月がよい。</p>
<p>3.4 実施プロセスにおいて、何か解決すべき課題</p>	<p>Collaborative research が実際の教育、研究指導の中心的な役割を果たすことになるので、効率的かつ円滑な実施のための仕組みを再考する必要がある。具体的にはHIと国内支援大学の情報共有、意思決定がうまく機能しないケースが多い。</p> <p>生体材料を目的とする場合の教育研究者の選択。</p> <p>メンバー大学の一部の見直しが必要である。大幅な見直しは困難である。たとえば地質工学・資源工学分野ではベトナムのハノイ工科大学に連携相手は皆無であり、実際にはハノイ理科大学に連携すべき学科が存在する。両大学はもともと、ひとつの大学であった。第2フェーズの目標の一つ、「ネットワークのさらなる強化・拡充(地域学会の設立、メンバー大学以外の大学、産業界等巻き込み)」を目指すためには、現状を分析した上で、一部のメンバー大学を増やし、ネットワークが虚構とならないような見直しが必要と思われる。</p> <p>サンドイッチプログラムに関しては、派遣時期を早めて派遣期間を1年半ぐらいにしないと、実験装置の設計、製作、設置、実験、データのまとめまで終わらないと思われる。装置の設計や実験自体初めてである場合が多いため、実験半ばで帰国して、HIで実験が継続できないこともあるようである。</p> <p>開催されるセミナーは主に教員によって行われるが、もっと参加学生に発言の機会を与える工夫が必要。口頭発表以外にポスター発表の機会を与えてはどうか。</p> <p>FWSに関係する企業(日本からの進出企業を含めて)の参加と、2回のセミナーの中1回は1分野に限定しないで、関連する分野(材料と製造など)と連携、共同としたFWSも有効と思う。</p>
<p>4. インパクト</p> <p>4.1 プロジェクトを</p>	

実施したことによって発現する可能性がある項目は	<table border="1" data-bbox="145 353 391 1792"> <thead> <tr> <th></th> <th>インパクトが発生する可能性がある</th> <th>インパクトが発生する可能性はない</th> <th>現状では不明</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>a. 各メンバー大学の教育・研究方針の改善</td> <td>17</td> <td>-</td> <td>1</td> </tr> <tr> <td>b. 産業開発に必要な工学系人材の育成</td> <td>16</td> <td>-</td> <td>2</td> </tr> <tr> <td>c. 産業界のニーズにマッチした研究の実施/民間企業との共同研究への発展</td> <td>8</td> <td>-</td> <td>9</td> </tr> <tr> <td>d. プロジェクトの枠外でのメンバー大学と国内支援大学の交流活動の増加</td> <td>16</td> <td>-</td> <td>2</td> </tr> </tbody> </table> <p>✓ 上記のうち、産業界のニーズにマッチした研究の実施/民間企業との共同研究への発展は、将来実現するかどうかかわからないという意見が多かった。それ以外のものは、実現する可能性があるという意見が多い。</p> <p><その他のインパクト></p> <ul style="list-style-type: none"> ✓ プラスのインパクトとして、ホスト大学およびメンバー大学の教育の国際化が挙げられる。どの主要大学も国際化が重視されているが、そこまでの資金があるのはタイやマレーシアに限られる。ほかの大学での大きな変化は「国際化」であり、これに関する内外の評価は非常に高い。 ✓ ASEAN 地域の問題に対する日本の大学の理解度が進展する。 ✓ 双方の教員の意識の向上。学生の国際感覚の養成。 ✓ 確かに本プロジェクトは産業界の参加を全く前提としていない。セミナー等の開催時に、産官の参加を促すのもよいと思う。 ✓ 一人前の研究者として育てた人材が地域に戻って、教育や産業の分野で活躍することが、その後輩を育てることにつながるにより、本プロジェクトの成果となると考える。 		インパクトが発生する可能性がある	インパクトが発生する可能性はない	現状では不明	a. 各メンバー大学の教育・研究方針の改善	17	-	1	b. 産業開発に必要な工学系人材の育成	16	-	2	c. 産業界のニーズにマッチした研究の実施/民間企業との共同研究への発展	8	-	9	d. プロジェクトの枠外でのメンバー大学と国内支援大学の交流活動の増加	16	-	2																
	インパクトが発生する可能性がある	インパクトが発生する可能性はない	現状では不明																																		
a. 各メンバー大学の教育・研究方針の改善	17	-	1																																		
b. 産業開発に必要な工学系人材の育成	16	-	2																																		
c. 産業界のニーズにマッチした研究の実施/民間企業との共同研究への発展	8	-	9																																		
d. プロジェクトの枠外でのメンバー大学と国内支援大学の交流活動の増加	16	-	2																																		
5. 自立発展性																																					
5.1 現時点において、もし今後外部からの支援がないと仮定した場合、「メンバー大学」の自助努力により下記のプロジェクト活動を継続できる可能性はあるか	<table border="1" data-bbox="916 537 1260 1792"> <thead> <tr> <th></th> <th>継続可能</th> <th>継続は難しい</th> <th>わからない</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>a. 域内での修士と博士課程の奨学金</td> <td>1</td> <td>15</td> <td>2</td> </tr> <tr> <td>b. 共同研究研究</td> <td>8</td> <td>8</td> <td>2</td> </tr> <tr> <td>c. 分野別セミナーの開催</td> <td>2</td> <td>13</td> <td>3</td> </tr> <tr> <td>d. 国内支援大学への短期訪問</td> <td>2</td> <td>13</td> <td>4</td> </tr> <tr> <td>e. メンバー大学間の短期訪問</td> <td>4</td> <td>9</td> <td>5</td> </tr> <tr> <td>f. AUN/SEED-Net 事務局の維持</td> <td>-</td> <td>10</td> <td>8</td> </tr> <tr> <td>g. AUN/SEED-Net の卒業生とのネットワーク構築や共同活動</td> <td>11</td> <td>3</td> <td>4</td> </tr> <tr> <td>h. その他()</td> <td>-</td> <td>-</td> <td>-</td> </tr> </tbody> </table> <p>✓ ほとんどの活動が外部支援なしでは継続不可能だという判断である。</p>		継続可能	継続は難しい	わからない	a. 域内での修士と博士課程の奨学金	1	15	2	b. 共同研究研究	8	8	2	c. 分野別セミナーの開催	2	13	3	d. 国内支援大学への短期訪問	2	13	4	e. メンバー大学間の短期訪問	4	9	5	f. AUN/SEED-Net 事務局の維持	-	10	8	g. AUN/SEED-Net の卒業生とのネットワーク構築や共同活動	11	3	4	h. その他()	-	-	-
	継続可能	継続は難しい	わからない																																		
a. 域内での修士と博士課程の奨学金	1	15	2																																		
b. 共同研究研究	8	8	2																																		
c. 分野別セミナーの開催	2	13	3																																		
d. 国内支援大学への短期訪問	2	13	4																																		
e. メンバー大学間の短期訪問	4	9	5																																		
f. AUN/SEED-Net 事務局の維持	-	10	8																																		
g. AUN/SEED-Net の卒業生とのネットワーク構築や共同活動	11	3	4																																		
h. その他()	-	-	-																																		
5.2 「日本の国内支援大学」からの独自支援により、次のプロジェクト活動を	<table border="1" data-bbox="1331 537 1465 1792"> <thead> <tr> <th></th> <th>継続可能</th> <th>継続は難しい</th> <th>わからない</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>a. 本邦大学の博士課程に対する奨学金</td> <td>4</td> <td>8</td> <td>5</td> </tr> <tr> <td>b. 共同研究</td> <td>10</td> <td>6</td> <td>2</td> </tr> </tbody> </table>		継続可能	継続は難しい	わからない	a. 本邦大学の博士課程に対する奨学金	4	8	5	b. 共同研究	10	6	2																								
	継続可能	継続は難しい	わからない																																		
a. 本邦大学の博士課程に対する奨学金	4	8	5																																		
b. 共同研究	10	6	2																																		

<p>継続できる可能性はあるか</p>	<p>c. 国内支援大学からの教員の派遣 5 9 3</p> <p>d. 分野別セミナーの開催 3 11 4</p> <p>e. 国内支援大学への短期訪問 5 9 3</p> <p>f. AUN/SEED-Net の卒業生とのネットワーク構築や共同活動 10 4 4</p> <p>g. その他() - - -</p> <p>✓ 共同研究や卒業生とのネットワーク構築・共同活動は、JSU 独自の支援でも継続可能という意見が多いが、その他の活動の継続性は困難だという意見が多い。</p>																																								
<p>5.3 AUN/SEED-Net が今後自立的に発展していくために、以下の項目が影響を及ぼすと考えられるか</p>	<table border="1"> <thead> <tr> <th></th> <th>大きく影響する</th> <th>ほとんど影響はない</th> <th>わからない</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>a. AUN/SEED-Net 事務局のキャンパシテイ</td> <td>11</td> <td>2</td> <td>4</td> </tr> <tr> <td>b. ホスト大学のキャンパシテイ</td> <td>16</td> <td>1</td> <td>1</td> </tr> <tr> <td>c. その他のメンバー大学のキャンパシテイ</td> <td>10</td> <td>5</td> <td>3</td> </tr> <tr> <td>d. 奨学金の財源</td> <td>18</td> <td>-</td> <td>-</td> </tr> <tr> <td>e. 研究活動の財源</td> <td>16</td> <td>2</td> <td>-</td> </tr> <tr> <td>f. 日本の大学からのサポート</td> <td>16</td> <td>-</td> <td>2</td> </tr> <tr> <td>g. メンバー大学間の連携</td> <td>10</td> <td>3</td> <td>4</td> </tr> <tr> <td>h. AUN/SEED-Net の卒業生とのネットワーク構築</td> <td>12</td> <td>2</td> <td>3</td> </tr> <tr> <td>i. その他</td> <td>-</td> <td>-</td> <td>-</td> </tr> </tbody> </table> <p>✓ ほぼ全ての項目が、AUN/SEED-Net が自立的に発展していくために影響を及ぼすものとして認識されている。</p> <p>✓ その中でも奨学金の財源、ホスト大学のキャンパシテイ、研究活動の財源、日本の大学からのサポートは大きく影響するという意見が多かった。</p>		大きく影響する	ほとんど影響はない	わからない	a. AUN/SEED-Net 事務局のキャンパシテイ	11	2	4	b. ホスト大学のキャンパシテイ	16	1	1	c. その他のメンバー大学のキャンパシテイ	10	5	3	d. 奨学金の財源	18	-	-	e. 研究活動の財源	16	2	-	f. 日本の大学からのサポート	16	-	2	g. メンバー大学間の連携	10	3	4	h. AUN/SEED-Net の卒業生とのネットワーク構築	12	2	3	i. その他	-	-	-
	大きく影響する	ほとんど影響はない	わからない																																						
a. AUN/SEED-Net 事務局のキャンパシテイ	11	2	4																																						
b. ホスト大学のキャンパシテイ	16	1	1																																						
c. その他のメンバー大学のキャンパシテイ	10	5	3																																						
d. 奨学金の財源	18	-	-																																						
e. 研究活動の財源	16	2	-																																						
f. 日本の大学からのサポート	16	-	2																																						
g. メンバー大学間の連携	10	3	4																																						
h. AUN/SEED-Net の卒業生とのネットワーク構築	12	2	3																																						
i. その他	-	-	-																																						
<p>5.4 その他にプロジェクトの効果の持続性に影響を及ぼす要因はあるか</p>	<p><事務局に関連する項目></p> <p>✓ 事務局の組織自体は条件に合わせて変化するにしても、何らかの形で情報発信、集約の機能を持つ窓口が無いと、sustainability は維持できない。</p> <p><相手国政府、大学側に関連する項目></p> <p>✓ 各国政府教育省やHI, MI の大学当局による本プロジェクトへの評価の高さが、プロジェクト維持へのインセンティブを維持する指標となる。大学当局への資金供与がないので、大学レベルでは思ったほど重視しているわけではない。つまり、大学レベルでのプロジェクト実施への評価は、中身の質の高さに比べ、高くないという気がする。</p> <p>✓ ガジャマダ大学の担当学科では本プロジェクトの重要性がよく分かっている。しかし、大学や政府の財政状態も厳しいことから、担当学科がJICAや種々の企業から外部資金を確保できなくなるとたん、プロジェクト維持をあきらめる可能性もある。各国の高等教育への関心の高さが大きく関わると思われる。</p> <p>✓ HI およびMI の教員の意識の問題が大きく関与してくると考える。現在は、日本側の経済的サポートがあり、むしろそれを期待している部分が大いと考えられる。しかし、教員に教育・研究を向上させようという意識がなければ、経済支援がなくなっただ段階でネットワークがギクシャクしてくるであろう。そのためにも、自国産業界との結びつきを密にして経済的サポートを獲得する取り組みが必要ではないでしょうか。</p>																																								

	<p><財政面></p> <ul style="list-style-type: none"> ✓ 財政的なサポートがほとんどすべての要素に影響を及ぼす。自立的な発展のためには企業体や各国政府からのサポートをとりつけけないと、大学だけでは非常に困難と思われる。 <その他> ✓ 人材育成に時間がかかるのは明白であり、短期的な結果を期待するのは無理。人材が育成され、育成された人材が産業を活性化させ、アセアン諸国の経済的環境が向上し、教育状況が改善されるプロセスが必要。 ✓ 修了生の継続的な watch と交流支援。
<p>その他コメント・意見</p>	<ul style="list-style-type: none"> ✓ フェーズ I は全体として、成功裡に推移したと評価される。 ✓ フェーズ II をさらに効果的に進めるためには、防災・環境エネルギーといったキーワードのもとに現分野を再編すると共に、国内幹事大・協力大学というスキームは変更し、HI とのより緊密な連携を図る体制に変えた方が良い。 ✓ 生体材料に関しては世界的に研究が活発になっていくこと、学際的領域であることから、体制を整えて行えば、当該教育研究の推進によって参加校は新規分野への開拓精神、必要な学部等との連携構築が体験できるため極めて有効だと思われる。 ✓ 本プロジェクトの達成には、プロジェクトを通して生産された大量の修士・博士学位取得者が、メンバー大学に戻り、効果的な教育・研究を実施できるような設備拡充支援が絶対必要である。アセアンのメンバー大学やホスト大学、政府の教育担当者訪問するにつけ、本プロジェクトの人材育成に対し、各国の大変大きな期待が見られる。しかし、一方で、現場の教育・研究インフラのお粗末さの中で本プロジェクト卒業生が遭遇する失望もまた明らかで現実である。各国政府が高等教育への投資を減らす現状を変えさせることも重要であろう。しかし、現実には、これは簡単なことではない。本プロジェクトによる人材育成の大きな成果を失わないためには、本プロジェクトと設備拡充プロジェクトを相補的に実施しなければならない。 ✓ このプロジェクトで行なっている取り組みと、他の省庁が取り組んでいるプロジェクトとの融合、連携、協力などの整理が急務。例えば、本邦博士課程奨学金は文科省の国費留学生制度、短期派遣は JASSO の短期派遣留学生制度、ASEAN ネットワーク大学は MJJUT 構想との融合、修了生のサポートはアジア人材資金構想との融合、などが例に挙げられる。 ✓ 日本の大学の中では、国際化を唱えるといえども、その具体的な評価はなかなか難しい。本プロジェクトは日本国内の大学を具体的な国際活動に直接的に向かわせるものであり、現在関わっている国内の大学の数を増やすことが望まれる。特に、公共事業が少なくなっている土木部門においては、海外での社会基盤の整備に積極的に参入しており、アセアン諸国のこの分野の学生の教育には、我が国にとっても有益であると思う。 ✓ フェーズ 2 で、MI の拡充を行うとのことですが、その選定に当たっては慎重な判断をぜひともお願いしたく存じます。基本的には有力大学あたりに絞らないと、実効は上がらないと思います。 ✓ せっかくセミナーを開催するならば、もっとオープンにし、現地大学の学生や教員も参加できるようにしては如何でしょうか。特に、修了生の参加を望みます。セミナー開催時に配布されるバック等は不要。 ✓ 是非、フェーズ 2 も積極的に進めて頂きたい。 ✓ これまでの日本の ASEAN に対する支援、協力が物質重点に終始している中で、このプロジェクトは大学を中心としたしかも特定の国とか、大学に限定したのではなく、ASEAN 全体をカバーする教育研究を支援することであり、この意義は十分に評価されると考えます。そのためこのプロジェクトの長期継続は是非とも必要と考えます。教育は短期間で効果が出るものではないことを考えていたいただきたいと思う。

高等教育担当省庁質問票まとめ

2007年5月26日、マレーシアを除く全国からの回答。

<p>1 プロジェクト目標は国のニーズに合致しているか</p>	<table border="1"> <tr> <td colspan="2" style="text-align: right;">(名)</td> </tr> <tr> <td>合致している</td> <td style="text-align: center;">7</td> </tr> <tr> <td>部分的に合致している</td> <td style="text-align: center;">1</td> </tr> <tr> <td>合致していない</td> <td style="text-align: center;">0</td> </tr> </table> <p>シンガポールを除き、全回答が合致していると回答している。 <input checked="" type="checkbox"/> 人材育成、国際協調リサーチ、R&D インフラ、大学院の教育プログラムの向上、技術の先見力、情報収集能力、技術実用化力、環境保全、大学の国際化、共通課題へのキヤッチアップなど多方面でのニーズの合致が上げられている。 <input checked="" type="checkbox"/> シンガポールは「部分的に」とする理由として、シンガポールの大学とJSU 間のコラボレーションがないため、としている。</p>	(名)		合致している	7	部分的に合致している	1	合致していない	0
(名)									
合致している	7								
部分的に合致している	1								
合致していない	0								
<p>2 プロジェクト目標は達成されつつあると思うか</p>	<table border="1"> <tr> <td colspan="2" style="text-align: right;">(名)</td> </tr> <tr> <td>達成されつつある</td> <td style="text-align: center;">8</td> </tr> <tr> <td>部分的に達成されつつある</td> <td style="text-align: center;">0</td> </tr> <tr> <td>達成されているとは思わない</td> <td style="text-align: center;">0</td> </tr> </table> <p>全回答が達成されつつあると回答している。</p>	(名)		達成されつつある	8	部分的に達成されつつある	0	達成されているとは思わない	0
(名)									
達成されつつある	8								
部分的に達成されつつある	0								
達成されているとは思わない	0								
<p>3 上位目標は国のニーズに合致しているか</p>	<table border="1"> <tr> <td colspan="2" style="text-align: right;">(名)</td> </tr> <tr> <td>合致している</td> <td style="text-align: center;">7</td> </tr> <tr> <td>部分的に合致している</td> <td style="text-align: center;">1</td> </tr> <tr> <td>合致していない</td> <td style="text-align: center;">0</td> </tr> </table> <p>ミャンマーを除き、全回答が合致していると回答している。 <input checked="" type="checkbox"/> 産業育成、質の高い技術者、研究開発に従事する技術者の増加、アセアン域内での科学技術分野での協力、産学間の技術移転、経済発展における科学技術の重要性の認識の高まり、科学技術に関するプログラムを生み出し継続させる手段、人材育成などへのインパクトから国のニーズと合致していることがあげられている。 <input checked="" type="checkbox"/> ミャンマーは「部分的に」とする理由として、工学系の HRD だけでは国の経済を持続的に高めていくことはできないため、としている</p>	(名)		合致している	7	部分的に合致している	1	合致していない	0
(名)									
合致している	7								
部分的に合致している	1								
合致していない	0								

4 プロジェクト目標ならびに上位目標は国の政策に合致しているか	<table border="1"> <tr> <th>プロ目</th> <th>上位目標</th> </tr> <tr> <td>7</td> <td>7</td> </tr> <tr> <td>0</td> <td>0</td> </tr> <tr> <td>0</td> <td>0</td> </tr> </table>	プロ目	上位目標	7	7	0	0	0	0																																																			
プロ目	上位目標																																																											
7	7																																																											
0	0																																																											
0	0																																																											
プロジェクト目標ならびに上位目標とも、全回答が合致していると回答している。																																																												
5 プロジェクトの結果としてと、つぎことは改善されたかと思うか	<table border="1"> <thead> <tr> <th colspan="4">(名)</th> </tr> <tr> <th></th> <th>改善された</th> <th>変化なし</th> <th>不明</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>a) 大学院学位の教員スタッフ数</td> <td>7</td> <td>0</td> <td>0</td> </tr> <tr> <td>b) 大学院向け教育技能</td> <td>6</td> <td>1</td> <td>0</td> </tr> <tr> <td>c) HIとして大学院プログラムへの受入数</td> <td>6</td> <td>1</td> <td>0</td> </tr> <tr> <td>d) 大学院学生の学問レベル</td> <td>6</td> <td>1</td> <td>0</td> </tr> <tr> <td>e) 研究活動の数</td> <td>7</td> <td>0</td> <td>0</td> </tr> <tr> <td>f) 研究活動の質</td> <td>7</td> <td>0</td> <td>0</td> </tr> <tr> <td>g) コース内容</td> <td>5</td> <td>2</td> <td>0</td> </tr> <tr> <td>h) その他</td> <td>-</td> <td>-</td> <td>-</td> </tr> </tbody> </table>	(名)					改善された	変化なし	不明	a) 大学院学位の教員スタッフ数	7	0	0	b) 大学院向け教育技能	6	1	0	c) HIとして大学院プログラムへの受入数	6	1	0	d) 大学院学生の学問レベル	6	1	0	e) 研究活動の数	7	0	0	f) 研究活動の質	7	0	0	g) コース内容	5	2	0	h) その他	-	-	-																			
(名)																																																												
	改善された	変化なし	不明																																																									
a) 大学院学位の教員スタッフ数	7	0	0																																																									
b) 大学院向け教育技能	6	1	0																																																									
c) HIとして大学院プログラムへの受入数	6	1	0																																																									
d) 大学院学生の学問レベル	6	1	0																																																									
e) 研究活動の数	7	0	0																																																									
f) 研究活動の質	7	0	0																																																									
g) コース内容	5	2	0																																																									
h) その他	-	-	-																																																									
6 自国の MI の教育ならびに研究能力改善にプロジェクトの活動はどのように評価されるか	<table border="1"> <thead> <tr> <th colspan="4">(名)</th> </tr> <tr> <th></th> <th>たいへん有益</th> <th>有益</th> <th>有益でない</th> <th>不明</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>a) HI における修士および博士課程の学習</td> <td>6</td> <td>1</td> <td>0</td> <td>0</td> </tr> <tr> <td>b) 共同研究</td> <td>5</td> <td>2</td> <td>0</td> <td>0</td> </tr> <tr> <td>c) 日本の大学による支援</td> <td>6</td> <td>1</td> <td>0</td> <td>0</td> </tr> <tr> <td>d) 研究機材の支給</td> <td>5</td> <td>2</td> <td>0</td> <td>0</td> </tr> <tr> <td>e) 分野別セミナー</td> <td>5</td> <td>2</td> <td>0</td> <td>0</td> </tr> <tr> <td>f) MI への短期訪問</td> <td>4</td> <td>2</td> <td>0</td> <td>0</td> </tr> <tr> <td>g) 研究やセミナーの後のコンタクト保持</td> <td>5</td> <td>2</td> <td>0</td> <td>0</td> </tr> <tr> <td>h) 研究仲間からの助言および共同作業</td> <td>5</td> <td>2</td> <td>0</td> <td>0</td> </tr> <tr> <td>i) SEED-Net 修了生とのネットを通じた討議や共同作業</td> <td>3</td> <td>4</td> <td>0</td> <td>0</td> </tr> <tr> <td>j) その他</td> <td>-</td> <td>-</td> <td>-</td> <td>-</td> </tr> </tbody> </table>	(名)					たいへん有益	有益	有益でない	不明	a) HI における修士および博士課程の学習	6	1	0	0	b) 共同研究	5	2	0	0	c) 日本の大学による支援	6	1	0	0	d) 研究機材の支給	5	2	0	0	e) 分野別セミナー	5	2	0	0	f) MI への短期訪問	4	2	0	0	g) 研究やセミナーの後のコンタクト保持	5	2	0	0	h) 研究仲間からの助言および共同作業	5	2	0	0	i) SEED-Net 修了生とのネットを通じた討議や共同作業	3	4	0	0	j) その他	-	-	-	-
(名)																																																												
	たいへん有益	有益	有益でない	不明																																																								
a) HI における修士および博士課程の学習	6	1	0	0																																																								
b) 共同研究	5	2	0	0																																																								
c) 日本の大学による支援	6	1	0	0																																																								
d) 研究機材の支給	5	2	0	0																																																								
e) 分野別セミナー	5	2	0	0																																																								
f) MI への短期訪問	4	2	0	0																																																								
g) 研究やセミナーの後のコンタクト保持	5	2	0	0																																																								
h) 研究仲間からの助言および共同作業	5	2	0	0																																																								
i) SEED-Net 修了生とのネットを通じた討議や共同作業	3	4	0	0																																																								
j) その他	-	-	-	-																																																								
✓ ほとんどの活動は大変有益と評価されているが、SEED-Net 修了生とのネットを通じた討議や共同作業は相対的に有益度が低いと評																																																												

	<p>✓ 働されている。 また、ミャンマーはすべての項目について「有益」(「たいへん有益」でない)を選んでおり、これが「有益」という回答の数の5割近くを占めている。</p>														
<p>7 国または省からプロジェクトに対してインプットあるいは支援がなされたか</p>	<table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <thead> <tr> <th style="width: 80%;"></th> <th style="width: 20%; text-align: center;">該当</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>a) MI に対する補填</td> <td style="text-align: center;">0</td> </tr> <tr> <td>b) HI に送り出される留学生の奨学金</td> <td style="text-align: center;">0</td> </tr> <tr> <td>c) 運用上の人的支援</td> <td style="text-align: center;">3</td> </tr> <tr> <td>d) 短期訪問に対するロジ支援</td> <td style="text-align: center;">2</td> </tr> <tr> <td>e) その他(FWS 開催中のいくつかの活動の支援のためのファンド)</td> <td style="text-align: center;">1</td> </tr> <tr> <td>f) その他(タイによる事務局支援と奨学金)</td> <td style="text-align: center;">1</td> </tr> </tbody> </table> <p>✓ 事務局が設置されているタイを除くと、国または省からプロジェクトに対してインプットあるいは支援は金銭でなく、人的支援などがほとんどである。</p> <p>✓</p>		該当	a) MI に対する補填	0	b) HI に送り出される留学生の奨学金	0	c) 運用上の人的支援	3	d) 短期訪問に対するロジ支援	2	e) その他(FWS 開催中のいくつかの活動の支援のためのファンド)	1	f) その他(タイによる事務局支援と奨学金)	1
	該当														
a) MI に対する補填	0														
b) HI に送り出される留学生の奨学金	0														
c) 運用上の人的支援	3														
d) 短期訪問に対するロジ支援	2														
e) その他(FWS 開催中のいくつかの活動の支援のためのファンド)	1														
f) その他(タイによる事務局支援と奨学金)	1														
<p>8 SEED-Net プロジェクト以外に、高等教育や研究における教育や研究能力を高めるための、他国からの支援をうけているか</p>	<table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tbody> <tr> <td style="width: 50%;">a) はい</td> <td style="width: 50%; text-align: center;">4</td> </tr> <tr> <td>b) いいえ</td> <td style="text-align: center;">3</td> </tr> </tbody> </table> <p>✓ 「はい」と答えた国の内容は、まちまち。 ✓ 「いいえ」と答えた国はタイ、フィリピン、ミャンマー</p> <p>✓</p>	a) はい	4	b) いいえ	3										
a) はい	4														
b) いいえ	3														
<p>9 (たとえ他の類似な奨学金制度や研究支援制度など比べて)SEED-Net プロジェクトの強みと弱みはなにか</p>	<p>(強み)</p> <ul style="list-style-type: none"> ✓ 関係国が協力する協調スキーム ✓ 互いに支援補完しあう計画性のある諸活動 ✓ 各 HI が自分たちの得意な分野で大学院のプログラムを提供するスキーム ✓ 分野に分けて運用されていること ✓ 専門技術のみでなく必要なサポートを提供している ✓ きちんとしたモニタリングと評価活動 ✓ MI における HRD というミッションが明確である ✓ 不言実行タイプである ✓ 訪問、FWS、短期交換プログラムその他の活動がよい成果と信頼関係をもたらしている ✓ MI の教育者の質の向上をもたらしている 														

	<ul style="list-style-type: none"> ✓ ASEAN の大学間のネットワークとコミュニケーションを強化している ✓ 学術ならびに科学に関する交換の場である FWS が向上している (弱み) ✓ HI と HI でない大学間の格差が縮まっていない。この格差を縮めることを検討すべき 																
<p>10 将来プロジェクトが終了した後、SEED-Net は継続されるべきと考ええるか</p>	<p style="text-align: right;">(名)</p> <table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="width: 70%;">現在と同じ形で残されるべき</td> <td style="width: 30%; text-align: center;">7</td> </tr> <tr> <td>部分的に残されるべき</td> <td style="text-align: center;">1</td> </tr> <tr> <td>不要</td> <td style="text-align: center;">0</td> </tr> </table> <p>理由としては、</p> <ul style="list-style-type: none"> ✓ HRD は教育システムにおいて常にコアである ✓ メンバーを広げて、ASEAN における質の高いエンジニアを作り出していく必要がある ✓ JSU と JICA の絶大な支援と貢献により MI の能力が向上させてきた。次はアセアンの MI の自助努力や貢献によって、プロジェクト活動を通常のプログラムとし、自立発展性を確保すべきである。(部分的に残されるべき、タイ) ✓ MI の教員の質が向上してきたので、継続すべき ✓ 優秀な人材はまだ不足しており、長期ビジョンの達成には SEED-Net の継続は大変重要であると考えている。 ✓ 科学技術は研究や技術開発、地域の経済統合のニーズへの対応などを通じて、経済発展の持続性にとってキーファクターであり、社会の福利を増やし、ASEAN の統合を推進するので。 <p>もし残されるべきと答えた場合、プロジェクト終了後 SEED-Net を継続させるための国や省からのインプットや支援を増やすことは可能かという質問に対しては、肯定的な回答が多い中、シंगाポールは「増やす意思はない」、ミャンマーは「わからない」と回答した。</p> <table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="width: 70%;">可能性は非常に高い</td> <td style="width: 30%; text-align: center;">3</td> </tr> <tr> <td>可能と思われる</td> <td style="text-align: center;">3</td> </tr> <tr> <td>困難と思われる</td> <td style="text-align: center;">0</td> </tr> <tr> <td>増やす意思はない</td> <td style="text-align: center;">1</td> </tr> <tr> <td>わからない</td> <td style="text-align: center;">1</td> </tr> </table>	現在と同じ形で残されるべき	7	部分的に残されるべき	1	不要	0	可能性は非常に高い	3	可能と思われる	3	困難と思われる	0	増やす意思はない	1	わからない	1
現在と同じ形で残されるべき	7																
部分的に残されるべき	1																
不要	0																
可能性は非常に高い	3																
可能と思われる	3																
困難と思われる	0																
増やす意思はない	1																
わからない	1																
<p>11 プロジェクトフェーズ2は貴国の政策や戦略に合致していると思うか</p>	<p style="text-align: right;">(名)</p> <table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="width: 70%;">合致する</td> <td style="width: 30%; text-align: center;">8</td> </tr> <tr> <td>合致しない</td> <td style="text-align: center;">0</td> </tr> <tr> <td>分からない</td> <td style="text-align: center;">0</td> </tr> </table>	合致する	8	合致しない	0	分からない	0										
合致する	8																
合致しない	0																
分からない	0																

6. 留学（高位学位取得）プログラム詳細実績

留学プログラム 奨学金授与数 ホスト大学別（2001-2007年度） 6-1

Country	HI	Master's							PhD Japan							PhD Sandwich					PhD Singapore			Total		
		01	02	03	04	05	06	07	Total	02	03	04	05	06	07	Total	03	04	05	06	07	Total	06		07	Total
Indonesia	ITB	0	0	3	8	6	5	6	28								0	1	0	2	1	4				32
	UGM	0	0	5	4	6	5	6	26								1	1	2	1	0	5				31
Malaysia	UM	0	0	5	4	6	5	5	25								0	1	2	3	2	8				33
	USM	0	1	4	5	5	5	5	25								0	1	1	3	3	8				33
Philippines	DLSU	0	0	6	9	6	5	5	31								0	3	2	2	3	10				41
	UP	0	1	0	2	6	5	6	20								0	1	1	1	2	5				25
Singapore	NTU	0	9	2	1	1	2	3	18														3	3	21	
	NUS	1	3	2	5	6	5	3	25														3	4	7	
Thailand	CU	1	7	19	15	14	9	11	76								3	5	3	5	5	21				97
	KMITL	6	1	5	7	7	5	6	37								2	0	2	1	1	6				43
Japan	JSUs									3	4	9	9	13	18	56										56
Grand Total		8	22	51	60	63	51	56	311	3	4	9	9	13	18	56	6	13	13	18	15	67	3	7	10	444

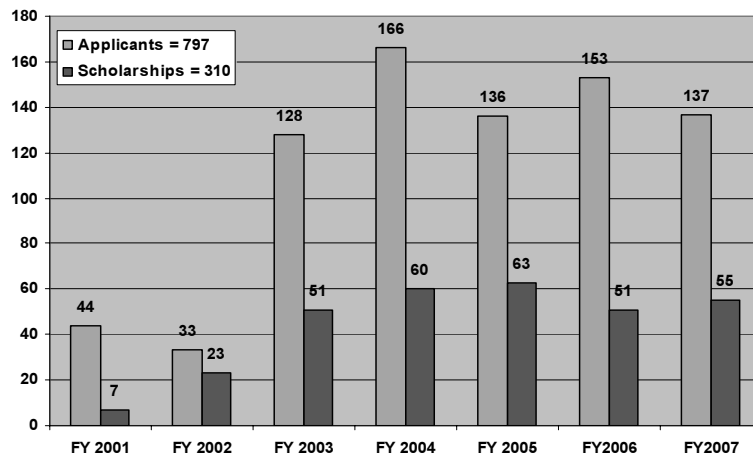
留学プログラム 奨学金授与数 送り出し大学別（2001-2007年度） 6-2

Country	MI	Masters							PhD in Japan Students							PhD Sandwich Students					PhD SIN		Total		
		01	02	03	04	05	06	07	02	03	04	05	06	07	03	04	05	06	07*	06	07**				
Brunei Darussalam	ITB (BRU)																					0		0	
	UBD																					0		0	
Cambodia	ITC		1	3	8	10	9	10				1	1	4	1	1		1	3			53		53	
Indonesia	ITB (INA)			4	4	7	6	4	1	1				2	4		1		1			1	36		122
	UGM		9	14	10	9	7	11		1	2	4	2	1	1	4	4	3	1	2	1	85		85	
Lao PDR	NUOL	6	3	8	13	9	8	7		1				2	1	2		2	2	4			68		68
Malaysia	USM				2		1				1		1					1	1			7		9	
	UM								1		1											2		2	
Myanmar	YU	1		1	2	4									2	1	1	2	2			16		28	
	YTU			2	1	3	2	2						1							1	12		12	
Philippines	DLSU	1	6			2	1	2												1		13		13	
	UP			1	1	3	2	1	1			1	1	1					1			13		13	
Singapore	NTU																					0		0	
	NUS																					0		0	
Thailand	BUU			1		1	3	4														9		9	
	CU										1											1		13	
	KMITL				1					1	1											3		3	
Vietnam	HCMUT			8	10	7	6	7			2	1	4	4		5	3	3	4		2	65		65	
	HUT			3	8	9	8	6	8			1	2	2		1	2	4	3		2	58		58	
Grand Total		8	22	51	60	63	51	56	3	4	9	9	13	18	6	13	13	18	17	3	7	10		444	

域内修士プログラム

6-3

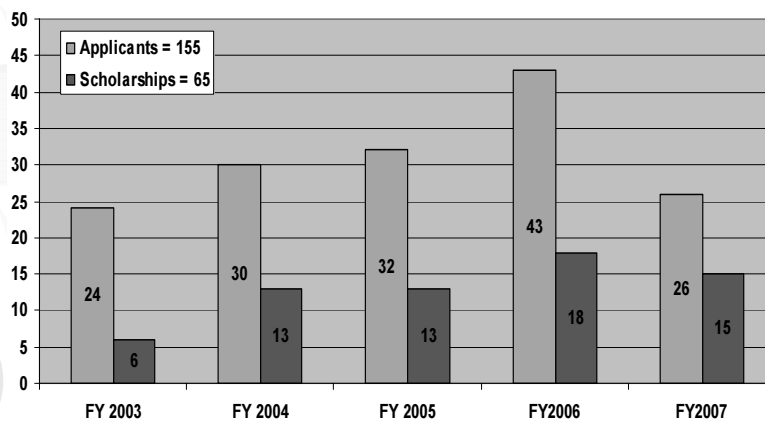
2001-2007年度 応募者数と合格者数



サンドイッチ博士プログラム

6-4

2003-2007年度 応募者数と合格者数

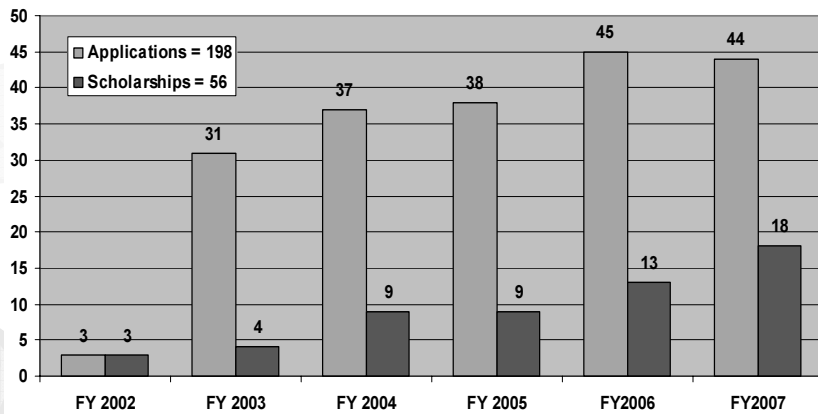


※2007年度は3名分の枠が未決定 (as of 24 Jul 07)

本邦博士プログラム

6-5

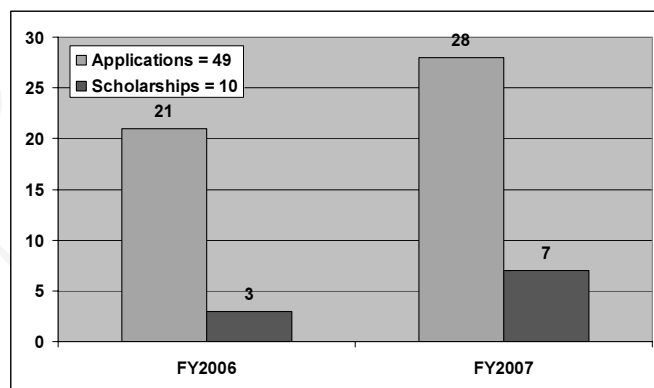
2002-2007年度 応募者数と合格者数



シンガポール博士プログラム

6-6

2006-2007年度 応募者数と合格者数



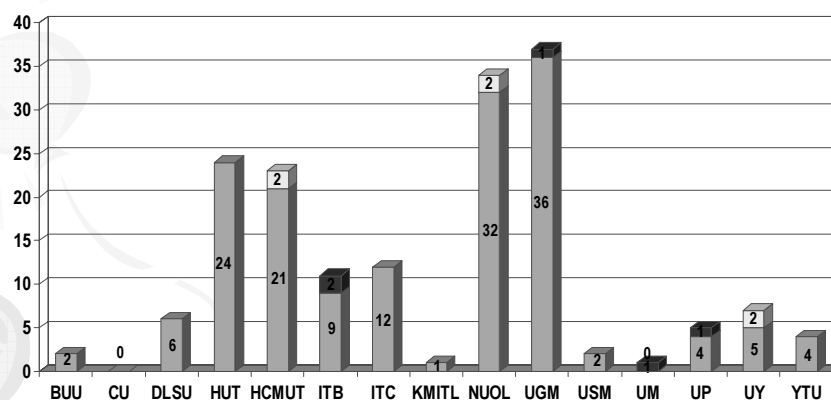
2006年度人数枠: シンガポール国立大学 3名
2007年度人数枠: シンガポール国立大学+ナンヤン工科大学 合計20名

現在までの卒業生数 ホスト大学別

6-7

合計 169 人

■ Master's = 158 □ PhD SW = 6 ■ PhD JP = 5

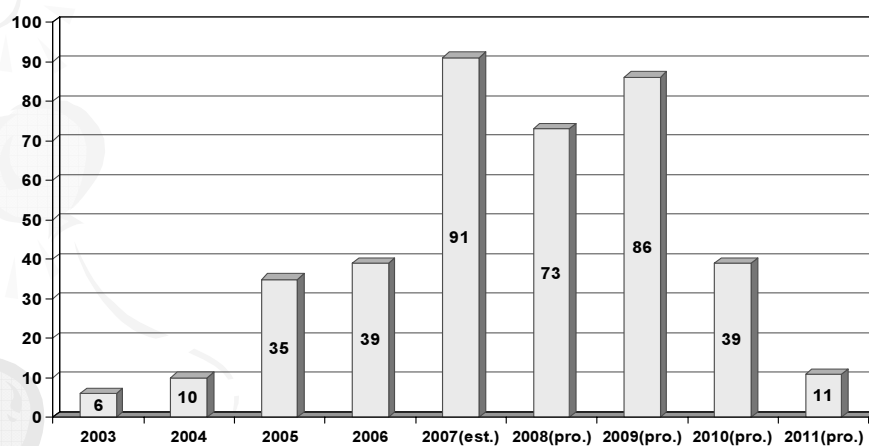


(As of 27 Jul 07)

年度別の卒業生数

6-8

合計 390名



(※SEED-Netで修士と博士の双方を取得した場合は最終学歴のみカウントしているため、奨学金授与数合計(444名)と一致しない。また、2007年度以降は予測値。

List of Faculty members pursuing higher degree under AUN/SEED-Net programs

Master's level

No.	Full Name	Gender	SI	Field	HI
1	Tristan Roland Punzalan	M	DLSU	EEE	CU
2	Marie Therese Quieta	F	DLSU	EEE	NUS
3	Medi Nazar Abelardo	F	DLSU	ICT	KMITL
4	Marlon Musngi	M	DLSU	ME/AE	NUS
5	Jazmin Chong	F	DLSU	ME/AE	NTU
6	Tran Tien Dac	M	HCMUT	CE	CU
7	Doan The Nam Long	M	HCMUT	ChE	DLSU
8	Phan Thi Cam Linh	F	HCMUT	ChE	DLSU
9	Nguyen Quang Long	M	HCMUT	ChE	DLSU
10	Pham Thi Thanh Thuy	F	HCMUT	EnvE	UP
11	Bui Thi Tai	F	HCMUT	GeoE	UGM
12	Tran Ngoc Thinh	M	HCMUT	ICT	KMITL
13	Le Thanh Sach	M	HCMUT	ICT	KMITL
14	Pham Trung Kien	M	HCMUT	MatE	USM
15	Nguyen Ngoc Dung	M	HCMUT	ME/AE	ITB
16	Tran Quang Tuyen	M	HCMUT	ME/AE	ITB
17	Nguyen Thi Thu Ha	F	HUT	ChE	CU
18	Xuan Thang Cao	M	HUT	ChE	CU
19	Chau Van Dinh	M	HUT	ChE	DLSU
20	Do Thi Tu Anh	F	HUT	EEE	CU
21	Vo Thi Le Ha	F	HUT	EnvE	UP
22	Hoang Tuan Dung	M	HUT	EnvE	UP
23	Nguyen Thi Du	F	HUT	EnvE	UP
24	Tran Duc Chung	M	HUT	EnvE	UP
25	Hung Dinh Quang	M	HUT	EnvE	UP
26	Tran Tuan Hung	M	HUT	ICT	KMITL
27	Nguyen Ngoc Minh	M	HUT	MatE	USM
28	Phan Anh Tuan	M	HUT	ME/AE	ITB
29	Nguyen Van Bo	M	HUT	ME/AE	ITB
30	Tran Duc Huy	M	HUT	Metal	CU
31	Willy Kurnia	M	ITB	ManuE	NTU
32	Usman Husni	M	ITB	MatE	USM
33	Okti Junjung Parsaoran Manalu	M	ITB	MatE	USM
34	Arief Yudhanto	M	ITB	ME/AE	NUS
35	Kimtho Po	M	ITC	EEE	CU
36	Leng Ky	M	ITC	EEE	CU
37	Lychek Keo	M	ITC	EEE	CU
38	Nguon Taing	M	ITC	ICT	KMITL
39	Un Amata	M	ITC	ME/AE	NUS
40	Thong Sopha	M	NUOL	CE	NTU
41	Phongsavanh Inthavongsa	M	NUOL	CE	CU
42	Pipong Phimphachanh	F	NUOL	CE	CU
43	Anousak Thammavong	M	NUOL	CE	CU
44	Anousone Outhailatsady	M	NUOL	CE	CU
45	Alitking Anongphouth	M	NUOL	CE	CU
46	Vansay Meksarik	M	NUOL	EEE	USM
47	Senglathsamay Chanthamenavong	M	NUOL	EEE	CU
48	Chanthaphone Khanty	M	NUOL	EEE	CU
49	Roger Phetdaleen	F	NUOL	EEE	NUS
50	Xaysomphone Kounlabouth	M	NUOL	EEE	CU
51	Somvang Tipphavongxay	M	NUOL	EEE	CU
52	Sihalath Souksakhone	F	NUOL	EnvE	UP
53	Keokhamphui Keoduangchai	M	NUOL	EnvE	UP
54	Langkone Xaignavong	M	NUOL	EnvE	UP
55	Keophousone Phonhalath	F	NUOL	GeoE	UGM
56	Vongsavanh Soysouvanh	M	NUOL	GeoE	UGM

57	Khamphong Khongsomboun	M	NUOL	ICT	KMITL
58	Khampheth Bounnady	M	NUOL	ICT	KMITL
59	Somphone Kanthavong	M	NUOL	ICT	KMITL
60	Tha Bounthan	M	NUOL	ICT	KMITL
61	Kham Khanthavivone	M	NUOL	ICT	KMITL
62	Nouanchanh Panyanouvong	F	NUOL	ICT	KMITL
63	Phoumy Indarack	M	NUOL	ICT	KMITL
64	Seumsak Douangsyla	M	NUOL	ICT	KMITL
65	Theng Vilayphone	M	NUOL	ICT	KMITL
66	Sisavath Khotpanya	M	NUOL	ICT	KMITL
67	Nanthady Sombath	M	NUOL	ICT	NUS
68	Soumek Inthala	M	NUOL	ICT	KMITL
69	Donekeo Lakanchanh	M	NUOL	ICT	KMITL
70	Thongsamlith Onemanisone	M	NUOL	ICT	KMITL
71	Souphanna Vongsack	F	NUOL	ICT	KMITL
72	Somsanouk Pathoumvanh	M	NUOL	ICT	KMITL
73	Thongvanh Vilayphonh	M	NUOL	ME/AE	NUS
74	Deuansavanh Phommavongsa	M	NUOL	ME/AE	ITB
75	Sri Widiastuti	F	UGM	CE	NTU
76	I Gde Budi Indrawan	M	UGM	CE	NTU
77	Arief Setiawan Budi Nugroho	M	UGM	CE	CU
78	Sumaryono	M	UGM	CE	CU
79	Berlian Kushari	M	UGM	CE	CU
80	Ali Awaludin	M	UGM	CE	CU
81	Setiaji Ryan Rahmat	M	UGM	CE	NUS
82	Muhammad Nur Rizal Masduq	M	UGM	EEE	CU
83	Faridah	F	UGM	EEE	NTU
84	Eka Firmansyah	M	UGM	EEE	NTU
85	Bimo Sunarfrihantono	M	UGM	EEE	NTU
86	Sigit Basuki Wibowo	M	UGM	EEE	CU
87	Iswandi	M	UGM	EEE	CU
88	Avrin Nur Widiastuti	F	UGM	EEE	CU
89	Prapto Nugroho	M	UGM	EEE	CU
90	Wawan Budianta	M	UGM	EnvE	UP
91	I Wayan Mustika	M	UGM	ICT	KMITL
92	Urip Agus Salim	M	UGM	ManuE	UM
93	Surojo	M	UGM	ManuE	UM
94	I Gusti Bagus Budi Dharma	M	UGM	ManuE	UM
95	Herianto	M	UGM	ManuE	UM
96	Nopriadi	M	UGM	ME/AE	NTU
97	Indriana Hidayah	F	UGM	ME/AE	NTU
98	Wahyu Wilopo	M	UGM	Mining	CU
99	Jay Arre Toque	M	UP	ManuE	UM
100	Mary Donnabelle L. Balela	F	UP	MatE	USM
101	Soe Soe Than	F	UY	ChE	DLSU
102	Lin Lin Tun	F	UY	ChE	DLSU
103	Nay Myo Tun	M	UY	EEE	CU
104	U Thiha Soe	M	UY	GeoE	UGM
105	Tin May Htun	F	UY	GeoE	UGM
106	Myo Min Tun	M	UY	GeoE	UGM
107	Hlaing Myat Su	F	UY	ICT	KMITL
108	Soe Thein	M	UY	Survey	CU
109	Tun Naing Win	M	YTU	ChE	DLSU
110	Mi Eai Htaw	F	YTU	ChE	DLSU
111	Htet Zarni Kyaw	F	YTU	EEE	CU
112	Hein Thura Aung	M	YTU	EEE	CU
113	Su Su Muang	F	YTU	ICT	KMITL
114	War War Min Swe	F	YTU	ME/AE	ITB
115	Thein Min Htike	M	YTU	ME/AE	ITB
116	Aung Myo Thant Sin	M	YTU	ME/AE	ITB

Doctoral level

No.	Full Name	Gender	SI	Field	HI / JSU
1	Tran Tuan Anh	M	HCMUT	CE	Hokkaido
2	Le Trong Nghia	M	HCMUT	CE	CU
3	Tran Van Mien	M	HCMUT	CE	CU
4	Nguyen Quang Long	M	HCMUT	ChE	TIT
5	Nguyen Hoai Thu	F	HCMUT	ChE	TIT
6	Tran Hai Ung	M	HCMUT	ChE	DLSU
7	Ky Phuong Ha Huynh	M	HCMUT	ChE	DLSU
8	Le Thi Hong Tran	F	HCMUT	EnvE	UP
9	Ho Trong Long	M	HCMUT	GeoE	Kyushu
10	Nguyen Kim Phuong	F	HCMUT	GeoE	Kyushu
11	Nguyen Dinh Tu	M	HCMUT	GeoE	UGM
12	Nguyen Minh Trung	M	HCMUT	GeoE	UGM
13	Tran Ngoc Thinh	M	HCMUT	ICT	KMITL
14	Nguyen Ngoc Dung	M	HCMUT	ME/AE	Kyoto
15	Chau Van Dinh	M	HUT	ChE	TIT
16	Nguyen Hoang Hai	M	HUT	EEE	Tokyo
17	Ha Duyen Trung	M	HUT	EEE	CU
18	Tran Duc Huy	M	HUT	MatE	USM
19	Tran Khanh Duong	M	HUT	ME/AE	TUT
20	Le Xuan Truong	M	HUT	ME/AE	ITB
21	Sony Sulaksono Wibowo	M	ITB	CE	CU
22	Dedi Apriadi	M	ITB	CE	CU
23	Budi Hartono	M	ITB	ManuE	NUS
24	Wibowo, Agung	M	ITB	ME/AE	TUT
25	Sandro Mihradi	M	ITB	ME/AE	TUT
26	Filian Arbiyani	F	ITB	ME/AE	NUS
27	Lim Sok Tay	M	ITC	CE	CU
28	Hak Sok Chea	M	ITC	ChE	DLSU
29	Kimtho Po	M	ITC	EEE	TIT
30	Leng Ky	M	ITC	EEE	TIT
31	Sutheera Puntheeranurak	F	KMITL	ICT	Tokai
32	Panarat Rawiwan	F	KMITL	ICT	TIT
33	Douangmixay Dounsuvan	M	NUOL	CE	CU
34	Sioudom Khamfeuane	M	NUOL	EnvE	UP
35	Somphone Inkhamseng	M	NUOL	EnvE	UP
36	Khamphong Khongsomboun	M	NUOL	ICT	Tokai
37	Khampheth Bounnady	M	NUOL	ICT	KMITL
38	Kham Khanthavivone	M	NUOL	ICT	KMITL
39	Ali Awaludin	M	UGM	CE	Hokkaido
40	Arief Setiawan Budi Nugroho	M	UGM	CE	Hokkaido
41	Ashar Saputra	M	UGM	CE	CU
42	Nazrul Effendy	M	UGM	EEE	CU
43	Sarjiya	M	UGM	EEE	CU
44	Mohammad Kholid Ridwan	M	UGM	EnvE	TIT
45	Wawan Budianta	M	UGM	EnvE	TIT
46	Lucas Donny Setijadji	M	UGM	GeoE	Kyushu
47	Adha Imam Cahyadi	M	UGM	ICT	Tokai
48	Risanuri Hidayat	M	UGM	ICT	KMITL
49	Muslim Mahardika	M	UGM	ManuE	Keio
50	Herianto	M	UGM	ManuE	TIT
51	Gesang Nugroho	M	UGM	ManuE	UM
52	Fauzun	M	UGM	ManuE	UM
53	Muhammad Kusumawan Herliansyah	M	UGM	ManuE	UM
54	Sugiyono	M	UGM	ManuE	UM
55	I Gusti Bagus Budi Dharma	M	UGM	ManuE	UM
56	Sukiman Kusmono	M	UGM	MatE	USM
57	R. Rachmat A. Sriwijaya	M	UGM	ME/AE	TIT

58	Mubin, Marizan	F	UM	EEE	Tokai
59	Tan Chin Joo	M	UM	ManuE	TUT
60	Rhandley D. Cajote	M	UP	EEE	CU
61	Lanticse, Leslie Joy G.	F	UP	MatE	TIT
62	Rinlee Butch M. Cervera	M	UP	MatE	Tokyo
63	Lau Tze Liang	M	USM	CE	CU
64	Yeoh Fei Yee	M	USM	MatE	TUT
65	Cho Cho Thet	F	UY	EEE	CU
66	Nan Thidar Chit Swe	F	UY	EEE	CU
67	Su Su Kyi	F	UY	GeoE	UGM
68	Myo Thant	M	UY	GeoE	UGM
69	Tun Naing	M	UY	GeoE	UGM
70	Aye Aye Thant	M	UY	MatE	USM

Master's Degree Students Year 2001-2

No.	Full Name	Sex	SI	HI	Field
1	Huy Tran Duc	M	HUT	CU	Mattur
2	Wahyu Wilopo	M	UGM	CU	Mining
3	Soe Thein	M	UY	CU	Survey
4	Xuan Thang Cao	M	HUT	CU	ChE
5	Nguyen Thi Thu Ha	F	HUT	CU	ChE
6	Tristan Roland Punzalan	M	DLSU	CU	EEE
7	Kimtho Po	M	ITC	CU	EEE
8	Muhammad Nur Rizal Masduq	M	UGM	CU	EEE
9	Medi Nazar Abelardo	F	DLSU	KMITL	ICT
10	Tha Bounthanh	M	NUOL	KMITL	ICT
11	Khamphong Khongsomboun	M	NUOL	KMITL	ICT
12	Khampheth Bounnady	M	NUOL	KMITL	ICT
13	Somphone Kanthavong	M	NUOL	KMITL	ICT
14	Kham Khanthavivone	M	NUOL	KMITL	ICT
15	Nounachanh Panyanouvong	F	NUOL	KMITL	ICT
16	Jazmin Chong	F	DLSU	NTU	ME/AE
17	Thong Sopha	M	NUOL	NTU	CE
18	Sri Widiastuti	F	UGM	NTU	CE
19	I Gde Budi Indrawan	M	UGM	NTU	CE
20	Angelo Sumayao	M	DLSU	NTU	EEE
21	Faridah	M	UGM	NTU	EEE
22	Bimo Sunarfrihantono	M	UGM	NTU	EEE
23	Eka Firmansyah	M	UGM	NTU	EEE
24	Nopriadi	M	UGM	NTU	ME/AE
25	Marie Therese Quieta	F	DLSU	NUS	EEE
26	Agnes D. Galang	F	DLSU	NUS	CE
27	Marlon Musngi	M	DLSU	NUS	ME/AE
28	Thong Vanh Vilayphonh	M	NUOL	NUS	ME/AE
29	Wawan Budianta	M	UGM	UP	EnvE
30	Vansay Meksarik	M	NUOL	USM	EEE

Master's Degree Students Year 2003

No.	Full Name	Sex	SI	HI	Field
1	Tran Tien Dac	M	HCMUT	CU	CE
2	Anousak Thammavong	M	NUOL	CU	CE
3	Pipong Phimphachanh	F	NUOL	CU	CE
4	Phongsavanh Inthavongsa	M	NUOL	CU	CE
5	Sumaryono	M	UGM	CU	CE
6	Berlian Kushari	M	UGM	CU	CE
7	Arief Setiawan Budi Nugroho	M	UGM	CU	CE
8	Ali Awaludin	M	UGM	CU	CE
9	Ha Duyen Trung	M	HUT	CU	EEE
10	Pham Dinh Tan	M	HUT	CU	EEE
11	Le Viet Tien	M	HUT	CU	EEE
12	Leng Ky	M	ITC	CU	EEE
13	Chanthaphone Khanty	M	NUOL	CU	EEE
14	Vimontha Khieovongphachanh	F	NUOL	CU	EEE
15	Senglathsamy Chanthamenavong	M	NUOL	CU	EEE
16	Addy Wahyudie	M	UGM	CU	EEE
17	Mas Iswandi	M	UGM	CU	EEE
18	Sigit Basuki Wibowo	M	UGM	CU	EEE
19	Htet Zarni Kyaw	F	YTU	CU	EEE
20	Doan The Nam Long	M	HCMUT	DLSU	ChE
21	Phan Thi Cam Linh	F	HCMUT	DLSU	ChE
22	Pham Phuong Thi Thuy	F	HCMUT	DLSU	ChE
23	Dinh Van Chau	M	HUT	DLSU	ChE

No.	Full Name	Sex	SI	HI	Field
24	Dang Son van	M	HUT	DLSU	ChE
25	Anton Purnomo	M	UGM	DLSU	ChE
26	Duong Tran Khanh	M	HUT	ITB	ME/AE
27	Phan Anh Tuan	M	HUT	ITB	ME/AE
28	War War Min Swe	F	YTU	ITB	ME/AE
29	Vo Thi Ngoc Chau	F	HCMUT	KMITL	ICT
30	Pham Huu Nghia	M	HCMUT	KMITL	ICT
31	Phoumy Indarack	M	NUOL	KMITL	ICT
32	Seumsak Douangsyla	M	NUOL	KMITL	ICT
33	Adha Imam Cahyadi	M	UGM	KMITL	ICT
34	Nuttawut Lewpiriyawong	M	KMITL	NTU	ME/AE
35	Indriana	F	UGM	NTU	ME/AE
36	Abdi Robbi Sembada	M	ITB	NUS	CE
37	Arief Yudhanto	M	ITB	NUS	ME/AE
38	Nguyen Thi Bich Ngoc	F	HCMUT	UGM	GeoE
39	Nguyen Kim Phuong	F	HCMUT	UGM	GeoE
40	Nimol Vamoeurn	M	ITC	UGM	GeoE
41	Long Veasna	M	ITC	UGM	GeoE
42	U Thiha Soe	M	UY	UGM	GeoE
43	Thanongsak Thepsonthi	M	BUU	UM	ManuE
44	Muslim Mahardika	M	UGM	UM	ManuE
45	Urip Agus Salim	M	UGM	UM	ManuE
46	Surojo	M	UGM	UM	ManuE
47	I Gusti Bagus Budi Dharma	M	UGM	UM	ManuE
48	Duong Ngoc Binh	M	HUT	USM	MatE
49	Usman Husni	M	ITB	USM	MatE
50	Okki Junjung Parsaoran Manalu	M	ITB	USM	MatE
51	Rinlee Butch Cervera	M	UP	USM	MatE

Master's Degree Students Year 2004

No.	Full Name	Sex	SI	HI	Field
1	Nguyen Bao Thach	M	HCMUT	CU	CE
2	Vuthy Horng	M	ITC	CU	CE
3	Phonepheth Mounnarath	M	NUOL	CU	CE
4	Anousone Outhailatsady	M	NUOL	CU	CE
5	Alitking Anongphouth	M	NUOL	CU	CE
6	Xoumaitri Panyanouvong	M	NUOL	CU	CE
7	Nofalia Andriyani	F	UGM	CU	CE
8	Suprpto Budinugroho	M	UGM	CU	CE
9	Masria Mustafa	F	USM	CU	CE
10	Do Thi Tu Anh	F	HUT	CU	EEE
11	Lychek Keo	M	ITC	CU	EEE
12	Chaymaly Phakasoum	F	NUOL	CU	EEE
13	Avrin Nur Widiastuti	F	UGM	CU	EEE
14	Pupus Adiwalyo	M	UGM	CU	EEE
15	Muhammad Arif Rahman Hakim	M	UGM	CU	EEE
16	Nguyen Ngoc Diem Phong	F	HCMUT	DLSU	ChE
17	Nguyen Quang Long	M	HCMUT	DLSU	ChE
18	Le Thi Hong Linh	F	HCMUT	DLSU	ChE
19	Nguyen Hoai Thu	F	HCMUT	DLSU	ChE
20	Nguyen Dinh Viet	M	HUT	DLSU	ChE
21	Mith Hasika	M	ITC	DLSU	ChE
22	Hul Seingheng	M	ITC	DLSU	ChE
23	Izza Aliyatul Muna	F	UGM	DLSU	ChE
24	Soe Soe Than	F	UY	DLSU	ChE
25	Nguyen Ngoc Dung	M	HCMUT	ITB	ME/AE
26	Tran Quang Tuyen	M	HCMUT	ITB	ME/AE
27	Nguyen Quang Nguyen	M	HUT	ITB	ME/AE

No.	Full Name	Sex	SI	HI	Field
28	Duong Van Yen	M	HUT	ITB	ME/AE
29	Chan Sarin	M	ITC	ITB	ME/AE
30	Rey Sopheak	M	ITC	ITB	ME/AE
31	Kinnaeth Vongchanh	F	NUOL	ITB	ME/AE
32	Deuansavanh Phommavongsa	M	NUOL	ITB	ME/AE
33	Thinh Tran Ngoc	M	HCMUT	KMITL	ICT
34	Vuong Tran Xuan	M	HCMUT	KMITL	ICT
35	Nguon Taing	M	ITC	KMITL	ICT
36	Sisavath Khotpanya	M	NUOL	KMITL	ICT
37	Theng Vilayphone	M	NUOL	KMITL	ICT
38	Soumek Inthala	M	NUOL	KMITL	ICT
39	Su Su Muang	F	YTU	KMITL	ICT
40	Lia Maisarah Umar	F	ITB	NTU	ManuE
41	Situmorang Elisabeth Rianawati	F	ITB	NUS	CE
42	Setiaji Ryan Rahmat	M	UGM	NUS	CE
43	Aripin Wiryi	M	UGM	NUS	CE
44	Nanthady Sombath	M	NUOL	NUS	ICT
45	Un Amata	M	ITC	NUS	ME/AE
46	Mohd Ashraf Mohamad Ismail	M	USM	UGM	EnvE
47	Bui Thi Tai	F	HCMUT	UGM	GeoE
48	Aimee Calibugan	F	UP	UGM	GeoE
49	Tin May Htun	F	UY	UGM	GeoE
50	Sompong Vongphosy	M	NUOL	UM	ManuE
51	Lamphanh Sisamouth	M	NUOL	UM	ManuE
52	Gunawan Setia Prihandana	M	UGM	UM	ManuE
53	Herianto	M	UGM	UM	ManuE
54	Hoang Tuan Dung	M	HUT	UP	EnvE
55	Vo Thi Le Ha	F	HUT	UP	EnvE
56	Bui Duc Long	M	HUT	USM	MatE
57	Nguyen Ngoc Minh	M	HUT	USM	MatE
58	Le Pham Ngoc Quynh	M	HUT	USM	MatE
59	Ardhyanawta Hosta	M	ITB	USM	MatE
60	Setiwan Asep Ridwan	M	ITB	USM	MatE

Master's Degree Students Year 2005

No.	Full Name	Sex	SI	HI	Field
1	Irene Olivia Ubay	F	DLSU	CU	CE
2	Rani Nurcharissa	F	ITB	CU	CE
3	Budi Hashiholan Siregar	M	ITB	CU	CE
4	Meng Hong Ung	M	ITC	CU	CE
5	Menghour Phan	M	ITC	CU	CE
6	Muriel Naguit	F	UP	CU	CE
7	Ha Hoang	M	HUT	CU	EEE
8	Nguyen Khac Hieu	M	HUT	CU	EEE
9	Nguyen Vinh Ich	M	HUT	CU	EEE
10	Xaysomphone Kounlabout	M	NUOL	CU	EEE
11	Prpto Nugroho	M	UGM	CU	EEE
12	RR Eny Sukani Rahayu	F	UGM	CU	EEE
13	Andrianus Yofy	M	UGM	CU	EEE
14	Nay Myo Tun	M	UY	CU	EEE
15	Reasmey	F	ITC	DLSU	CHE
16	Dyah Setia Novianti	F	UGM	DLSU	CHE
17	Reniek Fitriany	F	UGM	DLSU	CHE
18	Lin Lin Tun	F	UY	DLSU	CHE
19	Ye Min Htut	M	YTU	DLSU	CHE
20	Tun Naing Win	M	YTU	DLSU	CHE
21	Mi Eai Htaw	F	YTU	DLSU	CHE
22	Hung Anh	M	HCMUT	ITB	ME/AE

No.	Full Name	Sex	SI	HI	Field
23	Tran Nam	M	HCMUT	ITB	ME/AE
24	Van Bo	M	HUT	ITB	ME/AE
25	Kollika	M	ITC	ITB	ME/AE
26	Khamtanh	M	NUOL	ITB	ME/AE
27	Thein Min Htike	M	YTU	ITB	ME/AE
28	Thanh Sach	M	HCMUT	KMITL	ICT
29	Tuan Hung Tran	M	HUT	KMITL	ICT
30	Phok Chrin	M	ITC	KMITL	ICT
31	Chanthea Khun	M	ITC	KMITL	ICT
32	Donekeo Lakanchanh	M	NUOL	KMITL	ICT
33	Thongsamlith Onemanisone	M	NUOL	KMITL	ICT
34	Myat Su Hlaing	F	UY	KMITL	ICT
35	Willy Kurnia	M	ITB	NTU	ME
36	Samsu Sukaimi Hendra	M	UGM	NUS	CE
37	Deny Hartono	M	ITB	NUS	CHE
38	Imma Nuella	F	ITB	NUS	CHE
39	Danan Suryo Wicaksono	M	ITB	NUS	CHE
40	Phetdaleen Roger	F	NUOL	NUS	EEE
41	Tobias Bestari	M	UGM	NUS	ME
42	Thuong Huyen Dang	F	HCMUT	UGM	GeoE
43	Sopheap Leang	M	ITC	UGM	GeoE
44	Raksme May	M	ITC	UGM	GeoE
45	Keophousone Phonhalath	F	NUOL	UGM	GeoE
46	Angeline Abrenica	F	UP	UGM	GeoE
47	Myo Min Tun	M	UY	UGM	GeoE
48	Waratta Authayarat	F	BUU	UM	ManuE
49	Julirose Gonzales	F	DLSU	UM	ManuE
50	Le Minh Hoang	M	HCMUT	UM	ManuE
51	Agung Bramantya Muhammad	M	UGM	UM	ManuE
52	Indro Pranoto	M	UGM	UM	ManuE
53	Jay Arre Toque	M	UP	UM	ManuE
54	Thi Thanh Thuy Pham	F	HCMUT	UP	EnvE
55	Thi Du Nguyen	F	HUT	UP	EnvE
56	Duc Chung Tran	M	HUT	UP	EnvE
57	Sobonn Ros	M	ITC	UP	EnvE
58	Keoduangchai Keokhamphui	M	NUOL	UP	EnvE
59	Souksakhone Sihalath	F	NUOL	UP	EnvE
60	Trung Kien Pham	M	HCMUT	USM	MatE
61	Thi Thien Ly Tran	F	HUT	USM	MatE
62	Niki Prastomo	M	ITB	USM	MatE
63	Chandara Chea	M	ITC	USM	MatE
64	Vilay Vannaladsaysy	M	NUOL	USM	MatE

Master's Degree Students Year 2006

No.	Full Name	Sex	SI	HI	Field
1	Nicanor Jr. Rodriguez Roxas	M	DLSU	CU	CE
2	Seng Sochan	M	ITC	CU	CE
3	Somxai Phongsawat	M	NUOL	CU	CE
4	Frieska Evita Ayurananda	F	UGM	CU	CE
5	Cheryl Lyne E. Capiz	F	UP	CU	CE
6	Nguyen Van Quang	M	HUT	CU	EEE
7	Hel Sopheak	M	ITC	CU	EEE
8	Leng Sovannarith	M	ITC	CU	EEE
9	Somvang Tiphavongxay	M	NUOL	CU	EEE
10	Hein Thura Aung	M	YTU	CU	EEE
11	Chainarong Upasen	M	BUU	DLSU	ChE
12	Nguyen Thi Anh Nga	F	HCMUT	DLSU	ChE
13	Phan Cam Tuan Huy	M	HCMUT	DLSU	ChE

No.	Full Name	Sex	SI	HI	Field
14	Amsal Goesmano Sihombing	M	UGM	DLSU	ChE
15	Eka Prasetia Merdika	M	UGM	DLSU	ChE
16	Huynh Phuoc Thien	M	HCMUT	ITB	ME/AE
17	Huynh Thi Minh Thu	F	HCMUT	ITB	ME/AE
18	Nguyen Truong Tho	M	HUT	ITB	ME/AE
19	Tran Xuan Bo	M	HUT	ITB	ME/AE
20	Aung Myo Thant Sin	M	YTU	ITB	ME/AE
21	Nguyen Huy Thach	M	HUT	KMITL	ICT
22	Khem Sochenda	F	ITC	KMITL	ICT
23	Somsanouk Pathoumvahn	M	NUOL	KMITL	ICT
24	Souphanna Vongsack	F	NUOL	KMITL	ICT
25	I Wayan Mustika	M	UGM	KMITL	ICT
26	Suhartono Setiawan	M	ITB	NTU	ME/AE
27	Laura Sutarlie	F	ITB	NUS	ChE
28	Melissa A. Setiawan	F	ITB	NUS	ChE
29	Rita Farida Yunus	F	ITB	NUS	ChE
30	Agus Pulung Sasmito	M	UGM	NUS	ME/AE
31	Andreas Lo	M	UGM	NUS	ME/AE
32	Pich Bunchoeun	M	ITC	UGM	GeoE
33	Ros Soty	M	ITC	UGM	GeoE
34	Phetnakhone Xaixongdeth	F	NUOL	UGM	GeoE
35	Vongsavanh Soysouvanh	M	NUOL	UGM	GeoE
36	Mohd Shalahuddin bin Adnan	M	USM	UGM	GeoE
37	Ekkavat Kanjanasirathip	M	BUU	UM	ManuE
38	Purwo Kadarno	M	ITB	UM	ManuE
39	Kim Vireak	M	ITC	UM	ManuE
40	Soulideth Thongpradith	M	NUOL	UM	ManuE
41	Tutik Sriani	F	UGM	UM	ManuE
42	Cherdphonng Seedao	M	BUU	UP	EnvE
43	Hung Dinh Quang	M	HUT	UP	EnvE
44	Thuy Vu Ngoc	F	HUT	UP	EnvE
45	Kuok Fidero	M	ITC	UP	EnvE
46	Langkone Xaignavong	M	NUOL	UP	EnvE
47	Cao Xuan Viet	M	HCMUT	USM	MatE
48	Nguyen Minh Luan	M	HCMUT	USM	MatE
49	Firmandika Harda	M	ITB	USM	MatE
50	Bun Kim Ngun	M	ITC	USM	MatE
51	Mary Donnabelle L. Balela	F	UP	USM	MatE

List of Alumni

Master's Program

No.	Full Name	ogr	SI	HI	Field	Job at Application	Job after Graduation	Remarks
1	Mr. Thanongsak Thepsonthi	Master's	BUU	UM	ManuE	Graduate	Faculty Staff	
2	Ms. Medi Nazar Abelardo	Master's	DLSU	KMITL	ICT	Faculty Staff	Faculty Staff	
3	Ms. Jazmin Chong	Master's	DLSU	NTU	ME/AE	Faculty Staff	Faculty Staff	
4	Ms. Agnes D. Galang	Master's	DLSU	NUS	CE	Graduate	Faculty Staff	
5	Ms. Marie Therese Quieta	Master's	DLSU	NUS	EEE	Faculty Staff	Faculty Staff	
6	Mr. Tran Tien Dac	Master's	HCMUT	CU	CE	Faculty Staff	Faculty Staff	
7	Mr. Nguyen Bao Thach	Master's	HCMUT	CU	CE	Graduate	Graduate	
8	Mr. Doan The Nam Long	Master's	HCMUT	DLSU	ChE	Faculty Staff	Faculty Staff	
9	Mr. Nguyen Quang Long	Master's	HCMUT	DLSU	ChE	Faculty Staff	Faculty Staff	Now PhD JP scholar 2006
10	Ms. Nguyen Hoai Thu	Master's	HCMUT	DLSU	ChE	Graduate	Faculty Staff	Now PhD JP scholar 2006
11	Ms. Pham Phuong Thi Thuy	Master's	HCMUT	DLSU	ChE	Graduate	Research Institute Staff	
12	Ms. Le Thi Hong Linh	Master's	HCMUT	DLSU	ChE	Graduate	Graduate	
13	Ms. Nguyen Ngoc Diem Phuong	Master's	HCMUT	DLSU	ChE	Graduate	Graduate	Now PhD SW scholar 2006
14	Mr. Nguyen Ngoc Dung	Master's	HCMUT	ITB	ME/AE	Faculty Staff	Faculty Staff	Now PhD JP scholar 2006
15	Mr. Tran Quang Tuyen	Master's	HCMUT	ITB	ME/AE	Faculty Staff	Faculty Staff	
16	Mr. Tran Ngoc Thinh	Master's	HCMUT	KMITL	ICT	Faculty Staff	Faculty Staff	Now PhD SW scholar 2006
17	Mr. Pham Huu Nghia	Master's	HCMUT	KMITL	ICT	Graduate	Graduate	
18	Ms. Vo Thi Ngoc Chau	Master's	HCMUT	KMITL	ICT	Graduate	Graduate	Now PhD SW scholar 2005
19	Mr. Vuong Tran Xuan	Master's	HCMUT	KMITL	ICT	Private / Business	Graduate	Now PhD JP scholar 2006
20	Ms. Nguyen Thi Bich Ngoc	Master's	HCMUT	UGM	GeoE	Graduate	Faculty Staff	
21	Ms. Bui Thi Tai	Master's	HCMUT	UGM	GeoE	Faculty Staff	Faculty Staff	
22	Ms. Nguyen Kim Phuong	Master's	HCMUT	UGM	GeoE	Graduate	Graduate	Now PhD JP scholar 2005
23	Mr. Xuan Thang Cao	Master's	HUT	CU	ChE	University Employee	Research Institute Staff	
24	Ms. Nguyen Thi Thu Ha	Master's	HUT	CU	ChE	Faculty Staff	Private / Business	
25	Mr. Ha Duyen Trung	Master's	HUT	CU	EEE	Graduate	Faculty Staff	Now PhD SW scholar 2006
26	Mr. Le Viet Tien	Master's	HUT	CU	EEE	Graduate	Faculty Staff	Now PhD SW scholar 2006
27	Ms. Do Thi Tu Anh	Master's	HUT	CU	EEE	Faculty Staff	Faculty Staff	
28	Mr. Pham Dinh Tan	Master's	HUT	CU	EEE	Graduate	Graduate	
29	Mr. Tran Duc Huy	Master's	HUT	CU	Metal	Faculty Staff	Faculty Staff	Now PhD SW scholar 2006
30	Mr. Chau Van Dinh	Master's	HUT	DLSU	ChE	University Employee	Faculty Staff	Now PhD JP scholar 2005
31	Mr. Dang Son Van	Master's	HUT	DLSU	ChE	Research Institute Staff	Graduate	Now PhD SW scholar 2005
32	Mr. Nguyen Viet Dinh	Master's	HUT	DLSU	ChE	Research Institute Staff	Graduate	
33	Mr. Phan Anh Tuan	Master's	HUT	ITB	ME/AE	Faculty Staff	Faculty Staff	
34	Mr. Tran Khanh Duong	Master's	HUT	ITB	ME/AE	Graduate	Graduate	
35	Mr. Duong Van Yen	Master's	HUT	ITB	ME/AE	Graduate	Graduate	

No.	Full Name	ogr	SI	HI	Field	Job at Application	Job after Graduation	Remarks
36	Mr. Nguyen Quang Nguyen	Master's	HUT	ITB	ME/AE	Graduate	Graduate	PhD candidate at Polytechnic University, NY, USA
37	Ms. Vo Thi Le Ha	Master's	HUT	UP	EnvE	Faculty Staff	Faculty Staff	
38	Mr. Hoang Tuan Dung	Master's	HUT	UP	EnvE	Faculty Staff	Faculty Staff	Now PhD JP scholar 2005
39	Mr. Duong Ngoc Binh	Master's	HUT	USM	MatE	Graduate	Graduate	Now PhD SW scholar 2005
40	Mr. Bui Duc Long	Master's	HUT	USM	MatE	Graduate	Graduate	
41	Ms. Le Pham Ngoc Quynh	Master's	HUT	USM	MatE	Graduate	Graduate	
42	Mr. Arief Yudhanto	Master's	ITB	NUS	ME/AE	University Employee	Research Institute Staff	
43	Mr. Usman Husni	Master's	ITB	USM	MatE	University Employee	Faculty Staff	
44	Mr. Okti Junjung Parsaoran Manalu	Master's	ITB	USM	MatE	University Employee	University Employee	
45	Mr. Setiwan Asep Ridwan	Master's	ITB	USM	MatE	Graduate	Graduate	Now PhD JP scholar 2006
46	Mr. Ardhyanta Hosta	Master's	ITB	USM	MatE	Graduate	Graduate	Now PhD JP scholar 2006
47	Mr. Vuthy Horng	Master's	ITC	CU	CE	Graduate	Faculty Staff	
48	Mr. Kimtho Po	Master's	ITC	CU	EEE	Faculty Staff	Faculty Staff	Now PhD JP scholar 2005
49	Mr. Leng Ky	Master's	ITC	CU	EEE	Faculty Staff	Faculty Staff	Now PhD JP scholar 2006
50	Mr. Lychek Keo	Master's	ITC	CU	EEE	Faculty Staff	Faculty Staff	
51	Mr. Mith Hasika	Master's	ITC	DLSU	ChE	Graduate	Faculty Staff	
52	Mr. Hul Seingheng	Master's	ITC	DLSU	ChE	Graduate	Faculty Staff	
53	Mr. Rey Sopheak	Master's	ITC	ITB	ME/AE	Graduate	Faculty Staff	
54	Mr. Chan Sarin	Master's	ITC	ITB	ME/AE	Graduate	Graduate	Now PhD SW scholar 2006
55	Mr. Nguon Taing	Master's	ITC	KMITL	ICT	Faculty Staff	Faculty Staff	
56	Mr. Long Veasna	Master's	ITC	UGM	GeoE	Graduate	Faculty Staff	
57	Mr. Vamoeum Nimol	Master's	ITC	UGM	GeoE	Graduate	Faculty Staff	
58	Mr. Nuttawut Lewpiriyawong	Master's	KMITL	NTU	ME/AE	Graduate	Graduate	
59	Mr. Anousak Thammavong	Master's	NUOL	CU	CE	Faculty Staff	Faculty Staff	Ph.D candidate (ASIA Link supported by EU)
60	Ms. Pipong Phimpachanh	Master's	NUOL	CU	CE	Faculty Staff	Faculty Staff	
61	Mr. Phongsavanh Inthavongsa	Master's	NUOL	CU	CE	Faculty Staff	Faculty Staff	
62	Mr. Anousone Outhaiatsady	Master's	NUOL	CU	CE	Faculty Staff	Faculty Staff	
63	Mr. Alitking Anongphouth	Master's	NUOL	CU	CE	Faculty Staff	Faculty Staff	
64	Ms. Xoumaitri Panyanouvong	Master's	NUOL	CU	CE	Graduate	University Employee	
65	Mr. Senglathamy Chanthamenavong	Master's	NUOL	CU	EEE	Faculty Staff	Faculty Staff	
66	Ms. Vimontha Khieovongphachanh	Master's	NUOL	CU	EEE	Graduate	Faculty Staff	Now PhD JP scholar 2006
67	Ms. Chaymaly Phakasoum	Master's	NUOL	CU	EEE	Graduate	Faculty Staff	
68	Mr. Deuansavanh Phommavongsa	Master's	NUOL	ITB	ME/AE	Faculty Staff	Faculty Staff	
69	Ms. Kinnalesh Vongchanh	Master's	NUOL	ITB	ME/AE	Graduate	Graduate	Now PhD SW scholar 2006
70	Ms. Khamphong Khongsomboun	Master's	NUOL	KMITL	ICT	Faculty Staff	Faculty Staff	Now PhD JP scholar 2003
71	Mr. Khampheth Bounnady	Master's	NUOL	KMITL	ICT	Faculty Staff	Faculty Staff	Now PhD SW scholar 2003

No.	Full Name	ogr	SI	HI	Field	Job at Application	Job after Graduation	Remarks
72	Mr. Somphone Kanthavong	Master's	NUOL	KMITL	ICT	Faculty Staff	Faculty Staff	
73	Mr. Tha Bounthan	Master's	NUOL	KMITL	ICT	Faculty Staff	Faculty Staff	
74	Mr. Kham Khanthavivone	Master's	NUOL	KMITL	ICT	Faculty Staff	Faculty Staff	Now PhD SW scholar 2003
75	Ms. Nouanchanh Panyanouvong	Master's	NUOL	KMITL	ICT	Faculty Staff	Faculty Staff	
76	Mr. Phoumy Indarack	Master's	NUOL	KMITL	ICT	Faculty Staff	Faculty Staff	
77	Mr. Seumsak Douangsyla	Master's	NUOL	KMITL	ICT	Faculty Staff	Faculty Staff	
78	Mr. Soumek Inthala	Master's	NUOL	KMITL	ICT	Faculty Staff	Faculty Staff	
79	Mr. Sisavath Khotpanya	Master's	NUOL	KMITL	ICT	Faculty Staff	Faculty Staff	
80	Mr. Thong Sopha	Master's	NUOL	NTU	CE	Faculty Staff	Faculty Staff	
81	Mr. Nanthady Sombath	Master's	NUOL	NUS	ICT	Faculty Staff	Faculty Staff	
82	Mr. Thongvanh Vilayphonh	Master's	NUOL	NUS	ME/AE	Faculty Staff	Faculty Staff	
83	Mr. Lamphanh Sisamouth	Master's	NUOL	UM	ManuE	Graduate	Faculty Staff	
84	Mr. Sompong Vongphosy	Master's	NUOL	UM	ManuE	Graduate	Faculty Staff	
85	Mr. Vansay Meksarik	Master's	NUOL	USM	EEE	Faculty Staff	Faculty Staff	
86	Mr. Berlian Kushari	Master's	UGM	CU	CE	Faculty Staff	Faculty Staff	
87	Mr. Ali Awaludin	Master's	UGM	CU	CE	Faculty Staff	Faculty Staff	Now PhD JP scholar 2005
88	Mr. Arief Setiawan Budi Nugroho	Master's	UGM	CU	CE	Faculty Staff	Faculty Staff	Now PhD JP scholar 2006
89	Mr. Suprpto Budinugroho	Master's	UGM	CU	CE	Graduate	Research Institute Staff	
90	Mr. Sumaryono	Master's	UGM	CU	CE	Faculty Staff	Government Staff	
91	Ms. Nofalia Andriyani	Master's	UGM	CU	CE	Graduate	Graduate	
92	Mr. Muhammad Nur Rizal Masduq	Master's	UGM	CU	EEE	Faculty Staff	Faculty Staff	
93	Mr. Iswandi	Master's	UGM	CU	EEE	Faculty Staff	Faculty Staff	
94	Mr. Sigit Basuki Wibowo	Master's	UGM	CU	EEE	Faculty Staff	Faculty Staff	
95	Ms. Avrin Nur Widiastuti	Master's	UGM	CU	EEE	Faculty Staff	Faculty Staff	
96	Mr. Pupus Adiwalyo	Master's	UGM	CU	EEE	Graduate	Graduate	
97	Mr. Muhammad Arif Rahman Hakim	Master's	UGM	CU	EEE	Graduate	Graduate	
98	Mr. Wahyu Wilopo	Master's	UGM	CU	Mining	Faculty Staff	Faculty Staff	Monbusho scholar
99	Mr. Anton Purnomo	Master's	UGM	DLSU	ChE	Graduate	Graduate	Now PhD SW scholar 2005
100	Ms. Izza Aliyatul Muna	Master's	UGM	DLSU	ChE	Graduate	Graduate	
101	Mr. Addy Wahyudie	Master's	UGM	DLSU	EEE	Graduate	Faculty Staff	Monbusho scholar
102	Mr. Adha Imam Cahyadi	Master's	UGM	KMITL	ICT	Graduate	Faculty Staff	Now PhD JP scholar 2005
103	Ms. Sri Widiastuti	Master's	UGM	NTU	CE	Faculty Staff	Faculty Staff	
104	Mr. I Gde Budi Indrawan	Master's	UGM	NTU	CE	Faculty Staff	Faculty Staff	
105	Mr. Bimo Sunarfrihantono	Master's	UGM	NTU	EEE	Faculty Staff	Faculty Staff	
106	Ms. Faridah	Master's	UGM	NTU	EEE	Faculty Staff	Faculty Staff	
107	Mr. Eka Firmansyah	Master's	UGM	NTU	EEE	Faculty Staff	Faculty Staff	Monbusho scholar

No.	Full Name	ogr	SI	HI	Field	Job at Application	Job after Graduation	Remarks
108	Mr. Nopriadi	Ma ste r's	UGM	NTU	ME/AE	Faculty Staff	Faculty Staff	
109	Mr. Aripin Wiryi	Ma ste r's	UGM	NUS	CE	Graduate	Private / Business	
110	Mr. Urip Agus Salim	Ma ste r's	UGM	UM	ManuE	Faculty Staff	Faculty Staff	
111	Mr. I Gusti Bagus Budi Dharma	Ma ste r's	UGM	UM	ManuE	University Employee	Faculty Staff	Now PhD SW scholar 2006
112	Mr. Muslim Mahardika	Ma ste r's	UGM	UM	ManuE	Graduate	Faculty Staff	Now PhD JP scholar 2005
113	Mr. Herianto	Ma ste r's	UGM	UM	ManuE	Faculty Staff	Faculty Staff	Now PhD JP scholar 2006
114	Mr. Gunawan Setia Prihandana	Ma ste r's	UGM	UM	ManuE	Graduate	Faculty Staff	
115	Mr. Wawan Budianta	Ma ste r's	UGM	UP	EnvE	Faculty Staff	Faculty Staff	Now PhD JP scholar 2005
116	Ms. Aimee Alo Calibugan	Ma ste r's	UP	UGM	GeoE	Research Institute Staff	Graduate	
117	Mr. Rinlee Butch M. Cervera	Ma ste r's	UP	USM	MatE	Graduate	Graduate	Now PhD JP scholar 2005
118	Ms. Masria Mustafa	Ma ste r's	USM	CU	CE	Graduate	Graduate	
119	Mr. Mohd Ashraf Mohamad Ismail	Ma ste r's	USM	UGM	GeoE	Graduate	Graduate	Now PhD JP scholar 2006
120	Mr. Soe Thein	Ma ste r's	UY	CU	Survey	Faculty Staff	Faculty Staff	
121	Ms. Soe Soe Than	Ma ste r's	UY	DLSU	ChE	Faculty Staff	Faculty Staff	
122	Mr. U Thiha Soe	Ma ste r's	UY	UGM	GeoE	Faculty Staff	Faculty Staff	
123	Ms. Tin May Htun	Ma ste r's	UY	UGM	GeoE	Faculty Staff	Faculty Staff	
124	Ms. Htet Zarni Kyaw	Ma ste r's	YTU	CU	EEE	Faculty Staff	Faculty Staff	PhD candidate in Germany (scholarship)
125	Ms. War War Min Swe	Ma ste r's	YTU	ITB	ME/AE	Faculty Staff	Faculty Staff	
126	Ms. Su Su Muang	Ma ste r's	YTU	KMITL	ICT	Faculty Staff	Faculty Staff	PhD candidate at Mandalay Technological University, Myanmar

PhD Program in Japan

No.	Full Name	ogr	SI	HI	Field	Job at Application	Job after Graduation	Remarks
1	Mr. Wibowo, Agung	Ph D Ja pa n	ITB	TUT	ME/AE	Faculty Staff	Faculty Staff	
2	Mr. Sandro Mihradi	Ph D Ja pa n	ITB	TUT	ME/AE	Faculty Staff	Faculty Staff	
3	Mr. Lucas Donny Setijadji	Ph D Ja pa n	UGM	Kyushu	GeoE	Faculty Staff	Faculty Staff	
4	Ms. Mubin, Marizan	Ph D Ja pa n	UM	Tokai	EEE	Faculty Staff	Faculty Staff	
5	Ms. Lantice, Leslie Joy G.	Ph D Ja pa n	UP	TIT	MatE	Faculty Staff	Faculty Staff	

Proportion of SEED-Net Student in Ph.D Program (Sandwich Ph.D and Ph.D Japan)

JFY	Total PhD SW scholarship given	S/N Master's Graduates got PhD SW	%	Total PhD JP scholarship given	S/N Master's Graduates got PhD JP	%
2003	6	2	33.33	4	1	25.00
2004	13	-	0.00	9	-	0.00
2005	13	4	30.77	9	9	100.00
2006	18	10	55.56	13	11	84.62
Total	50	16	32.00	35	21	60.00

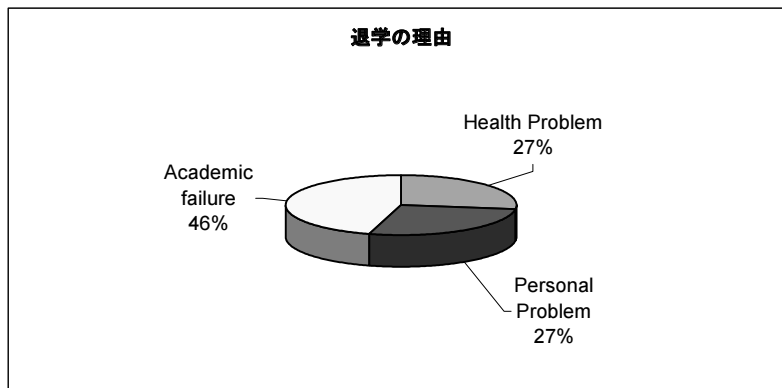
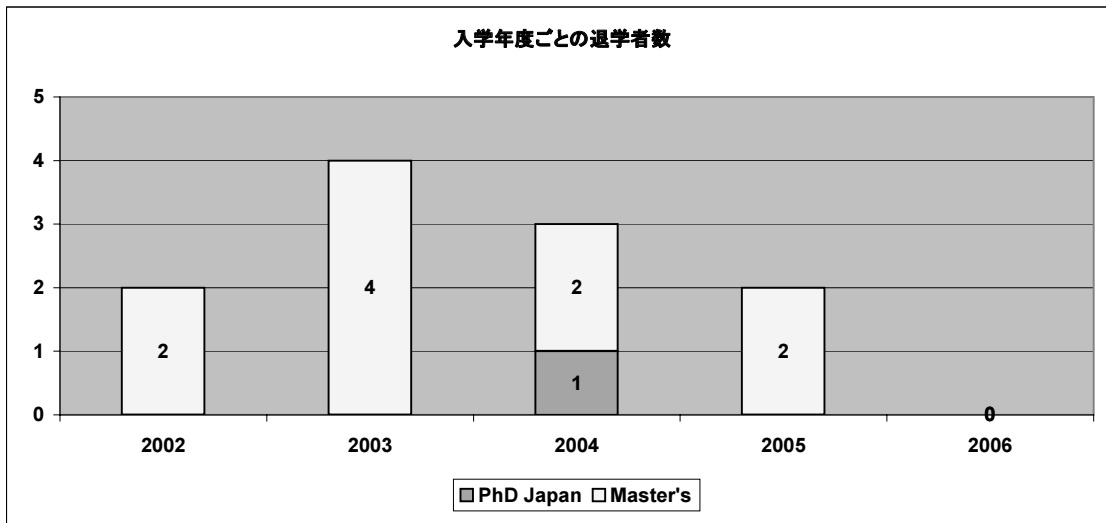
Remark *PhD SW = Doctoral Degree Sandwich Program*
PhD JP = Doctoral Degree Program in Japan

For JFY2004

- *PhD SW : only one Master's graduate applied and failed.*
- *PhD JP : no Master's graduate applied.*

The key reason might be because those Master's students in the first two years of operation are lecturers and they were required to resume duty promptly after completed their study.

留学プログラムにおける退学者数(入学年度毎とその理由)



7. 共同研究に基づく論文発表実績

No. of publications by students (as of 7 Mar 07)

Type of publication	Master's	PhD Sandwich	PhD in Japan	Total
Journal	18	1	10	29
Proceeding	178	57	48	283
Grand total				312

Number of insitutions involved in students' publications: Master's and PhD Sandwich Programs (as of 7 Mar 07)

Host	Sending	Name of Student	Institutions involved in publications																Grand Total											
			BUU	CU	DLSU	HCMUT	HUT	ITB	ITC	KMITL	NTU	NUOL	NUS	UGM	UM	UP	USM	UY		YTU	Hokkaido	Keio	Kyoto	Kyushu	TIT	Tokai	TUT	Shizuoka	Others	
CU	HCMUT	Le Trong Nghia	1			1														1									3	
		Nguyen Bao Thach				1															1									1
		Tran Van Mien				1															1									3
	HCMUT Total		2			3															2									7
		HUT		1			1																							2
	HCMUT	Cao Xuan Thang					1																							1
		Ha Duyen Trung		5			5																							10
		Le Viet Tien		1			1																							2
	HCMUT	Nguyen Thi Thu Ha		1			1																					1		3
		Tan Pham Dinh		2			2																							4
Tran Duc huy			3			3																					2		8	
HCMUT Total		13			13																								29	
	ITB		1			1							1																3	
ITB Total	Sony Sulaksono Wibowo		1			1							1																3	
			1			1							1																3	
ITC	Kimtho Po		2			2																							4	
	KY Leng		2			2																							4	
ITC Total			4			4																							8	
	NUOL		2			2							2																4	
NUOL	Anusak Thammavong		1			1																							2	
	Phonepheth Mounnarath		1			1							1																2	
	Senglathsamay Chanthamenavong		3			3							3																6	
NUOL Total		6			6								6																12	
	UGM		1			1							1																2	
UGM	Ali Awaludin		1			1							1																3	
	Ashar Sputra		1			1							2																3	
	Nazrul Effendy		3			3							3										1					7		
UGM	Prapro Nugroho		1			1							1																3	
	Sigit Basuki Wibowo		1			1							1																2	
UGM Total		7			7								8																17	
	UP		1			1																							2	
UP Total	Muriel Enriquez Naguit		1			1																							2	
			1			1																							2	
USM	Chan Kok Hooi		4			4																							9	
			4			4																							9	
USM Total		4			4																								9	
	UY		4			4																							8	
UY	Cho Cho Thet		2			2																							4	
	Nay Myo Tun		2			2																							4	
UY Total		6			6																								12	
		29			29								9																63	
CU Total																													3	
DLSU	HCMUT	Doan, Long The Nam				1																							1	
		Pham, Thuy Phuong T.				1																								1
		Tran Hai Ung				2																								2
HCMUT Total					3																								6	
					4																								10	

PhD Sandwich Students Year 2003

No.	Full Name	Sex	SI	HI	Field
1	Nazrul Effendi	M	UGM	CU	EEE
2	Cho Cho Thet	F	UY	CU	EEE
3	Kham Khanthavivone	M	NUOL	KMITL	ICT
4	Khampeth Bounnady	M	NUOL	KMITL	ICT
5	Su Su Kyi	F	UY	UGM	GeoE

PhD Sandwich Students Year 2004

No.	Full Name	Sex	SI	HI	Field
1	Le Trong Nghia	M	HCMUT	CU	CE
2	Sony Sulaksono Wibowo	M	ITB	CU	CE
3	Ashar Saputra	M	UGM	CU	CE
4	Sarjiya	M	UGM	CU	EEE
5	Nan Thidar Chit Swe	F	UY	CU	EEE
6	Tran Ung Hai	F	HCMUT	DLSU	ChE
7	Ky Phuong Ha Huynh	M	HCMUT	DLSU	ChE
8	Hak Sok Chea	F	ITC	DLSU	ChE
9	Le Xuan Truong	M	HUT	ITB	ME/AE
10	Nguyen Dinh Tu	M	HCMUT	UGM	GeoE
11	Gesang Nugroho	M	UGM	UM	ManuE
12	Le Thi Hong Tran	F	HCMUT	UP	EnvE
13	Sukiman Kusmono	M	UGM	USM	MatE

PhD Sandwich Students Year 2005

No.	Full Name	Sex	SI	HI	Field
1	Tran Van Mien	M	HCMUT	CU	CE
2	Douangmixay Dounsuvan	M	NUOL	CU	CE
3	Chan Kok Hooi	M	USM	CU	CE
4	Dang Son Van	M	HUT	DLSU	ChE
5	Anton Purnomo	M	UGM	DLSU	ChE
6	Vo Thi Ngoc Chau	F	HCMUT	KMITL	ICT
7	Risanuri Hidayat	M	UGM	KMITL	ICT
8	Nguyen Minh Trung	M	HCMUT	UGM	GeoE
9	Myo Thant	M	UY	UGM	GeoE
10	Fauzun	M	UGM	UM	ManuE
11	Muhammad Kusumawan Herliansyah	M	UGM	UM	ManuE
12	Sioudom Khamfeuane	M	NUOL	UP	EnvE
13	Duong Ngoc Binh	M	HUT	USM	MatE

PhD Sandwich Students Year 2006

No.	Full Name	Sex	SI	HI	Field
1	Dedi Apriadi	M	ITB	CU	CE
2	Lau Tze Liang	M	USM	CU	CE
3	Le Viet Tien	M	HUT	CU	EEE
4	Ha Duyen Trung	M	HUT	CU	EEE
5	Rhandley D. Cajote	M	UP	CU	EEE
6	Nguyen Ngoc Diem Phuong	F	HCMUT	DLSU	ChE
7	Nguyen Viet Dinh	M	HUT	DLSU	ChE
8	Chan Sarin	M	ITC	ITB	ME/AE
9	Kinnaeth Vongchanh	F	NUOL	ITB	ME/AE
10	Tran Ngoc Thinh	M	HCMUT	KMITL	ICT
11	Tun Naing	M	UY	UGM	GeoE
12	Sugiyono	M	UGM	UM	ManuE
13	Gunawan Setia Prihandana	M	UGM	UM	ManuE
14	I Gusti Bagus Budi Dharma	M	UGM	UM	ManuE
15	Somphone Inkhamseng	M	NUOL	UP	EnvE
16	Du Ngoc Uy Lan	M	HCMUT	USM	MatE
17	Tran Duc Huy	M	HUT	USM	MatE
18	Aye Aye Thant	M	UY	USM	MatE

PhD in Japan Students Year 2002

No.	Full Name	Sex	SI	JSU	Field
1	Lanticse, Leslie Joy G.	F	UP	TIT	MatE
2	Mubin, Marizan	F	UM	Tokai	EEE
3	Wibowo, Agung	M	ITB	TUT	ME/AE

PhD in Japan Students Year 2003

No.	Full Name	Sex	SI	JSU	Field
1	Lucas Donny Setijadji	M	UGM	Kyushu	GeoE
2	Sutheera Puntheeranurak	F	KMITL	Tokai	ICT
3	Khamphong Khongsomboon	M	NUOL	Tokai	ICT
4	Sandro Mirradi	M	ITB	TUT	ME/AE

PhD in Japan Students Year 2004

No.	Full Name	Sex	SI	JSU	Field
1	Tran Tuan Anh	M	HCMUT	Hokkaido	CE
2	Ho Trong Long	M	HCMUT	Kyushu	GeoE
3	Mohammad Kholid Ridwan	M	UGM	TIT	EnvE
4	Panarat Rawiwan	F	KMITL	TIT	ICT
5	R. Rachmat A. Sriwijaya	M	UGM	TIT	ME/AE
6	Surachai Chaitusaney	M	CU	Tokyo	EEE
7	Nguyen Hoang Hai	M	HUT	Tokyo	EEE
8	Chin Joo Tan	M	UM	TUT	ManuE
9	Yeoh Fei Ye	M	USM	TUT	MatE

PhD in Japan Students Year 2005

No.	Full Name	Sex	SI	JSU	Field
1	Ali Awaludin	M	UGM	Hokkaido	CE
2	Muslim Mahardika	M	UGM	Keio	ManuE
3	Nguyen Kim Phoung	F	HCMUT	Kyushu	GeoE
4	Chau Dinh Van	M	HUT	TIT	ChE
5	Kimtho Po	M	ITC	TIT	EEE
6	Wawan Budianta	M	UGM	TIT	EnvE
7	Adha Iman Cahyadi	M	UGM	Tokai	ICT
8	Rinlee Butch Cervera	M	UP	Tokyo	MatE
9	Tran Khanh Duong	M	HUT	TUT	ME/AE

PhD in Japan Students Year 2006

No.	Full Name	Sex	SI	JSU	Field
1	Arief Setiawan Budi Nugroho	M	UGM	Hokkaido	CE
2	Nguyen Hoai Thu	F	HCMUT	TIT	ChE
3	Nguyen Quang Long	M	HCMUT	TIT	ChE
4	Leng Ky	M	ITC	TIT	EEE
5	Vimontha Khieovongphachanh	F	NUOL	Tokai	EEE
6	Mohd Ashraf Mohamad Ismail	M	USM	Kyoto	GeoE
7	Vuong Tran Xuan	M	HCMUT	Tokai	ICT
8	Herianto	M	UGM	TIT	ManuE
9	Setiawan Asep Ridwan	M	ITB	TIT	MatE
10	Ardhyananta Hosta	M	ITB	TUT	MatE
11	Kesiny Phomkeona	F	NUOL	TUT	MatE
12	Nguyen Ngoc Dung	M	HCMUT	Kyoto	ME/AE
13	Menandro Serrano Berana	M	UP	TUT	ME/AE

PhD in Singapore Students Year 2006

No.	Full Name	Sex	SI	HI	Field
1	Janet Jill Yu Uy	F	DLSU	NUS	Industrial & System Engineering
2	Budi Hartono	M	ITB	NUS	Industrial & System Engineering
3	Filian Arbiyani	F	ITB	NUS	Mechanical Engineering

8. 本邦短期訪問実績

Short-term Visit to Japan Objectives

- (1) To enhance joint thesis research supervision of AUN/SEED-Net students between Host Institution and Japanese Supporting Universities and to supplement Collaborative Research Program.
- (2) To ensure high quality of master's and doctoral theses (which will lead to reputable international refereed journal publication) and to ensure the completion of the graduate degree within reasonable duration (two years for master's degree and three years for doctoral degree).
- (3) To enhance the research collaboration between Member Institutions and Japanese Supporting Universities

Short-term Visit to Japan (JFY 2003 - 2006)

No	JFY	No	Name	MI	Field	JSU	JP Prof.	Period	Duration	Research Topic
1	2003	1	Assoc. Prof. Dr. Boonchai Sittimannaithum	CU	CE	Hokkaido	Prof. Dr. UEDA Tamon	9 Feb 04 - 14 Feb 04	6 days	(To formulate the Collaborative Research)
2	2003	2	Assoc. Prof. Dr. Phoosak Pheinsusom	CU	CE	Hokkaido	Prof. Dr. UEDA Tamon	9 Feb 04 - 14 Feb 04	6 days	(To formulate the Collaborative Research)
3	2003	3	Assoc. Prof. Dr. Anat Ruangrassamee	CU	CE	Hokkaido	Prof. Dr. UEDA Tamon	9 Feb 04 - 14 Feb 04	6 days	(To formulate the Collaborative Research)
4	2003	4	Assoc. Prof. Dr. Veerasak Likhitrungsilp	CU	CE	Hokkaido	Assoc. Prof. Dr. TAKANO Shin-ei	8 Feb 04 - 15 Feb 04	8 days	(To formulate the Collaborative Research)
5	2003	5	Assoc. Prof. Dr. Sorawit Narupiti	CU	CE	Hokkaido	Assoc. Prof. Dr. KAGAYA Seichi	8 Feb 04 - 15 Feb 04	8 days	(To formulate the Collaborative Research)
6	2003	6	Dr. Tirawat Boonyatee	CU	CE	Hokkaido	Assoc. Prof. Dr. SHIBUYA Satoru	8 Feb 04 - 15 Feb 04	8 days	(To formulate the Collaborative Research)
7	2003	7	Dr. Saksith Chalermpong	CU	CE	Hokkaido	Prof. Dr. KAGAYA Seichi	8 Feb 04 - 15 Feb 04	8 days	(To formulate the Collaborative Research)
8	2003	8	Assoc. Prof. Dr. Luis F. Razon	DLSU	ChE	TITech	Prof. Dr. NIYAMA Hiroo	within Sep 2003	7 days	Catalytic Processes for the Production of Syngas using Natural Gas
9	2003	9	Prof. Dr. Susan M. Gallardo	DLSU	ChE	TITech	Assoc. Prof. Dr. AIDA Takashi	within Mar 2004	7 days	Catalytic Processes for the Production of Syngas using Natural Gas
10	2003	10	Assoc. Prof. Dr. Leonila C. Abella	DLSU	ChE	TITech	Prof. Dr. HINODE Hirofumi	within Mar 2004	7 days	Catalytic Processes for the Production of Syngas using Natural Gas
11	2003	11	Prof. Dr. Carlito M. Salazar	DLSU	ChE	TITech	Prof. Dr. NIYAMA Hiroo	within Oct 2004	7 days	Catalytic Processes for the Production of Syngas using Natural Gas
12	2003	12	Dr. Dwikorita Karnawati	UGM	GeoE	Kyushu	Prof. Dr. WATANABE Koichiro	within May 2003	7 days	Development of sustainable slope protection in tropical residual soils
13	2003	13	Dr. Heru Hendrayana	UGM	GeoE	Kyushu	Prof. Dr. WATANABE Koichiro	within May 2003	7 days	(To formulate the Collaborative Research)
14	2003	14	Ms. Pri Utami	UGM	GeoE	Kyushu	Prof. Dr. WATANABE Koichiro	Nov 03 - Dec 03	60 days	Central Java to Support the Program of Alternative Energy Development
15	2003	15	Dr. Dwikorita Karnawati	UGM	GeoE	Kyoto	Prof. Dr. AOKI Kenji	within Feb 2004	7 days	Development of sustainable slope protection in tropical residual soils
16	2003	16	Dr. Heru Hendrayana	UGM	GeoE	Kyoto	Prof. Dr. AOKI Kenji	within Feb 2004	7 days	Development of sustainable slope protection in tropical residual soils
17	2003	17	Dr. Subagyo	UGM	GeoE	Kyoto	Prof. Dr. AOKI Kenji	within Feb 2004	7 days	(To formulate the Collaborative Research)
18	2003	18	Ms. Ema Amallia	ITB (INA)	ME/AE	Keio	Assoc. Prof. Dr. OBI Shinnosuke	within Aug 2003	7 days	(To formulate the Collaborative Research)
19	2003	19	Assoc. Prof. Dr. Ichsan Setya Putra	ITB (INA)	ME/AE	TUT	Prof. Dr. HOMMA Hiroomi	within Mar 2004	7 days	High Velocity Impact on Multilayered Composites
20	2004	1	Assoc. Prof. Dr. Boontee Krutrachue	KMITL	ICT	Tokai	Prof. Dr. MATSUURA Takenobu	20 Feb 05 - 26 Feb 05	7 days	On-line Lao Handwritten Feature with Automatic Noise & Real Feature Identification
21	2004	2	Asst. Prof. Dr. Songphol Kanjanachuchai	CU	EEE	TITech	Prof. Dr. ODA Shunri	23 May 04 - 29 May 04	7 days	Current Conduction in InAs quantum dot arrays embedded in GaAs matrix
22	2004	3	Asst. Prof. Dr. David Banjerpongchai	CU	EEE	U of Tokyo	Prof. Dr. HARA Shinji	21 Oct 04 - 31 Oct 04	22 days	Development of Infrastructures of Control Systems Technology
23	2004	4	Prof. Dr. Carlito M. Salazar	DLSU	ChE	TITech	Prof. Dr. NIYAMA Hiroo	4 Jul 04 - 10 Jul 04	7 days	Partial Oxidation of Methane Using NiO/MgO Catalysts Supported on Alumina
24	2004	5	Assoc. Prof. Dr. Luis F. Razon	DLSU	ChE	TITech	Assoc. Prof. Dr. AIDA Takashi	4 Jul 04 - 10 Jul 04	7 days	Catalytic Processes for the Production of Syngas from Natural Gas
25	2004	6	Ms. Piyachat Yimsiri	BUU	ChE	TITech	Assoc. Prof. Dr. KUBOUCHI Masatoshi	31 Jul 04 - 8 Aug 04	9 days	Microwave Pyrolysis of Medical Plastic Wastes
26	2004	7	Prof. Dr. Susan A. Roces	DLSU	ChE	TITech	Assoc. Prof. Dr. KUBOUCHI Masatoshi	31 Jul 04 - 8 Aug 04	9 days	Microwave Pyrolysis of Medical Plastic Wastes
27	2004	8	Prof. Dr. Susan M. Gallardo	DLSU	ChE	TITech	Prof. Dr. NIYAMA Hiroo	17 Mar 05 - 26 Mar 05	10 days	Catalytic Processes for Syngas Production
28	2004	9	Assoc. Prof. Dr. Leonila C. Abella	DLSU	ChE	TITech	Prof. Dr. HINODE Hirofumi	17 Mar 05 - 26 Mar 05	10 days	Catalytic Processes for the Production of Syngas from Natural Gas
29	2004	10	Assoc. Prof. Dr. Noel Cabigon	DLSU	ChE	TITech	Prof. Dr. KAWASAKI Junjiro	10 Jun 04 - 19 Jun 04	10 days	Recovery of Solvent from the Semiconductor Washings via Selective Separation by Molecular Affinity Modification
30	2004	11	Prof. Dr. Zahari Taha	UM	ManuE	Keio	Prof. Dr. MITSUI Kimiyuki	21 May 04 - 26 May 04	6 days	Intelligent Online Monitoring System of Cutting Tool Wear and Failure
31	2004	12	Dr. Mohd Hamdi Abdul Shukur	UM	ManuE	Tokai				Development and Fabrication of miniature Heat Exchangers through Precision Machining / Joining / Slurry Polishing & their Performance Evaluation through Experimental & Analytical Techniques
32	2004	13	Dr. Mohd Hamdi Abdul Shukur	UM	ManuE	Keio	Prof. Dr. MITSUI Kimiyuki	27 Mar 05 - 31 Mar 05	5 days	Investigations in to minimal cutting fluid application in high speed milling of hardened steel using carbide mills
33	2004	14	Assoc. Prof. Dr. Boonchai Sittimannaithum	CU	CE	Hokkaido	Prof. Dr. UEDA Tamon	1 Feb 05 - 5 Feb 05	5 days	(To formulate the Collaborative Research)
34	2004	15	Assoc. Prof. Dr. Tanit Tongthong	CU	CE	Hokkaido	Prof. Dr. UEDA Tamon	30 Jan 05 - 4 Feb 05	6 days	A Study of Productivity Improvement in Pilly worse in Southeast Asian Countries
35	2004	16	Assoc. Prof. Dr. Wanchai Teparaksa	CU	CE	Hokkaido	Assoc. Prof. Dr. SHIBUYA Satoru	11 Feb 05 - 18 Feb 05	8 days	Ground response due to deep excavation in Bangkok subsoils
36	2004	17	Dr. Kasem Choosakul	CU	CE	Hokkaido	Prof. Dr. KAGAYA Seichi	30 Jan 05 - 5 Feb 05	7 days	A Comparative Study of Bus Transit Service in Bangkok and Manila
37	2004	18	Mr. Suched Likitlersuang	CU	CE	Hokkaido	Prof. Dr. MITACHI Toshiyuki	30 Jan 05 - 5 Feb 05	7 days	A Comparative Study of Bus Transit Service in Bangkok and Manila
38	2004	19	Mr. Ismail Ahmad Badri	USM	MatE	Tokai	Prof. Dr. ARIGA Tadashi	25 Jul 04 - 30 Jul 04	6 days	Influence intermetallic phase development on the property of lead free solder
39	2004	20	Assoc. Prof. Dr. Ahmad Fauzi Mohd Noor	USM	MatE	TUT	Assoc. Prof. Dr. TODA Hiroyuki	13 Dec 04 - 18 Dec 04	6 days	Mechanical and Microstructure response on Thermal Behavior of TiAl Alloy System with Respect to Materials Failure
40	2004	21	Prof. Dr. Zainal Arifin Mohd Ishak	USM	MatE	TUT	Prof. Dr. TAKEICHI Tsutomu	31 Jan 05 - 10 Feb 05	11 days	Microstructural Characterizations and Mechanical Properties of Polyimide 6/Polypropylene/Organoclay Nanocomposites
41	2004	22	Prof. Dr. Sharif Nurulakmal Mohd	USM	MatE	TITech	Prof. Dr. MARUYAMA Toshio	21 Feb 05 - 25 Feb 05	5 days	Determination of Transport Properties in the Protective Oxide-Scale Formation of the TiAl-X Multiphase Alloy Systems
42	2004	23	Assoc. Prof. Dr. Ichsan Setya Putra	ITB (INA)	ME/AE	TUT	Prof. Dr. HOMMA Hiroomi	16 Nov 04 - 25 Nov 04	10 days	High Speed Ballistic Impact of Multi-layered Composites
43	2004	24	Assoc. Prof. Dr. Bambang Kismono Hadi	ITB (INA)	ME/AE	TUT	Prof. Dr. HOMMA Hiroomi	20 Mar 05 - 25 Mar 05	6 days	High Speed Ballistic Impact of Multi-layered Composites
44	2004	25	Dr. Lavi R. Zuhail	ITB (INA)	ME/AE	Keio	Assoc. Prof. Dr. OBI Shinnosuke	20 Mar 05 - 26 Mar 05	7 days	Experimental Investigation; of Three-dimensional Flow Separation using PIV
45	2004	26	Dr. Iman Katoliksono Reksowardojo	ITB (INA)	ME/AE	Hokkaido	Prof. Dr. OGAWA Hideyuki	10 Jan 05 - 19 Jan 05	10 days	Biodiesel Fuel
46	2004	27	Dr. I Made Astina	ITB (INA)	ME/AE	Keio	Prof. Dr. SATO Haruki	29 Jan 05 - 9 Feb 05	11 days	Development and Implementation of Thermodynamic Property Models for Simulating Refrigeration and Integrated Thermal Systems in Buildings
47	2004	28	Dr. Dwikorita Karnawati	UGM	GeoE	Kyoto	Prof. Dr. AOKI Kenji	27 Feb 05 - 8 Mar 05	10 days	Development of sustainable slope protection in tropical Residual Soils
48	2004	29	Dr. Heru Hendrayana	UGM	GeoE	Kyoto	Prof. Dr. AOKI Kenji	27 Feb 05 - 8 Mar 05	10 days	Pre-exploitation Hydrogeologic Model(s) of the Ungaran Geothermal Prospect

Short-term Visit to Japan (JFY 2003 - 2006)

No	JFY	No	Name	MI	Field	JSU	JP Prof.	Period	Duration	Research Topic
49	2004	30	Dr. Nguyen Viet Ky	HCMUT	GeoE	Kyoto	Prof. Dr. AOKI Kenji	27 Feb 05 - 8 Mar 05	10 days	Development of sustainable Slope Protection in Tropical Residual Soils
50	2004	31	Assoc. Prof. Dr. Agung Harijoko	UGM	GeoE	Kyushu	Prof. Dr. WATANABE Koichiro	18 Mar 05 - 27 Mar 05	10 days	Geology of Mineral Resources in Indonesia
51	2004	32	Assoc. Prof. DR. Victor Maglambayan	UP	GeoE	Kyushu	Prof. Dr. WATANABE Koichiro	22 Mar 05 - 31 Mar 05	10 days	Geology of Mineral Resources in Indonesia
52	2004	33	Asst. Prof. Dr. Analiza Rollon	UP	EnvE	Shizuoka	Prof. Dr. NAKASAKI Kiyohiko	7 Mar 05 - 10 Mar 05	4 days	Anaerobic and Aerobic Digestion of Organic Fraction of Municipal Solid Waste
53	2004	34	Asst. Prof. Dr. Ernesto De La Cruz	UP	EnvE	Shizuoka	Prof. Dr. NAKASAKI Kiyohiko	7 Mar 05 - 10 Mar 05	4 days	Anaerobic and Aerobic Digestion of Organic Fraction of Municipal Solid Waste
54	2005	1	Dr. Saksith Chalempong	CU	CE	Hokkaido	Prof. Dr. KAGAYA Seichi	26 Mar 06 - 4 Apr 06	10 days	Transit Accessibility Improvement Project (Phase-I ITAIP I)
55	2005	2	Asst. Prof. Dr. Tirawat Boonyatee	CU	CE	Hokkaido	Prof. Dr. MITACHI Toshiyuki	19 Oct 05 - 24 Oct 05	6 days	Using Bender Element Test and Its Application to Geotechnical Problems
56	2005	3	Assoc. Prof. Dr. Wanchai Teparaksa	CU	CE	(Kobe)	Prof. Dr. SHIBUYA Satoru	28 Feb 06 - 4 Mar 06	5 days	Ground Movement dueto EPB Shield Tunneling in Bangkok Subsoils
57	2005	4	Assoc. Prof. Dr. Phoosak Pheinsusom	CU	CE	Hokkaido	Prof. Dr. NAWA Toyoharu	4 Mar 06 - 11 Mar 06	8 days	Model Calibration for Bridge Maintenance System
58	2005	5	Dr. Vachara Phensupap	CU	CE	Hokkaido	Prof. Dr. TAKANO Shin-ei	4 Mar 06 - 11 Mar 06	8 days	Comparative Study of Implementation of Online Bidding for Contractor Selection in Government Process
59	2005	6	Assoc. Prof. Dr. Florinda Bacani	DLSU	ChE	TTech	Prof. Dr. UNNO Hajime	19 Jun 05 - 28 Jun 05	10 days	Biochemical Degradation of Polymeric Plastic Materials Induced by Microwave Process
60	2005	7	Assoc. Prof. Dr. Yolanda Brondial	DLSU	ChE	TTech	Prof. Dr. KAWASAKI Junjuro	21 Apr 05 - 30 Apr 05	10 days	Separation of Acetone-Toluene-Water System by Salt Distillation Using Sodium Chloride and Cupric Chloride
61	2005	8	Prof. Dr. Servilano Jr. Olano	DLSU	ChE	TTech	Assoc. Prof. Dr. KOSUGE Hitoshi	21 Aug 05 - 30 Aug 05	10 days	CO2 Fixation and Utilization by Conversion to Biomass Using An Integrated Absorption-Biofilm-Algal Photo-bioreactor System
62	2005	9	Prof. Dr. I Made Bendiyasa	UGM	ChE	TTech	Assoc. Prof. Dr. KOSUGE Hitoshi	21 Aug 05 - 30 Aug 05	10 days	CO2 Fixation and Utilization by Conversion to Biomass Using An Integrated Absorption-Biofilm-Algal Photo-bioreactor System
63	2005	10	Assoc. Prof. Dr. Joseph Aurensia	DLSU	ChE	TTech	Prof. Dr. KAWASAKI Junjuro	1 Mar 06 - 10 Mar 06	10 days	Extraction of Flavor from Spices/Herbs Using Supercritical CarbonDioxide
64	2005	11	Dr. Chanin Laliew	CU	EEE	U of Tokyo	Prof. Dr. ARAKAWA Yasuhiko	30 May 05 - 4 Jun 05	5 days	Optical Properties of Linearly Aligned Quantum Dots
65	2005	12	Asst. Prof. Dr. Manop Wongsaisuwan	CU	EEE	U of Tokyo	Prof. Dr. HARA Shinji	24 May 05 - 2 Jun 05	10 days	Development of Infrastructure of Control Systems Technology
66	2005	13	Assoc. Prof. Dr. Genandrialine L. Peralta	UP	EnvE	TTech	Assoc. Prof. Dr. SEKIGUCHI Hidetoshi	26 Feb 06 - 2 Mar 06	6 days	Use of Horn Sonotrode Sonication System to Inactivate E. coli in Drinking Water
67	2005	14	Assoc. Prof. Dr. Jose Munoz	UP	EnvE	TTech	Assoc. Prof. Dr. KUBOUCHI Masatoshi	26 Feb 06 - 2 Mar 06	6 days	Experimental Studies on Production of Biodegradable Cassava based Fool Packaging Material
68	2005	15	Prof. Dr. Ricardo Leonardo Liongson	UP	EnvE	TTech	Prof. Dr. IKEDA Shunsuke	26 Feb 06 - 2 Mar 06	6 days	Surface Water and Groundwater Bodies in Selected Sites in Laos and the Philippines
69	2005	16	Dr. Agung Harijoko	UGM	GeoE	Kyushu	Prof. Dr. WATANABE Koichiro	20 Feb 06 - 1 Mar 06	10 days	The Hydrothermal Alteration and the Histroy of the Ungaran Geothermal Prospect
70	2005	17	Dr. I Wayan Warmada	UGM	GeoE	Kyushu	Prof. Dr. WATANABE Koichiro	20 Feb 06 - 1 Mar 06	10 days	The Hydrothermal Alteration and the Histroy of the Ungaran Geothermal Prospect
71	2005	18	Assoc. Prof. Dr. Dwikorita Karnawati	UGM	GeoE	Kyoto	Prof. Dr. AOKI Kenji	25 Feb 06 - 5 Mar 06	9 days	Development of Sustainable Slope Protection in Tropical Soils for Landslide Risk Management
72	2005	19	Dr. Heru Hendrayana	UGM	GeoE	Kyoto	Prof. Dr. AOKI Kenji	25 Feb 06 - 5 Mar 06	9 days	Development of Sustainable Slope Protection in Tropical Soils for Landslide Risk Management
73	2005	20	Ms. Amphone Vonvixat	NUOL	GeoE	Kyoto	Prof. Dr. AOKI Kenji	25 Feb 06 - 5 Mar 06	9 days	Development of Sustainable Slope Protection in Tropical Soils for Landslide Risk Management
74	2005	21	Asst. Prof. Dr. Surin Kittiomkun	KMITL	ICT	Tokai	Prof. Dr. TOMIYAMA Shigenori	22 May 05 - 28 May 05	7 days	Manifold Similarity Search of Biological Sequences using FPGA
75	2005	22	Assoc. Prof. Dr. Boontee Kruatrachue	KMITL	ICT	Tokai	Prof. Dr. MATSURA Takenobu	11 Feb 06 - 17 Feb 06	7 days	On-line Lao Handwritten Feature with Automatic Noise & Real Feature Identification
76	2005	23	Dr. Visit Hirankitti	KMITL	ICT	Tokai	Prof. Dr. TSUJI Hidekazu	20 Oct 05 - 29 Oct 05	10 days	A Logical Study of Semantic Webs
77	2005	24	Assoc. Prof. Dr. Pitikhate Sooraksa	KMITL	ICT	Tokai	Assoc. Prof. Dr. KOMINE Noriyuki	25 Sep 05 - 29 Sep 05	5 days	Multimedia Encryption using Tools in System Engineering
78	2005	25	Asst. Prof. Dr. Sakchai Thepchaksurat	KMITL	ICT	Tokai	Prof. Dr. ISHII Hiroshi	9 Oct 05 - 15 Oct 05	7 days	QOS-Based Multimedia Service in Wireless Ad-Hoc Networks
79	2005	26	Prof. Dr. Zahari Taha	UM	ManuE	TTech	Assoc. Prof. Dr. KURABAYASHI Daisuke	7 Aug 05 - 10 Aug 05	4 days	PC-Base Control of a Tele-operated Robot for Search or Inspection Tasks
80	2005	27	Dr. Mujowidodo Kartidjo	ITB (INA)	ManuE	Keio	Prof. Dr. SUGA Yasuo	6 Aug 05 - 10 Aug 05	5 days	Autonomous Unmanned Aerial Vehicle
81	2005	28	Mr. Azuddin Mamat	UM	ManuE	Tokai	Prof. Dr. ARIGA Tadashi	19 Sep 05 - 25 Sep 05	7 days	Development and Fabrication of Water Cooling Channel for Injection Mold through Machining and Brazing Technology
82	2005	29	Dr. Mohd Hamdi Abdul Shukor	UM	ManuE	Kyoto	Prof. Dr. IDE Ari Ektessabi	21 Nov 05 - 27 Nov 05	7 days	Fabrication of Hydroxyapatite Coating Using Magnetron Sputtering
83	2005	30	Dr. Mohd Hamdi Abdul Shukor	UM	ManuE	Keio	Prof. Dr. MITSUI Kimiyuki	19 Sep 05 - 25 Sep 05	7 days	Investigation of Vibration of Cathode in EDM
84	2005	31	Assoc. Prof. Dr. Luay Bakir Hussain	USM	MatE	Tokai	Prof. Dr. MATSUSHITA Junichi	5 Jun 05 - 11 Jun 05	7 days	Nano Structural Electrode Tips for Spot Welding Application
85	2005	32	Dr. Hussain Zuhailawati	USM	MatE	TUT	Prof. Dr. UMEMOTO Minoru	4 Mar 06 - 9 Mar 06	6 days	Properties of Dispersion Strengthened Coper Made by Mechanical Alloying of Copper-Niobium-Graphite Powder
86	2005	33	Prof. Dr. Hanafi Ismail	USM	MatE	TUT	Prof. Dr. TAKEICHI Tsutomu	14 Dec 05 - 21 Dec 05	8 days	Preparation and Properties of Polymer Clay Nano Composites
87	2005	34	Prof. Dr. Radzali Othman	USM	MatE	Kyoto	Prof. Dr. KAWASHITA Masakazu	4 Mar 06 - 10 Mar 06	7 days	Development of Bioactive Glass-Ceramics/Polymer Composites for Bone-Graft
88	2005	35	Dr. Mariatti Jaafar	USM	MatE	Kyoto	Prof. Dr. KAWASHITA Masakazu	4 Mar 06 - 10 Mar 06	7 days	Development of Bioactive Glass-Ceramics/Polymer Composites for Bone-Graft
89	2005	36	Dr. Abdurrahchim Halim	ITB (INA)	ME/AE	Hokkaido	Prof. Dr. KUDO Kazuhiko	2 Aug 05 - 13 Aug 05	12 days	Solar Dryer
90	2005	37	Dr. Iman Katolaksano Reksowardojo	ITB (INA)	ME/AE	Hokkaido	Prof. Dr. OGAWA Hideyuki	9 Nov 05 - 13 Nov 05	5 days	Bio Fuel
91	2005	38	Assoc. Prof. Dr. Ichsan Setya Putra	ITB (INA)	ME/AE	TUT	Prof. Dr. HOMMA Hiroomi	6 Mar 06 - 16 Mar 06	11 days	Development of Mesh-Free Method for Dynamic Fracture Problems
92	2006	1	Dr. Indrawanto	ITB (INA)	ME/AE	TUT	Assoc. Prof. Dr. YANADA Hideki	18 Mar 07 - 24 Mar 07	7 days	Identification and Control of Hydraulic Servomechanism using Neural Network
93	2006	2	Dr. Iman Katolaksano Reksowardojo	ITB (INA)	ME/AE	Hokkaido	Prof. Dr. OGAWA Hideyuki	4 Mar 07 - 13 Mar 07	13 days	Bio Fuel
94	2006	3	Dr. Lavi R. Zuhailawati	ITB (INA)	ME/AE	Keio	Prof. Dr. OBI Shinnosuke	27 Mar 07 - 31 Mar 07	5 days	Experimental Investigation of Three-Dimensional Flow Separation using PIV
95	2006	4	Assoc. Prof. Dr. Ichsan Setya Putra	ITB (INA)	ME/AE	TUT	Prof. Dr. HOMMA Hiroomi	16 Jul 06 - 25 Jul 06	10 days	Very High Speed Ballistic Impact on Composite-Ceramics Plate
96	2006	5	Assoc. Prof. Dr. Ichsan Setya Putra	ITB (INA)	ME/AE	TTech	Prof. Dr. KISHIMOTO Kikuo	6 Mar 07 - 11 Mar 07	6 days	Investigation of Mechanical Behaviours of Aluminum Foam Sandwich Structure
97	2006	6	Dr. Taufiq Mulyanto	ITB (INA)	ME/AE	U of Tokyo	Prof. Dr. SUZUKI Shinji	20 Mar 07 - 27 Mar 07	7 days	Development of A Micro/Mini UAV
98	2006	7	Dr. Tatacipta Dingtantara	ITB (INA)	ME/AE	TTech	Prof. Dr. KISHIMOTO Kikuo	18 Dec 06 - 27 Dec 06	10 days	(To formulate the Collaborative Research)
99	2006	8	Prof. Dr. Ngo Sy Loc	HUT	ME/AE	TUT	Prof. Dr. HOMMA Hiroomi	6 Feb 07 - 15 Feb 07	10 days	Digital Image Correlation 3D Stress Measurements
100	2006	9	Mr. Sopheak Rey	ITC	ME/AE	Hokkaido	Prof. Dr. OGAWA Hideyuki	4 Mar 07 - 13 Mar 07	10 days	Bio Fuel
101	2006	10	Assoc. Prof. Dr. Bui Cong Thanh	HCMUT	CE	Hokkaido	Prof. Dr. KAGAMI Hiroshi	5 Feb 07 - 12 Feb 07	8 days	Estimation of Probable Earthquake Ground Motions in Bangkok

Short-term Visit to Japan (JFY 2003 - 2006)

No	JFY	No	Name	MI	Field	JSU	JP Prof.	Period	Duration	Research Topic
102	2006	11	Asst. Prof. Dr. Alexis Morales Fillone	DLSU	CE	Hokkaido	Prof. Dr. KAGAYA Seichi	23 Oct 06 - 1 Nov 06	10 days	Transit Accessibility Improvement Project - Phase I (TAIP I)
103	2006	12	Asst. Prof. Dr. Chatpan Chintanapakdee	CU	CE	Hokkaido	Prof. Dr. KAGAMI Hiroshi	5 Feb 07 - 14 Feb 07	10 days	Estimation of Probable Earthquake Ground Motions in Bangkok
104	2006	13	Assoc. Prof. Dr. Wanchai Teparaksa	CU	CE	Hokkaido	Prof. Dr. MITACHI Toshiyuki	5 Feb 07 - 10 Feb 07	6 days	Ground Response due to Deep Excavation in Bangkok Subsoils
105	2006	14	Dr. Suched Likitersuang	CU	CE	Hokkaido	Prof. Dr. FUKUDA Fumihiko	5 Feb 07 - 14 Feb 07	10 days	(To formulate the Collaborative Research)
106	2006	15	Assoc. Prof. Dr. Sorawit Narupiti	CU	CE	Hokkaido	Assoc. Prof. Dr. NAKATSUJI Tkaashi	5 Feb 07 - 14 Feb 07	10 days	Improvement of Urban Travel using Advanced Traveler Information System (ATIS)
107	2006	16	Dr. Kasem Choosakul	CU	CE	Hokkaido	Assoc. Prof. Dr. NAKATSUJI Tkaashi	5 Feb 07 - 14 Feb 07	10 days	Stated Preference Analysis of Urban Bus Attributes in Phnom Penh
108	2006	17	Dr. Noppadon Jokkaw	CU	CE	Hokkaido	Assoc. Prof. Dr. TAKANO Shin-ei	5 Feb 07 - 11 Feb 07	7 days	Development a Construction Road Map by Comparing with Thailand Construction Industry
109	2006	18	Assoc. Prof. Dr. Tanit Tongthong	CU	CE	Hokkaido	Assoc. Prof. Dr. TAKANO Shin-ei	5 Feb 07 - 11 Feb 07	7 days	Development a Construction Road Map by Comparing with Thailand Construction Industry
110	2006	19	Asst. Prof. Dr. Songphol Kanjanachuchai	CU	EEE	TI Tech	Prof. Dr. ODA Shunri	18 Oct 06 - 28 Oct 06	11 days	Growth and Characterization of InAs Quantum Dots on Cross-hatch Virtual Substrates
111	2006	20	Asst. Prof. Dr. Supavadee Aramvith	CU	EEE	Hokkaido	Prof. Dr. MIYANAGA Yoshikazu	21 Jan 07 - 2 Feb 07	13 days	(To formulate the Collaborative Research)
112	2006	21	Prof. Dr. Rowena Cristina L. Guevara	UP	EEE	Hokkaido	Prof. Dr. MIYANAGA Yoshikazu	28 Jan 07 - 3 Feb 07	7 days	(To formulate the Collaborative Research)
113	2006	22	Dr. Naebboon Hoonchareon	CU	EEE	U of Tokyo	Prof. Dr. YOKOYAMA Akihiko	4 Feb 07 - 13 Feb 07	10 days	(To formulate the Collaborative Research)
114	2006	23	Dr. Kulyos Audomvongserree	CU	EEE	U of Tokyo	Prof. Dr. YOKOYAMA Akihiko	4 Feb 07 - 13 Feb 07	10 days	(To formulate the Collaborative Research)
115	2006	24	Asst. Prof. Dr. Nisachon Tangsangiumvisai	CU	EEE	TI Tech	Prof. Dr. NISHIHARA Akinoro	15 Mar 07 - 21 Mar 07	7 days	(To formulate the Collaborative Research)
116	2006	25	Dr. Zainovia Lockman	USM	MatE	TUT	Assoc. Prof. Dr. MATSUDA Atsunori	18 Feb 07 - 23 Feb 07	6 days	Chemical Synthesis of Nanocrystals of Semi-Conducting Doped Tetragonal Zirconia
117	2006	26	Prof. Dr. Radzali Othman	USM	MatE	TUT	Prof. Dr. UMEMOTO Minoru	5 Aug 06 - 12 Aug 06	8 days	Properties of Dispersion Strengthened Copper Made by Mechanical Alloying of Copper-Niobium-Graphite Powders
118	2006	27	Dr. Mariatti Jaafar	USM	MatE	Kyushu	Assoc. Prof. Dr. TODO Mitsugu	19 Feb 07 - 25 Feb 07	7 days	Development of Bagasse Fiber Reinforced Polymer Composites
119	2006	28	Prof. Dr. Radzali Othman	USM	MatE	Kyushu	Prof. Dr. ISHIKAWA Kunio	19 Feb 07 - 25 Feb 07	7 days	Synthesis of Nano-bioresorbable β -TCP (Tricalcium Phosphate) Bioceramics
120	2006	29	Assoc. Prof. Dr. Luay Bakir Hussain	USM	MatE	Tokai	Prof. Dr. MATSUSHITA Junichi	20 Jun 06 - 27 Jun 06	7 days	(To formulate the Collaborative Research)
121	2006	30	Dr. Chow Wen Shyang	USM	MatE	TUT	Prof. Dr. TAKEICHI Tsutomu	3 Feb 07 - 11 Feb 07	9 days	(To formulate the Collaborative Research)
122	2006	31	Dr. Hazizan Md Akil	USM	MatE	Kyoto	Prof. Dr. IWATA Hiroo	13 Jan 07 - 20 Jan 07	8 days	Cartilage Tissue of PCL/PLLA Copolymer Scaffold with Bio-functionality and Growth Factor
123	2006	32	Assoc. Prof. Korakanh Pasomsouk	NUOL	MatE	Kyushu	Assoc. Prof. Dr. TODO Mitsugu	19 Feb 07 - 25 Feb 07	7 days	Development of Bagasse Fiber Reinforced Polymer Composites
124	2006	33	Dr. Vo Huu Thao	HUT	MatE	TUT	Prof. Dr. TAKEICHI Tsutomu	25 Feb 07 - 4 Mar 07	8 days	Combined Effect of Organoclay and Carbon Black on Properties of Natural Rubber NanoComposites
125	2006	34	Dr. Do Quang Minh	HCMUT	MatE	Kyushu	Prof. Dr. ISHIKAWA Kunio	11 Mar 07 - 16 Mar 07	6 days	Synthesis of Nano-bioresorbable β -TCP (Tricalcium Phosphate) Bioceramics
126	2006	35	Dr. Watchara Chatwiriya	KMITL	ICT	Tokai	Prof. Dr. KONDO Shozo	25 Jun 06 - 1 Jul 06	7 days	Automatic Vehicle Classification
127	2006	36	Assoc. Prof. Dr. Suphamit Chittayasothorn	KMITL	ICT	Tokai	Prof. Dr. OHARA Shigeyuki	8 Oct 06 - 14 Oct 06	7 days	A Spatio-temporal Database Model for Virtual Reality
128	2006	37	Assoc. Prof. Dr. Boontee Kruatrachue	KMITL	ICT	Tokai	Prof. Dr. MATSUURA Takenobu	18 Sep 06 - 27 Sep 06	10 days	On-Line Lao Handwritten Feature with Automatic Noise and Real Feature Identification
129	2006	38	Prof. Dr. Zahari Taha	UM	ManuE	Keio	Prof. Dr. MITSUI Kimiyuki	2 Oct 06 - 6 Oct 06	5 days	Monitoring of Bearing Defects Using Acoustic Emission (AE) Application
130	2006	39	Mr. Norhafizan Ahmad	UM	ManuE	Keio	Prof. Dr. SUGA Yasuo	2 Oct 06 - 6 Oct 06	5 days	Development of a Software for Designing and Manufacturing of an Impeller
131	2006	40	Dr. Mohd Hamdi Abdul Shukor	UM	ManuE	Kyoto	Prof. Dr. IDE Ari Ektessabi	2 Nov 06 - 10 Nov 06	9 days	Development and Fabrication of Hydroxyapatite Bone Graft for Implant Application
132	2006	41	Assoc. Prof. Dr. Alva Edy Tontowi	UGM	ManuE	Tokai	Prof. Dr. ARIGA Tadashi	1 Nov 06 - 8 Nov 06	8 days	Design and Manufacturing of Brazed Joint Laminated Mold with Conformal Cooling Channel for Plastic Injection Molding
133	2006	42	Ms. Siti Nurmaya Musa	UM	ManuE	Keio	Prof. Dr. MITSUI Kimiyuki	2 Nov 06 - 10 Nov 06	9 days	(To formulate the Collaborative Research)
134	2006	43	Dr. Mohd Hamdi Abdul Shukor	UM	ManuE	Kyoto	Prof. Dr. IDE Ari Ektessabi	11 Jun 06 - 18 Jun 06	8 days	Fabrication of Hydroxyapatite Coating Using Magnetron Sputtering
135	2006	44	Dr. Siti Zariah Md Dawal	UM	ManuE	Keio	Prof. Dr. AOYAMA Hideki	26 Mar 07 - 31 Mar 07	6 days	(To formulate the Collaborative Research)
136	2006	45	Dr. Nukman Yusoff	UM	ManuE	Keio	Prof. Dr. MITSUI Kimiyuki	26 Mar 07 - 31 Mar 07	6 days	(To formulate the Collaborative Research)
137	2006	46	Dr. Thai Thi Thu Ha	UM	ManuE	Keio	Prof. Dr. SUGA Yasuo	26 Mar 07 - 31 Mar 07	6 days	CAD/CAM integration of PC-based retrofit milling
138	2006	47	Prof. Dr. Elmer P. Dadios	DLSU	ManuE	Keio	Prof. Dr. SUGA Yasuo	26 Mar 07 - 31 Mar 07	6 days	Multi-feature Recognition for Autonomous Mobile Robot
139	2006	48	Prof. Dr. Pag-asa D. Gaspillo	DLSU	ChE	TI Tech	Prof. Dr. KAWASAKI Junjiro	9 Nov 06 - 14 Nov 06	6 days	Extraction of Flavor from Spices / Herbs using Supercritical Carbon Dioxide
140	2006	49	Assoc. Prof. Dr. Julius B. Maridable	DLSU	ChE	TI Tech	Prof. Dr. KAWASAKI Junjiro	9 Nov 06 - 14 Nov 06	6 days	Extraction of Flavor from Spices / Herbs using Supercritical Carbon Dioxide
141	2006	50	Assoc. Prof. Dr. Luis F. Razon	DLSU	ChE	TI Tech	Assoc. Prof. Dr. AIDA Takashi	5 Nov 06 - 10 Nov 06	6 days	Catalytic Processes for the Production of Syngas from Natural Gas
142	2006	51	Asst. Prof. Dr. Marylou M. Uy	DLSU	ChE	TI Tech	Prof. Dr. SEKIGUCHI Hidetoshi	28 Oct 06 - 6 Nov 06	10 days	Extraction of Essential Oil of Ginger by Microwave Assisted Process
143	2006	52	Asst. Prof. Dr. Wilheliza Baraoidan	DLSU	ChE	TI Tech	Prof. Dr. SUZUKI Masaaki	28 Oct 06 - 6 Nov 06	10 days	Solids (DS) and High Concentration of Chemical Oxygen Demand (COD) using Coagulation and Flocculation
144	2006	53	Assoc. Prof. Dr. Suryo Purwono	UGM	ChE	TI Tech	Assoc. Prof. Dr. AIDA Takashi	17 Feb 07 - 25 Feb 07	9 days	Catalytic Processes for the Production of Syngas from Natural Gas
145	2006	54	Prof. Dr. Servillano Jr. Olano	DLSU	ChE	TI Tech	Assoc. Prof. Dr. KOSUGE Hitoshi	5 Jan 07 - 14 Jan 07	10 days	CO ₂ Fixation and Utilization by Conversion to Biomass using an Integrated Absorption-Biofilm-Algal Photo-bioreactor System
146	2006	55	Assoc. Prof. Dr. Joseph Auresenia	DLSU	ChE	TI Tech	Assoc. Prof. Dr. KOSUGE Hitoshi	5 Jan 07 - 14 Jan 07	10 days	CO ₂ Fixation and Utilization by Conversion to Biomass using an Integrated Absorption-Biofilm-Algal Photo-bioreactor System
147	2006	56	Assoc. Prof. Dr. Doan Thai Hoa	HUT	ChE	TI Tech	Prof. Dr. KAWASAKI Junjiro	25 Jan 07 - 31 Jan 07	7 days	(To formulate the Collaborative Research)
148	2006	57	Dr. Davin Uy	ITC	ChE	TI Tech	Prof. Dr. KAWASAKI Junjiro	25 Jan 07 - 31 Jan 07	7 days	(To formulate the Collaborative Research)
149	2006	58	Assoc. Prof. Dr. Analiza P. Rollon	UP	EnvE	(Shizuoka)	Prof. Dr. NAKASAKI Kiyohiko	5 Aug 06 - 12 Aug 06	8 days	Modeling pH and Temperature Effects on Anaerobic Stabilization of Cellulose and Nitrogen-Rich Organic Solid Wastes
150	2006	59	Asst. Prof. Dr. Ernesto De La Cruz	UP	EnvE	(Shizuoka)	Prof. Dr. NAKASAKI Kiyohiko	5 Aug 06 - 12 Aug 06	8 days	(To formulate the Collaborative Research)
151	2006	60	Asst. Prof. Dr. Maria Lourders P. Dalida	UP	EnvE	TI Tech	Assoc. Prof. Dr. YOSHIKAWA Shiro	12 Nov 06 - 19 Nov 06	8 days	Denitrification of Landfill Leachate Using Membrane BioReactor (MBR)
152	2006	61	Asst. Prof. Dr. Ernesto De La Cruz	UP	EnvE	TI Tech	Assoc. Prof. Dr. TANJI Yoshinori	11 Feb 07 - 17 Feb 07	7 days	Isolation and Characterization of Azo-dye Degrading Microorganisms
153	2006	62	Asst. Prof. Dr. Eligia Clemente	UP	EnvE	TI Tech	Assoc. Prof. Dr. TANJI Yoshinori	11 Feb 07 - 17 Feb 07	7 days	(To formulate the Collaborative Research)
154	2006	63	Dr. Rizalinda de Leon	UP	EnvE	TI Tech	Assoc. Prof. Dr. TANJI Yoshinori	11 Feb 07 - 17 Feb 07	7 days	(To formulate the Collaborative Research)

Short-term Visit to Japan (JFY 2003 - 2006)

No	JFY	No	Name	MI	Field	JSU	JP Prof.	Period	Duration	Research Topic
155	2006	64	Mr. Chankhachone Sonemanvong	NUOL	EnvE	TTech	Assoc. Prof. Dr. TANJI Yoshinori	10 Feb 07 - 17 Feb 07	8 days	(To formulate the Collaborative Research)
156	2006	65	Dr. Nguyen Phuoc Dan	HCMUT	EnvE	TTech	Assoc. Prof. Dr. YOSHIKAWA Shiro	12 Nov 06 - 19 Nov 06	8 days	(To formulate the Collaborative Research)
157	2006	66	Prof. Dr. Wilfredo I. Jose	UP	EnvE	TTech	Prof. Dr. SHODA Makoto	11 Nov 06 - 19 Nov 06	9 days	Anaerobic and Aerobic Treatment of Food Processing Wastewater Using Discarded Solid Waste
158	2006	67	Dr. Agung Harjoko	UGM	GeoE	Kyushu	Prof. Dr. WATANABE Koichiro	10 Nov 06 - 17 Nov 06	8 days	Alternative Energy Resources (Silica scaling problem at the geothermal field)
159	2006	68	Dr. Arifudin	UGM	GeoE	Kyushu	Prof. Dr. WATANABE Koichiro	4 Dec 06 - 14 Dec 06	11 days	Alternative Energy Resources (Silica scaling problem at the geothermal field)
160	2006	69	Dr. Heru Hendrayana	UGM	GeoE	Kyushu	Prof. Dr. JINNO Kenji	4 Feb 07 - 13 Feb 07	10 days	Toward Sustainable GeoEnvironment and Geohazard Management
161	2006	70	Dr. I Wayan Warmada	UGM	GeoE	Kyushu	Prof. Dr. ITOI Ryuichi	4 Feb 07 - 13 Feb 07	10 days	Integrated Study on Earth Resources within the Island Arc and Continental Margin Geological Setting of SE Asia
162	2006	71	Mr. Phat Bone	ITC	GeoE	Kyushu	Prof. Dr. JINNO Kenji	4 Feb 07 - 13 Feb 07	10 days	Toward Sustainable GeoEnvironment and Geohazard Management
163	2006	72	Ms. Hong Hanh Thi Hoang	HUT	GeoE	Kyushu	Prof. Dr. ITOI Ryuichi	4 Feb 07 - 13 Feb 07	10 days	Integrated Study on Earth Resources within the Island Arc and Continental Margin Geological Setting of SE Asia
164	2006	73	Dr. Subagyo Pramumijoyo	UGM	GeoE	Kyoto	Prof. Dr. AOKI Kenji	25 Feb 07 - 6 Mar 07	10 days	Development of Sustainable Slope Protection in Tropical Residual Soils
165	2006	74	Assoc. Prof. Dr. Dwikorita Karnawati	UGM	GeoE	Kyoto	Prof. Dr. AOKI Kenji	25 Feb 07 - 6 Mar 07	10 days	Development of Sustainable Slope Protection in Tropical Residual Soils
166	2006	75	Dr. Hj. Ismail Abustan	USM	GeoE	Kyoto	Prof. Dr. AOKI Kenji	25 Feb 07 - 6 Mar 07	10 days	Development of Sustainable Slope Protection in Tropical Residual Soils
167	2006	76	Mr. Nhinxay Visane	NUOL	GeoE	Kyoto	Prof. Dr. AOKI Kenji	25 Feb 07 - 6 Mar 07	10 days	Development of Sustainable Slope Protection in Tropical Residual Soils

9. 広報実績（ウェブサイト、メディア報道、外部問合せ等）

Public Relations Statistics
(As of 26 Mar 07)

Access to SEED-Net website

Total visits 213,227 times
(See details in Global & Time Stats)

Inquiries from outside

E-mails 20-30/year
Phone calls >10/year
Face to face or visits >10/year
Total ~40 inquiries per year

Utilization of SEED-Net website

Mailing list 676 members

Bulletin board (using Yahoo! Group service) 5 boards

CU board 71 members
DLSU board 8 members
ITB board 33 members
UGM board 37 members
NUS board 12 members
Total 161 members

Press coverage

Before 2005 7 times
2005 30 times
2006 26 times
Total 63 times

(See details in Media Coverage Log)

Monitoring Visits at Host Institutions

Monitoring visit is part of the monitoring scheme of the quality assurance of the project. AUN/SEED-Net had regular meetings with the faculty staff and students at the host institutions on a yearly basis. The meeting generally comprises discussion with advisors and faculty staff on all concerned programs, discussion with the students and wrap-up session, which brings all concerns raised by the students to the attention of the faculty staff for possible solutions. Some host institutions organised the monitoring meeting together with the orientation for new students.

No.	HI	Field	1st Visit	2nd Visit	3rd Visit
1	CU	CE & EEE	Dec 12, 2003	Jun 23, 2005	Nov 22, 2006
2	KMITL	ICT	Dec 16, 2003	Jun 13, 2005	Nov 27, 2006
3	DLSU	ChE	Jan 22, 2004	Nov 7, 2005	Sep 28, 2006
4	UP	EnvE	Jan 23, 2004	Nov 8, 2005	Sep 29, 2006
5	UM	ManuE	Feb 10, 2004	Jul 12, 2005	Jul 6, 2006
6	USM	MatE	Feb 11, 2004	Jul 7, 2005	Jul 18, 2006
7	ITB	ME/AE	May 31, 2004	Sep 14, 2005	Sep 25, 2006
8	UGM	GeoE	Jun 1, 2004	Sep 15, 2005	Sep 26, 2006
9	NTU	all	Nov 22, 2004	Jul 26, 2005	Aug 17, 2006
10	NUS	all	Nov 22, 2004	Jul 25, 2005	Aug 18, 2006

(*) Sample of reports are available in separate documents

Progress Report

In addition to the monitoring visits, the students are also monitored through the progress reports which show their progress on study and research as well as frank comments on the coursework, programs and others. The students are required to submit the progress report to AUN/SEED-Net at the end of each semester, together with the transcript and thesis abstract/report (if any)

Graduating students are also required to submit this report after graduation, where the last part of the report is for their comments and suggestions.

The progress report comprises

- Part A Coursework
- Part B Thesis
- Part C General
- Part D Graduate Interview

Remarks *Sample of progress reports are available in separate documents

